

---

美 里 町

---

# 野中／瘦ヶ谷戸

---

一般国道254号猪俣バイパス道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 1

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 野中遺跡第1号住居跡出土土器（第9図1）



2 野中遺跡第4号住居跡出土土書土器「古家」（第38図1）

## 野中・瘦ヶ谷戸遺跡の紹介

両遺跡は北西―南東に隣接する遺跡で、美里町の南東部大字猪俣<sup>いのまた</sup>に所在し、JR 八高線松久駅から南へ約2kmの位置にあります。地形的には、秩父山地を背にした松久<sup>まつひさ</sup>丘陵の末端に当たり、標高は90mほどです。

発掘調査は、遺跡の北側を通る国道254号の渋滞の解消を目的とした「猪俣バイパス」の建設に伴って行われました。丘陵から流れ出た猪俣川沿いの調査区は、幅約12mで長さ300m以上と細長く、調査面積は両遺跡合わせて3,317㎡です。

発掘調査の結果、野中遺跡は古墳時代（4世紀）と奈良・平安時代を主体とし、瘦ヶ谷戸遺跡は縄文時代を主体とする遺跡であることが分かりました。

特に野中遺跡では、住居跡だけでなく、昔の川辺から古墳時代の土器が多量に出土しました。また、装飾性の高い特殊な土器も多く含まれていることから、何らかのマツリとの関連が考えられます。また、平安時代の住居跡からは、魚獲りに使ったたくさんの土<sup>ど</sup>錘<sup>すい</sup>や、「古家」と墨で書いた土器も出土しており注目されます。

なお、猪俣川は瘦ヶ谷戸遺跡の西で天神川とひとつになりますが、その合流地点の近くには「こぶ石」を中心とする祭祀遺跡があり、古墳時代から水に係わるマツリが行われてきたようです。

## 序

埼玉県では「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念とし、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策の整備を進めております。

国道254号は、古くは川越街道と呼ばれ、JR高崎線沿いの国道17号とともに、県域の中央部を貫く基幹国道として機能してきました。しかしながら、近年交通量も増し、特に、遺跡近くの野中の交差点付近では日常的に激しい交通渋滞が発生することから、早くからバイパス建設の計画が進められてきました。

さて、遺跡のある美里町は、秩父山地から続く丘陵を背にした緑豊かな町であります。国の重要無形民俗文化財の「猪俣百八燈」<sup>いのまたりやくはっとう</sup>の行事や中世武士団の武蔵七党の一、猪俣党の本拠地として知られるほか、各時代の遺跡も数多く残されております。

この度、バイパスの建設予定地内の野中・癪ヶ谷戸両遺跡に埋蔵文化財の存在が確認されたことから、その取り扱いについて埼玉県市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

調査の結果、両遺跡とも縄文時代から近世までの遺構や遺物が発見されましたが、特に野中遺跡では、古墳時代前期（4世紀）と奈良・平安時代の竪穴住居跡が見つかり、古くから人々の生活が営まれてきた地であることがわかりました。また、古墳時代前期の装飾性の高い特殊な土器が数点出土していますが、一遺跡からの出土数としては極めて稀な例として注目されます。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県県土整備部道路街路課、本庄県土整備事務所、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、美里町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます

平成23年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 藤野龍宏

## 例言

1. 本書は、児玉郡美里町に所在する野中遺跡及び癩ヶ谷戸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

野中遺跡  
児玉郡美里町大字猪俣320-1番地他  
平成21年12月2日付け 教生文第2-54号  
癩ヶ谷戸遺跡  
児玉郡美里町大字猪俣345-1番地他  
平成21年12月7日付け 教生文第2-56号
3. 発掘調査は、国道254号猪俣バイパス新設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も同課から委託を受け、当事業団が実施した。
4. 事業の委託業務名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成21年度）  
「地域活力基盤創出交付金（改築）整備工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）」  
整理報告書作成事業（平成22年度）  
「社会資本整備総合交付金（改築）工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託）」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。

発掘調査については、平成21年12月1日から12月28日まで磯崎 一・黒坂禎二が担当し、平成22年1月4日から3月24日まで金子直行・岩瀬 謙・黒坂・吉田 稔が担当して実施した。

整理報告書作成事業は、平成22年10月1日から平成23年3月31日まで宮井英一が担当して実施し、事業団報告書第377集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量及び空中写真撮影は以下の通り委託した。

基準点測量  
有限会社 ジョブプランニング  
空中写真撮影  
中央航業株式会社
7. 口絵用の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、遺物写真の撮影は宮井が行った。
9. 出土品の整理・図版作成は宮井が行い、田中広明・上野真由美の協力を得た。
10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、V-3を田中、その他を宮井が行った。
11. 本書の編集は、宮井が行った。
12. 本書に掲載した資料は、平成23年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
13. 発掘調査や本書の作成にあたり、美里町教育委員会をはじめ関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

## 凡例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系(新測地系)による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36°00'00"、東経139°50'00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。各遺跡の基準座標は次のとおりである。

野中遺跡：X20グリッド北西杭の座標は、X=17550.000m、Y=-58460.000m(北緯36°09'23"1035、東経139°11'00"9995)で、杭上の標高は92.767mである。

壱ヶ谷遺跡：F6グリッド北西杭の座標は、X=17730.000m、Y=-58600.000m(北緯36°09'28"9131、東経139°10'55"3501)で、杭上の標高は88.680mである。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本(1グリッド)としている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、南方向にアルファベット(A・B・C…)、東方向に数字(1・2・3…)を付し、両者を組み合わせで呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した主な遺構の略号は、以下のとおりである。

SD…溝跡      SE…井戸跡  
SJ…竪穴住居跡    SK…土壇  
P…ピット(小穴・柱穴/GPはグリッドピットの略)
5. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面に示す。

全測図 1/400  
遺構図 1/60  
遺物実測図・拓本 1/3・1/4  
金属製品 1/2・1/4
6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
7. 遺物観察表については以下のとおりである。
  - ・遺物の計測値はcm、重さはgを単位とする。
  - ・発掘時の取上げ番号(注記番号)は備考欄に示した
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000・1/50,000地形図及び美里町都市計画図(1/10,000)である。
9. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	IV 瘦ヶ谷戸遺跡の調査	70
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 遺跡の概要	70
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 遺構と遺物	73
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	(1) 土壌	73
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 溝跡	76
1. 地理的環境	4	(3) ピット	81
2. 歴史的環境	5	(4) 遺構外出土遺物	85
III 野中遺跡の調査	9	3. 第2区土層調査	96
1. 遺跡の概要	9	V 調査のまとめ	99
2. 古墳時代前期の遺構と遺物	13	1. 成果と課題	99
(1) 竪穴住居跡	13	(1) 野中遺跡	99
(2) 遺物集中区	31	(2) 瘦ヶ谷戸遺跡	99
3. 古墳時代後期以降の遺構と遺物	45	2. 土鍾について	100
(1) 竪穴住居跡	45	3. 墨書土器「古家」について	102
(2) 井戸跡	58	引用・参考文献	
(3) 土壌	59		
(4) 溝跡	62		
(5) ピット	64		
4. 遺構外出土遺物	66		

写真図版

抄録

## 挿 図 目 次

第1図	埼玉の地形	4	第35図	第3号住居跡	45
第2図	周辺の遺跡	6	第36図	第3号住居跡出土遺物	46
第3図	遺跡位置図	8	第37図	第4号住居跡	47
<b>野中遺跡</b>					
第4図	野中遺跡調査範囲	10	第38図	第4号住居跡出土遺物	48
第5図	野中遺跡調査区全測図	11	第39図	第7号住居跡	50
第6図	野中遺跡調査区等高線図	12	第40図	第7号住居跡出土遺物(1)	51
第7図	第1号住居跡・掘り方	14	第41図	第7号住居跡出土遺物(2)土錘	52
第8図	第1号住居跡遺物分布図	15	第42図	第8号住居跡	53
第9図	第1号住居跡出土遺物(1)	16	第43図	第8号住居跡出土遺物	53
第10図	第1号住居跡出土遺物(2)	19	第44図	第9号住居跡	54
第11図	第1号住居跡出土遺物(3)	20	第45図	第9号住居跡掘り方	55
第12図	第1号住居跡出土遺物(4)	21	第46図	第9号住居跡出土遺物	56
第13図	第5号住居跡	24	第47図	第12号住居跡	57
第14図	第5号住居跡掘り方	25	第48図	第12号住居跡出土遺物	58
第15図	第5号住居跡出土遺物	25	第49図	井戸跡	58
第16図	第6号住居跡	26	第50図	土壇分布図	59
第17図	第6号住居跡掘り方	27	第51図	土壇(1)	60
第18図	第6号住居跡出土遺物	28	第52図	土壇(2)	61
第19図	第10号住居跡	29	第53図	土壇出土遺物	62
第20図	第10号住居跡出土遺物	29	第54図	溝跡(1)	63
第21図	第11号住居跡	29	第55図	溝跡(2)	64
第22図	第11号住居跡出土遺物	30	第56図	ピット分布図	64
第23図	遺物集中区全体図	32	第57図	ピット	65
第24図	遺物集中区A・C	33	第58図	遺構外出土遺物(1)	67
第25図	遺物集中区B	34	第59図	遺構外出土遺物(2)	68
第26図	器種別分布図	35	第60図	遺構外出土遺物(3)	69
第27図	第3区土層断面図	36	<b>瘻ヶ谷戸遺跡</b>		
第28図	第4区土層断面図	37	第61図	瘻ヶ谷戸遺跡基本層序図	70
第29図	遺物集中区垂直分布図(1)	38	第62図	瘻ヶ谷戸遺跡調査範囲	71
第30図	遺物集中区垂直分布図(2)	39	第63図	瘻ヶ谷戸遺跡調査区全測図	72
第31図	遺物集中区出土遺物(1)	40	第64図	土壇	74
第32図	遺物集中区出土遺物(2)	41	第65図	土壇出土遺物	75
第33図	遺物集中区出土遺物(3)	42	第66図	溝跡(1)	76
第34図	第2号住居跡	45	第67図	溝跡(2)	77
			第68図	溝跡(3)	78



第69図	溝跡 (4)	79	第80図	遺構外出土遺物 (5)	91
第70図	溝跡 (5)	80	第81図	遺構外出土遺物 (6)	92
第71図	溝跡出土遺物	81	第82図	遺構外出土遺物 (7)	93
第72図	ピット分布図	81	第83図	遺構外出土遺物 (8)	94
第73図	ピット (1)	82	第84図	遺構外出土遺物 (9)	95
第74図	ピット (2)	83	第85図	第2区土層断面 (1)	96
第75図	ピット出土遺物	84	第86図	第2区土層断面 (2)	97
第76図	遺構外出土遺物 (1)	86	第87図	第2区土層断面 (3)	98
第77図	遺構外出土遺物 (2)	87	第88図	土錘分類図	100
第78図	遺構外出土遺物 (3)	88	第89図	「古家」の筆順	102
第79図	遺構外出土遺物 (4)	89			

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	6	第12表	第8号住居跡出土遺物観察表	53
<b>野中遺跡</b>			第13表	第9号住居跡出土遺物観察表	57
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	21	第14表	第12号住居跡出土遺物観察表	58
第3表	第5号住居跡出土遺物観察表	25	第15表	土堀出土遺物観察表	62
第4表	第6号住居跡出土遺物観察表	28	第16表	ピット計測表	66
第5表	第10号住居跡出土遺物観察表	29	第17表	遺構外出土遺物観察表	68
第6表	第11号住居跡出土遺物観察表	30	第18表	遺構外出土遺物観察表	69
第7表	遺物集中区出土遺物観察表	43	<b>瘦ヶ谷戸遺跡</b>		
第8表	第3号住居跡出土遺物観察表	46	第19表	溝跡出土遺物観察表	81
第9表	第4号住居跡出土遺物観察表	49	第20表	ピット計測表	84
第10表	第7号住居跡出土遺物観察表	51	第21表	遺構外出土遺物観察表	95
第11表	第7号住居跡出土土錘観察表	52			

# 写真図版目次

## 野中遺跡

- 図版1 1 野中遺跡空中写真(南東より)  
 2 野中遺跡空中写真(第1・2区)  
 3 野中遺跡空中写真(第3・4区)
- 図版2 1 第1～3号住居跡  
 2 第1号住居跡遺物出土状況
- 図版3 1 第1号住居跡遺物出土状況  
 (第9図2)  
 2 第1号住居跡遺物出土状況  
 (第10図41)  
 3 第1号住居跡  
 4 第1号住居跡掘り方  
 5 第2号住居跡掘り方  
 6 第3号住居跡掘り方
- 図版4 1 第4～7号住居跡  
 2 第4号住居跡  
 3 第4号住居跡遺物出土状況  
 (第38図3・5)  
 4 第4号住居跡掘り方
- 図版5 1 第5・6号住居跡(北東より)  
 2 第5・6号住居跡掘り方  
 3 第5・6号住居跡 炉跡  
 4 第6号住居跡 炉跡遺物出土状況  
 (第18図1)
- 図版6 1 第7号住居跡  
 2 第7号住居跡掘り方  
 3 第7号住居跡 カマド  
 4 第7号住居跡遺物出土状況  
 (第40図1)
- 図版7 1 第8号住居跡  
 2 第9号住居跡  
 3 第9号住居跡掘り方
- 図版8 1 第10号住居跡  
 2 第11号住居跡  
 3 第12号住居跡

- 図版9 1 第1号井戸跡石器出土状況  
 2 第1号井戸跡  
 3 第1～4号溝跡全景(東より)
- 図版10 1 第1～4号溝跡全景(西より)  
 2 第5号溝跡・第6～11号土壇  
 3 第1・16号土壇  
 4 第16号土壇高環出土状況  
 (第53図7)
- 図版11 1 第12・13号土壇  
 2 第14・15号土壇  
 3 遺物集中区(1)  
 4 遺物集中区(2)  
 5 遺物集中区(3)
- 図版12 1 調査区第1区全景(南東より)  
 2 調査区第2区全景(北西より)
- 図版13 1 調査区第2区全景(南東より)  
 2 調査区第3区全景(北西より)
- 図版14 1 調査区第3区全景(南東より)  
 2 調査区第4区全景(東より)
- 図版15 1 第1号住居跡出土遺物(第9図1)  
 2 第1号住居跡出土遺物(第9図2)  
 3 第1号住居跡出土遺物(第9図18)  
 4 第1号住居跡出土遺物(第9図5)  
 5 第1号住居跡出土遺物(第9図7)  
 6 第1号住居跡出土遺物(第9図11)  
 7 第1号住居跡出土遺物(第9図12)  
 8 第1号住居跡出土遺物(第9図13)  
 9 第1号住居跡出土遺物(第9図14)
- 図版16 1 第1号住居跡出土遺物(第9図21)  
 2 第1号住居跡出土遺物(第9図22)  
 3 第1号住居跡出土遺物(第9図23)  
 4 第1号住居跡出土遺物(第9図26)  
 5 第1号住居跡出土遺物(第10図28)  
 6 第1号住居跡出土遺物(第10図31)  
 7 第1号住居跡出土遺物(第10図32)

- 8 第1号住居跡出土遺物 (第10図36)
- 図版17 1 第1号住居跡出土遺物 (第10図33)
- 2 第1号住居跡出土遺物 (第10図39)
- 3 第1号住居跡出土遺物 (第10図40)
- 4 第1号住居跡出土遺物 (第10図41)
- 5 第1号住居跡出土遺物 (第11図43)
- 6 第1号住居跡出土遺物 (第11図44)
- 図版18 1 第1号住居跡出土遺物 (第11図46)
- 2 第1号住居跡出土遺物 (第11図48)
- 3 第1号住居跡出土遺物 (第11図55)
- 4 第1号住居跡出土遺物 (第11図56)
- 5 第1号住居跡出土遺物 (第11図57)
- 6 第1号住居跡出土遺物 (第12図58)
- 7 第1号住居跡出土遺物 (第12図73)
- 図版19 1 第6号住居跡出土遺物 (第18図1)
- 2 第6号住居跡出土遺物 (第18図2)
- 3 第11号住居跡出土遺物 (第22図9)
- 4 第11号住居跡出土遺物 (第22図8)
- 5 遺物集中区出土遺物 (第31図1)
- 6 遺物集中区出土遺物 (第31図2)
- 7 遺物集中区出土遺物 (第31図6)
- 図版20 1 遺物集中区出土遺物 (第31図7)
- 2 遺物集中区出土遺物 (第31図12)
- 3 遺物集中区出土遺物 (第31図13)
- 4 遺物集中区出土遺物 (第31図14)
- 5 遺物集中区出土遺物 (第31図11)
- 6 遺物集中区出土遺物 (第31図17)
- 7 遺物集中区出土遺物 (第31図36)
- 8 遺物集中区出土遺物 (第32図37)
- 9 遺物集中区出土遺物 (第32図44)
- 10 遺物集中区出土遺物 (第32図45)
- 11 遺物集中区出土遺物 (第32図51)
- 図版21 1 遺物集中区出土遺物 (第32図52)
- 2 遺物集中区出土遺物 (第32図53)
- 3 遺物集中区出土遺物 (第32図55)
- 4 遺物集中区出土遺物 (第32図56)
- 5 遺物集中区出土遺物 (第32図59)
- 6 遺物集中区出土遺物 (第33図99)
- 7 第4号住居跡出土遺物 (第38図3)
- 8 第4号住居跡出土遺物 (第38図1)
- 図版22 1 第4号住居跡出土遺物 (第38図5)
- 2 第4号住居跡出土遺物 (第38図18)
- 3 第4号住居跡出土遺物 (第38図6)
- 4 第4号住居跡出土遺物 (第38図7)
- 5 第7号住居跡出土遺物 (第40図1)
- 6 第7号住居跡出土遺物 (第40図2)
- 7 第7号住居跡出土遺物 (第40図8)
- 8 第9号住居跡出土遺物 (第46図1)
- 9 第9号住居跡出土遺物 (第46図6)
- 10 第9号住居跡出土遺物 (第46図7)
- 図版23 1 第9号住居跡出土遺物 (第46図11)
- 2 第9号住居跡出土遺物 (第46図12)
- 3 第9号住居跡出土遺物 (第46図18)
- 4 第12号住居跡出土遺物 (第48図1)
- 5 第14号土壙出土遺物 (第53図1)
- 6 第14号土壙出土遺物 (第53図3)
- 7 第14号土壙出土遺物 (第53図7)
- 8 遺構外出土遺物 (第60図5)
- 9 遺構外出土遺物 (第60図6)
- 図版24 1 出土遺物 (第9・18・22・32図)
- 2 遺構外出土遺物 (第58図)
- 図版25 1 遺構外出土遺物 (第58図)
- 2 遺構外出土遺物 (第59図)
- 図版26 1 遺構外出土石器 (第59図)
- 2 遺構外出土石器 (第60図)
- 図版27 1 出土土錘 (第38・41図)
- 2 出土鉄製品 (第36・46・53・60図)

## 瘦ヶ谷戸遺跡

- 図版28 1 瘦ヶ谷戸・野中遺跡  
空中写真(南西より)  
2 瘦ヶ谷戸遺跡空中写真(南西より)
- 図版29 1 第13号溝跡(南西より)  
2 第13号溝跡(東より)  
3 第13号溝跡遺物出土状況  
4 第13号溝跡南側土層断面
- 図版30 1 第1号土壇  
2 第2号土壇  
3 第3号土壇  
4 第4号土壇  
5 第5号土壇  
6 第6号土壇南側土層断面  
7 第6号土壇遺物出土状況  
8 第6号土壇遺物出土状況  
(第65図32)
- 図版31 1 第7号土壇  
2 第2区北側旧河道(北東より)  
3 調査区第1区全景(南より)
- 図版32 1 調査区第1・2区全景(北西より)  
2 調査区第2区全景(南東より)
- 図版33 1 瘦ヶ谷戸遺跡東壁(第2区)土層断面(1)
- 図版34 1 瘦ヶ谷戸遺跡東壁(第2区)土層断面(2)
- 図版35 1 瘦ヶ谷戸遺跡東壁(第2区)土層断面

## 面(3)

- 図版36 1 土壇出土遺物(第65図)  
2 土壇出土遺物(第65図)
- 図版37 1 土壇出土遺物(第65図32)  
2 土壇・ピット出土遺物  
(第65・75図)
- 図版38 1 溝跡出土遺物(第71図1・2)  
2 溝跡出土遺物(第71図3・4)
- 図版39 1 ピット出土遺物(第75図)  
2 遺構外出土遺物(第76図)
- 図版40 1 遺構外出土遺物(第76図)  
2 遺構外出土遺物(第77図)
- 図版41 1 遺構外出土遺物(第77・78図)  
2 遺構外出土遺物(第77・78図)
- 図版42 1 遺構外出土遺物(第78図)  
2 遺構外出土遺物(第79図)
- 図版43 1 遺構外出土遺物(第79図)  
2 遺構外出土遺物(第80図)
- 図版44 1 遺構外出土遺物(第80図)  
2 遺構外出土遺物(第81図)
- 図版45 1 遺構外出土遺物(第81図)  
2 遺構外出土遺物(第82図)
- 図版46 1 遺構外出土遺物(第82図)  
2 遺構外出土遺物(第82図)  
3 遺構外出土遺物(第82・83図)
- 図版47 1 遺構外出土遺物(第83図)  
2 遺構外出土遺物(第84図)

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では円滑な道路交通を実現させるため、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を推進している。本報告書に係る一般国道254号猪俣バイパスは、既存路線の円滑な交通と安心安全な道路空間形成のために計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該道路事業に先立ち、本庄県土整備事務所長から平成21年5月21日付け本第159号で、埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて、生涯学習文化財課長あて照会があった。

それに対して生涯学習文化財課は、平成21年7月1日～2日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成21年7月10日付け教生文第755-1号で次の内容の回答を行った。

### 1 埋蔵文化財の所在

名称(No.)	種別	時代	所在地
癩ヶ谷戸 祭祀遺跡 (No.56-104)	祭 祀	古墳, 奈良, 平安	見玉郡美里町大 字猪俣350他
癩ヶ谷戸 遺跡 (No.56-349)	集落跡	縄文	見玉郡美里町大 字猪俣342他
野中遺跡 (No.56-083)	集落跡	古墳	見玉郡美里町大 字猪俣73他

### 2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事を行う場合には、工事着手前に文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

### 3 取扱い

発掘調査を要する区域について、工事計画

上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

工事に着手して差し支えない区域については、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課と協議してください。

本庄県土整備事務所と生涯学習文化財課・美里町教育委員会は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、本庄県土整備事務所・生涯学習文化財課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議し、野中遺跡を先行調査し、後に癩ヶ谷戸遺跡を合わせて調査することとなった。

文化財保護法第94条1項の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同条4項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、野中遺跡・癩ヶ谷戸遺跡各々について、第92条1項の規定による発掘調査届が(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次の通りである。

発掘通知に対する勧告：

平成21年7月27日付け教生文第4-393号  
発掘調査届に対する指示通知：

平成21年12月2日付け教生文第2-54号

平成21年12月7日付け教生文第2-56号

(生涯学習文化財課)

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

野中・癩ヶ谷戸両遺跡の発掘調査は、平成21年12月1日から平成22年3月31日までの4ヶ月間実施したが、作業手順としては先に野中遺跡に着手し、平成22年1月より癩ヶ谷戸遺跡の調査を開始した。調査面積は、野中遺跡が2,026㎡、癩ヶ谷戸遺跡が1,291㎡である。

11月下旬から事務手続き等の準備を開始し、12月より順次砕石敷設工事及び事務所設置工事を行った。発掘調査事務所は、野中遺跡第2区と第3区の間を設置した。

#### 野中遺跡

平成21年12月1日より重機による表土除去作業を開始し、併せて掘り下げた調査区の保護と安全確保のための囲柵工事を実施した。

遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業は12月10日から実施した。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、調査区第2区を中心に竪穴住居跡・溝跡・土壇・ピット等の遺構を検出したほか、第3区中央部分で多量の古墳時代の土器が集中して出土した(遺物集中区)。遺構については直ちに精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。また、遺物集中区については、写真撮影とともに個々の土器を精密な実測図として記録した。

航空機による空中写真撮影は、平成22年1月14日と3月12日の2回実施した。

#### 癩ヶ谷戸遺跡

平成22年1月8日より重機による表土除去作業を開始し、併せて掘り下げた調査区の保護と安全確保のための囲柵工事を実施した。

遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業は1月25日から実施した。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、溝跡・土壇・ピット等の遺構を検

出したほか、第2区北側部分で縄文時代の土器片が多量に出土した。遺構については、直ちに精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。また、航空機による空中写真撮影は、3月12日に実施した。

野中・癩ヶ谷戸遺跡の記録作業は、3月23日までに終了し、24日には事務所の撤去及び事務手続き等を行い、すべての作業を完了した。

### (2) 整理・報告書の作成

野中・癩ヶ谷戸遺跡の整理作業は、平成22年10月1日から平成23年3月31日まで実施した。

作業はまず、出土遺物の水洗・注記作業を行い、その後、遺構単位に接合作業を行い、引続き欠損部分を石膏で補填する復元作業を実施した。接合・復元作業の終了した遺構から、順次実測用遺物や拓本用遺物を分類・抽出し、11月半ばから遺物実測を開始した。また、併せて選別した土器破片の断面実測と拓本作業に取り掛かり、終了したのから順次トレース作業を行った。

遺構図面の整理作業は、遺物の作業と並行して行った。最初に各種図面を分類・整理した上で、それぞれの実測図の整合性をとって第二原図を作成し、12月からそれを基に遺構図版の版下作成作業に着手した。第二原図をスキャナでコンピュータに取り込み、専用ソフトを用いてトレース作業を行ったのち、土層説明等の入力データと組み合わせて版下データを作成した。

1月から実測遺物のトレース作業を開始し、完成した遺構ごとにトレース図をスキャナで取り込み、コンピュータ上で遺物図版作成作業を行った。

また、抽出した資料は写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともに写真図版の版下とした。なお、口絵用の高精度の写真は委託して行った。

1月半ばから図面・写真・本文の割り付け作業

と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。また、遺物や図版・写真等の記録類を分類整理し、報告書との対照が可能な状態で収納

作業を行った。

印刷原稿の校正は3回行い、平成23年3月末に報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・報告書作成の組織

#### 平成21年度（発掘調査）

---

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部長	小野 美代子
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間 孝志	調査第一課長	金子 直行
総務課長	田中 雅人	主 査	岩瀬 譲
		主 査	黒坂 禎二
		主 査	吉田 稔

#### 平成22年度（報告書作成）

---

理事長	藤野 龍宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部長	小野 美代子
総務部		調査部副部長	昼間 孝志
総務部副部長	金子 直行	整理第二課長	宮井 英一
総務課長	田中 雅人		

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

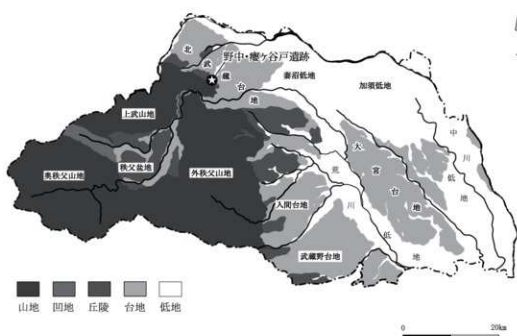
野中・癩ヶ谷戸の両遺跡は、埼玉県児玉郡美里町大字猪俣に所在する。

美里町は、埼玉県の北西部に位置し、東を深谷市（旧岡部町）、北と西を本庄市（旧本庄市及び児玉町）そして南を長瀨町と寄居町に囲まれており、面積約33.8km<sup>2</sup>の南北に長い町域を有する。町の中央部には、山麓に沿うようにJR八高線が南東から北西に通り、その南側には国道254号線が並行するように走っている。また、首都圏と結ぶ関越自動車道は町の北部を貫き、本庄市域に入って僅か1kmほどの本庄児玉インターチェンジから80kmほどで首都東京にアクセスが可能である。遺跡は美里町の南部、JR八高線松久駅の南約2kmに位置し、猪俣川に沿って南東―北西に隣接する。

美里町の地形は、南の秩父山地と丘陵地帯、そして北の低地帯と大別され、全体として南西から北東方向にかけて緩やかに傾斜している。秩父山

塊の北西に位置する500m～700mの山地帯は上武山地と呼ばれており、南側及び東側には荒川の浸食による崖状地形が形成され、対岸に広がる外秩父山地と対峙する。そして、上武山地の山脚は北東方向に延び、松久丘陵を経て標高100m以下の低地帯（本庄台地と櫛挽台地からなる北武蔵台地）へと続いてゆく。また、丘陵地帯は北方の生野山丘陵から浅見山丘陵、東方は諏訪山から山崎山へと連なっており、町域の北半を占める台地部分も、それらの丘陵に囲まれ、恰も盆地の如き景観を呈している。遺跡は松久丘陵から低地帯に移った辺りに位置し、標高は90m前後である。

野中・癩ヶ谷戸の両遺跡は、猪俣川右岸に展開する遺跡で、癩ヶ谷戸遺跡は野中遺跡の下流、北西側に隣接する。美里町域の河川のほとんどは利根川水系に属し、大きくは北西部を流れる小山川（古くは身柳川と言った）とその支流である志戸



第1図 埼玉の地形



川、さらに志戸川の支流となる天神川の3河川に  
取東される。何れも南西の丘陵部から北東方向に  
流れ、やがては小山川として大里郡妻沼町で利根  
川と合流する。

遺跡の南西脇を北西方向に流れる猪俣川は、寄  
居町との境に位置する鐘撞堂山付近にその端を発  
し、宮前川を合わせて北流し、国道付近で北西に  
流れを変える。そして、野中遺跡第2区で同じく  
鐘撞堂山麓から流れる湯脇川と合流した後、壱ヶ  
谷戸遺跡の北方で、陣見山に端を発する天神川と  
一つになり、やがて約2km北方の阿那志で志戸川  
と合流するのである。

以上のように、遺跡周辺の地形は、大きくは南  
西の松久丘陵から櫛挽台地を経て、やがて北東の  
利根川流域の低地へと緩やかな傾斜を示すが、微  
視的には南東の国道254号付近から天神川との合  
流点に向かって(猪俣川に沿って)高度を減じて  
いる。因みに、野中遺跡南東の標高は94.1m、壱ヶ  
谷戸遺跡の北西の標高は89mと比高差は約5m  
を測り、両地点間の距離(約32.4m)を考慮すべ  
ば、現地形で凡そ9度の傾斜が認められ、また旧  
河川による度重なる浸蝕の結果複雑な傾斜面が形  
成されている。

## 2. 歴史的環境

本項では、野中遺跡及び壱ヶ谷戸遺跡で遺構・  
遺物の発見された縄文時代・古墳時代及び奈良・  
平安時代について、遺跡の所在する美里町を中心  
とした櫛挽台地上の遺跡について概観する。

### (1) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、主に小山川・志戸川の流域  
に分布する。

縄文時代の黎明期、いわゆる草創期の遺跡はそ  
れほど多くないが、いくつか著名な遺跡も存在す  
る。まず、最も古い段階に位置付けられる隆起線  
文の時期の遺物は、多縄文系の土器片と共に諏訪  
山丘陵南面の北坂遺跡(25)から出土している。

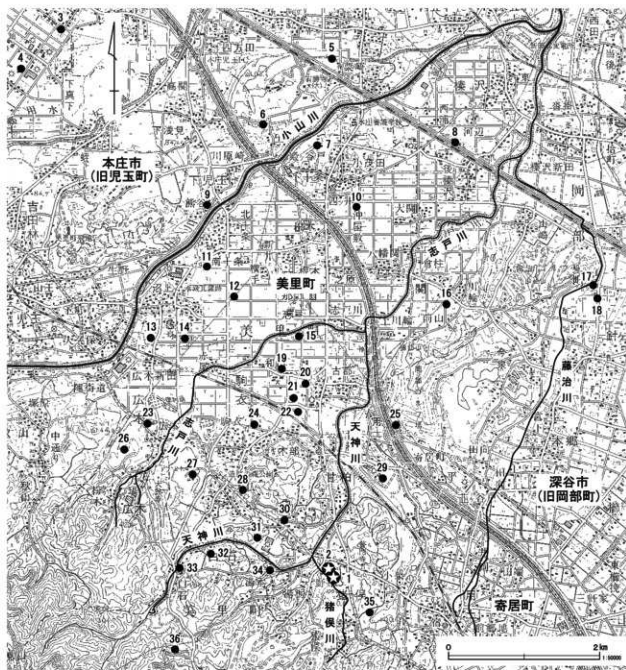
美里町域では、甘粕山遺跡群(29)に含まれる如  
来堂B・C遺跡から、まとまった資料ではないが、  
爪形文及び多縄文系の土器片が出土している。

また、藤治川流域になるが、深谷市(旧岡部町)  
の西谷・水久保の高遺跡は多縄文期の遺跡として  
知られている。両遺跡は、僅かに数十mを隔てて  
東西に隣接するが、西谷遺跡(17)では多縄文土  
器と爪形文土器が伴出しているのに対し、水久保  
遺跡(18)では多縄文土器のみが出土しており、  
爪形文土器を欠いている点が興味深い。同じく深  
谷市(旧岡部町)の東光寺裏遺跡(8)でも爪形文  
が出土している。

早期になると町内の遺跡数も増加する。前述し  
た甘粕山遺跡群に含まれる如来堂A遺跡からは、  
撫糸文期終末と考えられる無文土器が多量に出土  
している。他にも宇佐久保遺跡(27)では、撫糸  
文・押型文・条痕文系土器、白石城遺跡(32)で  
は条痕文系土器、登所遺跡(33)では沈線文系土  
器が、それぞれ少量ずつではあるが出土している。  
また、本庄市有勝寺北裏遺跡(5)では押型文土器  
が出土しており、同期の遺跡が丘陵の裾部から台  
地上に広く分布していたようである。

前期になると気候も安定し、遺跡数も格段に増  
加する。特に、町域では後葉の遺跡数が多く、丘  
陵端部から台地にかけて分布する。黒浜式期では、  
登所遺跡や羽黒山古墳群(31)で住居跡が調査さ  
れており、続く諸磯式期は更に多く、北貝戸遺跡  
(24)・南志渡川遺跡(19)・登所遺跡・白石城遺跡  
などで諸磯a～b期の住居跡が検出されている。

最も安定した中期では、さすがに遺跡数も多く  
大規模遺跡もいくつか知られるが、集落遺跡のほ  
とんどは中期後半が主体となり、やや標高の高い  
丘陵端部に立地する例が多い。勝坂式期・阿玉台  
式期では、峯遺跡(34)や砥藪神社前遺跡(23)  
で住居跡が検出されている。後葉の加曾利E式期  
では栗山遺跡(36)や環状集落の一部となる18軒  
の住居跡群が調査された広木上宿遺跡(26)など



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

1 野中遺跡	10 日の森遺跡	19 南志渡川遺跡	28 大仏鹿寺
2 癩ヶ谷戸遺跡	11 樋之口遺跡	20 上耕地遺跡	29 甘粕山遺跡群
3 将監塚遺跡	12 烏森遺跡	21 下道堀遺跡	30 池下遺跡
4 古井戸遺跡	13 後山王遺跡	22 北谷戸遺跡	31 羽黒山古墳群
5 宥勝寺北裏遺跡	14 宮下遺跡	23 賑藍神社前遺跡	32 白石城遺跡
6 塚本山古墳群	15 志渡川遺跡	24 北貝戸遺跡	33 登所遺跡
7 村後遺跡	16 石神遺跡	25 北坂遺跡	34 峯遺跡
8 東光寺裏遺跡	17 西谷遺跡	26 広木上宿遺跡	35 上野遺跡
9 宮ヶ谷戸遺跡	18 水久保遺跡	27 宇佐久保遺跡	36 栗山遺跡

が挙げられ、周辺に目を移せば、大規模な環状集落が僅か400mを隔てて対峙する本庄市の将監塚

(3)・古井戸遺跡(4)が目される。

後・晩期の遺跡は少なく、町域では遺構を伴う遺跡の調査例はない。僅かに、後山王遺跡(13)・塚本山遺跡(6)・宇佐久保遺跡などで後期称名寺式〜堀之内式、甘粕山遺跡群で晩期大洞式の遺物が出土している。

## (2) 古墳時代

古墳時代の集落は、小山川・志戸川流域を中心に広く台地に分布し、それらを取り囲むような丘陵に位置する古墳群と対照的である。

古墳時代前期、いわゆる五領期の集落としては、志渡川遺跡(15)・日の森遺跡(10)・北貝戸遺跡(24)・村後遺跡(7)などが著名であり、また中期になると樋之口遺跡(11)・甘粕山遺跡群の如来堂C遺跡・北谷戸遺跡(22)などがあげられる。このように前期から中期にかけては、どちらかというと志戸川・天神川流域に分布がみられるが、これに対し、後期になると後山王遺跡(13)・樋之口遺跡・甄菴神社前遺跡・宇佐久保遺跡など小山川に沿った分布が認められ、また丘陵域への拡大をみることができる。

前期の遺跡としては、県内でも最も古い段階に位置付けられる志戸川遺跡第3号住居跡からは、北陸地方や東海地方の影響を受けた土器が出土しており、溝跡から多量の五領式土器が出土した日の森遺跡なども注目される。

また、本書で報告する野中・癒ヶ谷戸両遺跡と関連して注目されるのは、隣接する「こぶヶ谷戸祭祀遺跡」である。天神川と猪俣川の合流地点の近くにある「こぶ石」と呼ばれる巨石を中心とする祭祀遺跡で、昭和34年と40年に調査が行われている。2回の調査では、多量の手捏ね土器・滑石製模造品の他、土師器や鉄製品などが出土しており、それから5世紀中頃から6世紀にかけて當

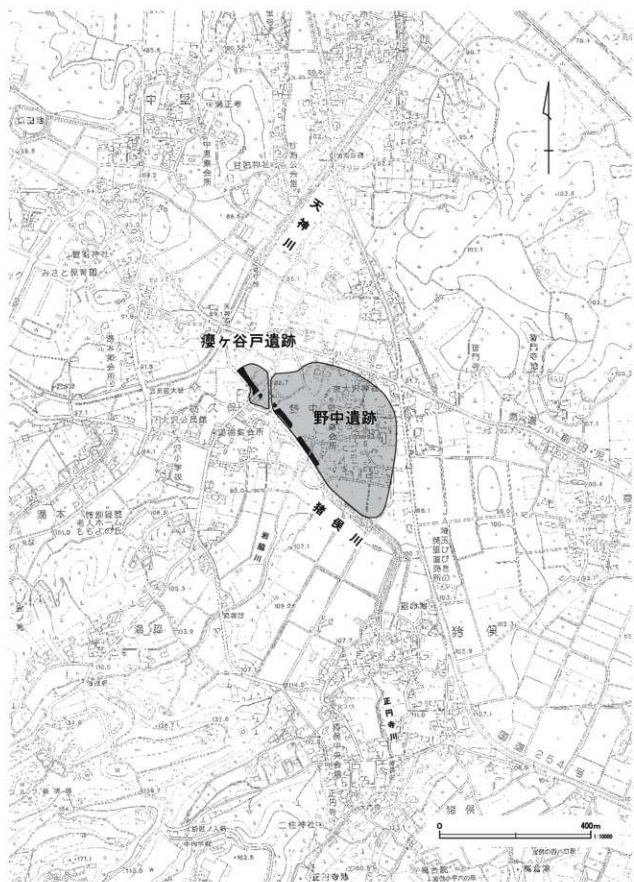
まれた遺跡と考えられている(小沢1960)。また、それら多量の遺物は「こぶ石」の東側に偏って分布するが、特に石製模造品と鉄製品は石の周囲2mほどにまとまって出土した点は、連絡と受け継がれた祭祀のあり方を考える上で注目される。天神川水源の陣見山に向けた祭祀場と解され、水利・水害等、水に関する信仰の対象として機能していたものと思われる。なお、周辺には祭祀遺跡が多く、本遺跡の北方500mの天神川右岸にある亀甲山祭祀跡や岡部町(現深谷市)の今泉祭祀遺跡など、比較的狭い範囲に集中している点は注意されよう。

## (4) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の集落は、小山川と天神川流域を中心に広く所在するが、検出される遺跡の立地傾向としては、丘陵部に近い場所が選ばれているようである。調査された遺跡としては、小山川流域では甄菴神社前遺跡・広木上宿遺跡・宮下遺跡(14)・鳥森遺跡(12)・宮ヶ谷戸遺跡(9)・村後遺跡(7)などがあり、天神川流域では甘粕山遺跡群・上野遺跡(35)・池下遺跡(30)・上耕地遺跡(20)・北貝戸遺跡(24)・北谷戸遺跡(22)・下道堀遺跡(21)・石神遺跡(16)などが挙げられる。

甘粕山遺跡群に含まれる東山遺跡では、掘立柱建物跡に伴って瓦塔・瓦堂がセットで出土している。これらは伴出した須恵器から9世紀前半とされ、国の重要文化財に指定されている。また瓦塔は、出土瓦から8世紀後半の創建とされる大仏庵寺(28)でも発見されている。

県指定史跡として知られる十条条里遺跡は、現在ではその多くが消滅しているが、鳥森遺跡では条里遺構と合致する溝跡や総柱の掘立柱建物跡が検出されているほか、丸舂や巡方等の石帯が出土しており、官衙的性格の遺跡として注目されている。(各遺跡の関連文献は巻末に掲載した)



第3図 遺跡位置図

### III 野中遺跡の調査

#### 1. 遺跡の概要

野中遺跡は、児玉郡美里町の南東部に位置する大字猪俣に所在し、JR八高線用土駅の西約1.5km、あるいは同じく松久駅からは南へ約2kmを測る。地形的には、南西の上武山地から延びる松久丘陵と北東を東流する利根川との間に広がる低位台地（北武蔵台地）上に立地する遺跡であるが、むしろ南西の丘陵端部に近く、標高も92m前後と高い。遺跡のすぐ南には、同丘陵に源を発する猪俣川が北西に流れて天神川と合流するが、古くからこの河川の恵みを受けてきた遺跡であることがわかる。

発掘調査は、一般国道254号猪俣バイパスの建設に伴うもので、平成21年12月1日から4ヶ月間実施した。猪俣川の流れに沿った調査区は、遺跡範囲の南縁にあたり、幅約11mで南東―北西に細長く、面積は2,026㎡である。

発掘調査にあたっては、便宜上南東側から第1～4区に分割して行ったが（第5図）、国道254号に近い第1区では標高94.1mと高いのに対し、第4区では約89.5mと4.5m近くの比高差があり、全体的に南東から北西に向かう緩やかな傾斜が認められる。

第1区は、最も標高の高い西向き斜面であるが、そのほとんどの部分に後世による攪乱が及んでおり、若干深く掘りこまれていた溝跡4条を検出するに留まった。遺物は出土せず、所属時期は不明であるが、埋まりかけた溝上が通路として利用されたことによる道路跡が検出された。

第2区は、中央部から北西端にかけて比較的平坦な面が広がっており、古墳時代から古代の集落が確認された。

発見された遺構は、竪穴住居跡10軒、溝跡1条、土壇16基のほかピット多数である。但し、本区でも攪乱は著しく、特に北西側3分の1ほどでは、

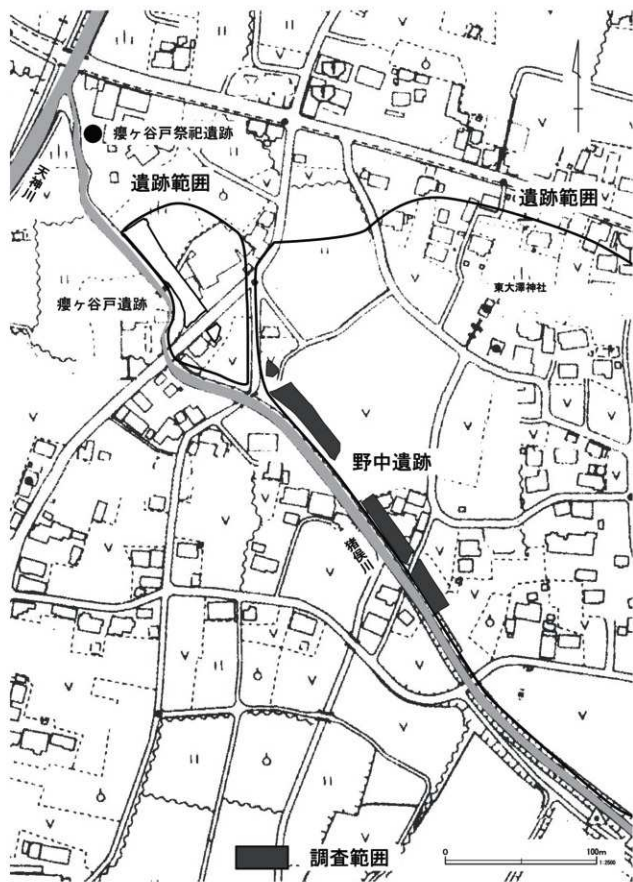
遺構の深い部分のみが辛うじて調査することができた。

古墳時代前期の竪穴住居跡は4軒である。特に注目されるのが、第2区北西端で発見された第1号住居跡で、大幅に攪乱を受け、壁が検出できたのは南側の一辺だけであるにもかかわらず、多量の遺物が出土しており、実測遺物だけでも75点に及ぶ。台付甕が主体を占めるが、器台の比率も高く、特に坏部に透し孔を有する装飾性の高い器台や高坏が含まれている点は注意されよう。

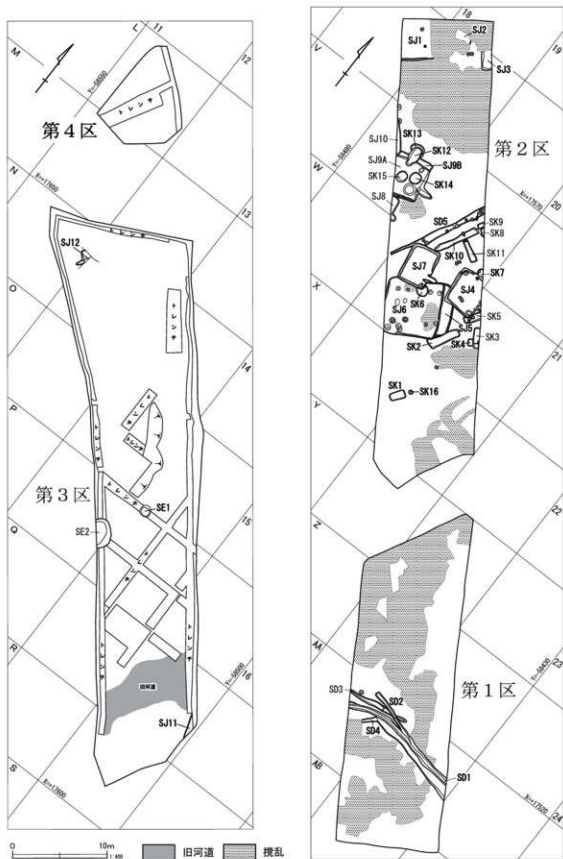
古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡は6軒発見されている。何れも東向きのカマドをもつもので、主軸方向も古墳時代前期の遺構とは大きく異なる。遺構の分布は、第2区を中心に南北40mほどの範囲に限られるが、地形的には同様の平坦部が東側に続くことから、集落自体も東側にある程度の広がりを持つものと予想される。なお、第4号住居跡からは「古家」の墨書のある坏が2点出土しており、第7号住居跡からは小型の土鍾30点がまとまって発見された。

第3・4区は、基本的に猪俣川を含む天神川水系の氾濫原と思われ、第4区では遺構・遺物は検出されず、第3区も竪穴住居跡2軒及び井戸跡2基と少ない。竪穴住居跡は、第3区南端で住居跡の一部が検出されたが、これは第2区の集落の北縁にあたるものである。また同区北西端でも古墳時代の住居跡の一部が検出されたが、南西方向のカマドをもち、上記住居跡とは数十mを隔てていることから、別の集落に属するものと思われる。

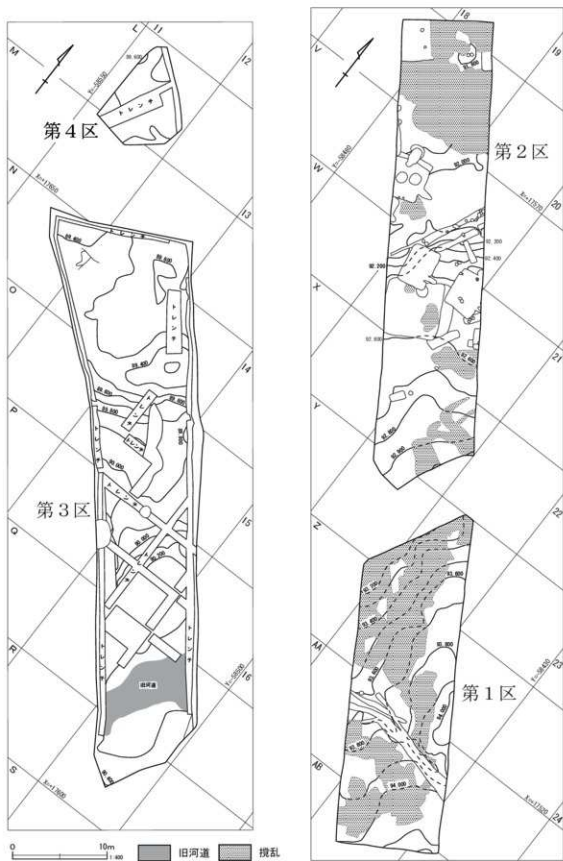
なお、第3区中央部で古墳時代前期の土器が多量に出土した。東西6m、南北10mほどの範囲に1,900点を超える土器片が集中しており、集落域をはずれた川辺で執り行われた祭祀の跡とも考えられる。



第4図 野中遺跡調査範囲



第5図 野中道跡調査区全測図



第6図 野中道跡調査区等高線図



## 2. 古墳時代前期の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

古墳時代前期の竪穴住居跡は、第2区中央部から第3区南端にかけて5軒が検出された。

南側の2軒(第5・6号住居跡)は何れも1辺5mを超える住居跡で、軸を揃えた状況で重複関係にある。また、第1・10・11号住居跡の3軒は、それらより北側で検出されたが、第10・11号住居跡の2軒は調査範囲ぎりぎりにも検出されたもので、遺構の形や施設は明瞭でない。但し、第1号住居跡は、後世の攪乱によって大きく壊されているにもかかわらず、出土遺物は最も多く、また装飾器台などの特殊な遺物も含まれる。

#### 第1号住居跡(第7～12図)

U-17・18グリッドに位置する。第2区北西隅に検出されたが、西側部分は調査区域外になる。また、他の古墳時代前期の住居跡と同様に方形の平面形を呈するものと思われるが、後世の攪乱による破壊が著しく、壁が検出できたのは南側のみであった。主軸方位はおよそN-39°-Wとなり、調査区にほぼ沿った形になるものと思われる。現状で北西-南東が4.44m、南西-北東が3.15m残されており、床面までの掘り込みは、最も残りのよい南壁付近で0.45mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、下部には部分的に深さ5cmほどの壁溝が検出された。

覆土は暗褐色土ないしは黒褐色土で、地山の黄褐色ローム土とは明瞭に判別できた。微細な焼土粒子を含み、堆積状況は南側から流れ込んでいる様子が確認された。

ピットは2本検出された。P1・P2とも床面からの深さは0.5mと深く、主柱穴と考えられる。P1-P2のラインは南壁にほぼ垂直で、4本柱穴の住居跡とすれば、南西側の調査区域外に2本の柱穴の存在が予想される。

なお、床下を精査したところ、貼り床を確認できた。床下の南側及び北側が大きく掘り下げられ

ており、ローム土を主体とする土で床が貼られている。

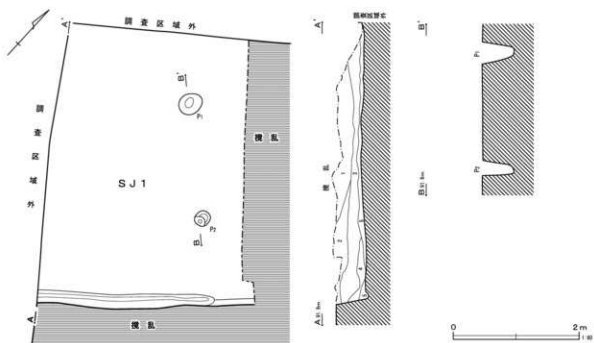
遺物は、大幅な攪乱を受けているにもかかわらず、床面から15cmほどの間で大量に出土し、図示したものだけでも76点を数える(第9～12図)。また、何れも遺構の北半部にまとまって発見されており、比較的残存率が高いことから、遺構北東壁側から廃棄されたものと推察される。

1は特殊器台である。加飾性が高く、装飾器台とも呼べよう。大きくラッパ状に開く脚部には、六個の円孔が二段三方(互い違い)にあけられる。また、大きく外反する坏部には、縦長の楕円形透かし穴が5箇所あけられるなどの加飾が施される。台部は水平に作られ、先端で小さくつまみあげられる。全体の成形は、透かし穴等を抉り抜いたのち、細かなヘラミガキが施される。ヘラミガキは、脚部は三段、台部一段、坏部一段の単位で丁寧に施されていた。

2～10は高坏である。特に2と5は加飾性が高く、装飾高坏といえよう。2は、大きく外反する坏部に円孔を12箇所あける。坏部に円孔を穿つことから、装飾器台とも考えたが、第6号住居跡から出土した高坏のなかに類似の高坏(第18図1)があり、脚部を貫く中心孔の無いことから高坏とした。台部は小さく立ち上がり、受け皿状となる。台部と坏部の接点外面には、坏部を圧着させるためのハケメがみられる。ヘラミガキは円孔から上部、内面は円孔の上下と底面にそれぞれ施される。

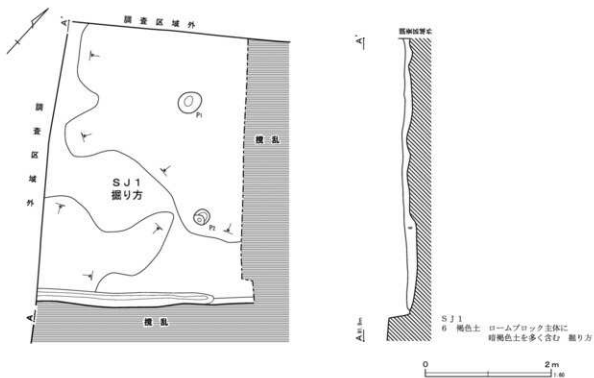
3は高坏の坏部である。直線的にのびた坏部の破片である。細かく丁寧なヘラミガキが、内外面に斜めに施される。硬質に焼き上がる。脚部との接続は明らかにできない。

4は高坏の脚部と坏部底面の破片である。三方に円孔が穿たれる。坏底部や内面には、ヘラミガキの痕跡をとどめない。



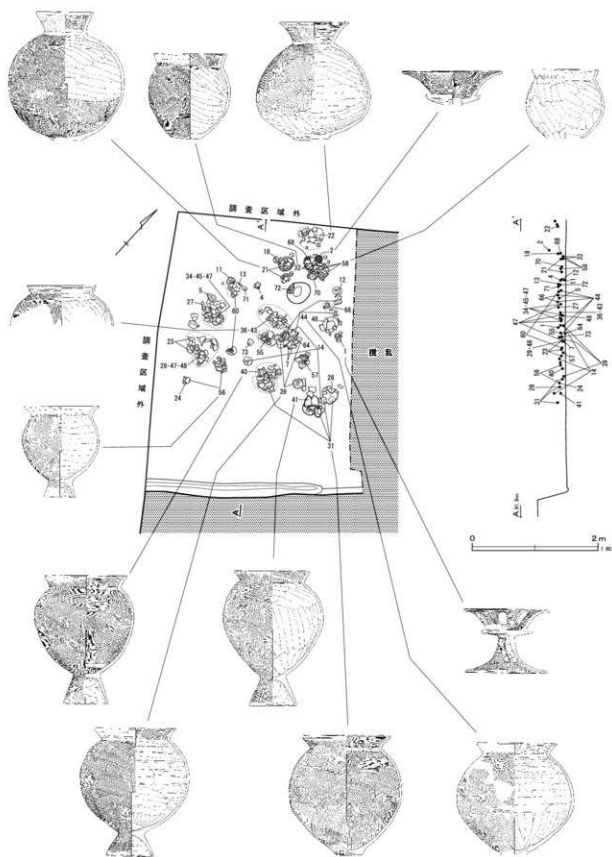
SJ1

- |        |               |                          |
|--------|---------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒(2~5mm)含む | 焼土粒子(2mm)少量              |
| 2 黒褐色土 | ローム粒(2~5mm)多量 | ロームブロック(1cm)・焼土粒子(2mm)少量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒(2~5mm)含む | ロームブロック(1cm)・焼土粒子(2mm)少量 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒(2~5mm)多量 | ロームブロック(1cm)含む           |
| 5 褐色土  | ローム粒(2~5mm)多量 | ロームブロック(1~3cm)含む         |

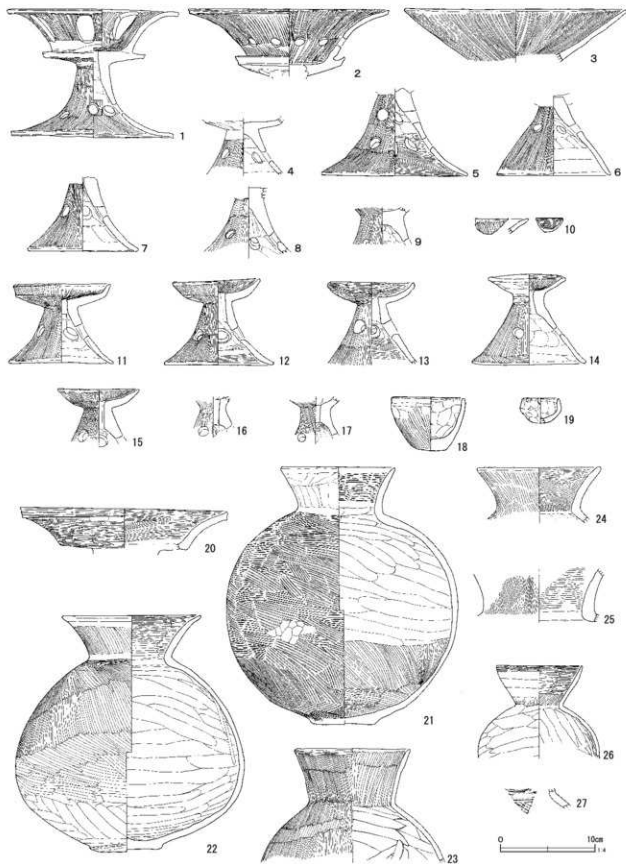


SJ1  
 6 褐色土 ロームブロック主体に  
 暗褐色土を多く含む 掘り方

第7図 第1号住居跡・掘り方



第8图 第1号住居跡遺物分布图



第9图 第1号住居跡出土遺物(1)

5は高環の脚部である。二段四方(平行)に円孔があげられる。裾の広がりはやや小さい。内面には、円孔から裾部にかけて細かなミガキが施される。また、外面には円孔を挟み、三段にわたってミガキを施す。円孔には、丁寧な面取りがみられる。

6~9は脚部の三方に円孔を穿つものである。ともに裾部内側のヘラミガキを確認することはできない。6はやや内湾する直線的な裾部である。台付甕の台にやや近い。9は脚と環の接合部が太く、大型の高環の可能性がある。

10は坏部の破片である。

11~17は小型器台である。すべて三方に円孔を穿つ。14は造りがやや粗雑だが、ほかは概して丁寧である。11は外反する器受けを設けた器台で、外面に縦のヘラミガキを細かく施す。内面には放射状のミガキを施す。裾部内面は、指ナデの痕跡が残るだけである。

12と15は大きく外傾する器受けが付き、裾部は大きく広がる。円孔の内面には、丁寧な面取りが施される。12の裾部外面は縦のミガキが二段に施され、裾部内面は円孔より下にハケメを残す。15は円孔より下は分からない。

13は口縁部が小さく内湾する。内面と外面には、横ミガキを施す。裾部外面は、縦のミガキが二段に施され、裾部内面は、円孔より下にハケメを残す。

14は「X」字状の器台である。裾部が直線的に開き、端部で小さく外反する。口縁部内面には、細かく丁寧なミガキが施されるが、外面にはナデがみられるだけである。裾部には縦のミガキが細かく施され、裾端部に斜めのミガキが施される。内面は指ナデの痕跡以外みられない。

18と19は小型の鉢である。18は底部から口縁部に向かってハケメが施される。台付甕の台部に似る。内面は指オサエの跡がみられる程度である。19は手捏ね土器かミニチュアの鉢である。明確な

工具の調整痕跡等はみられない。

20~30は壺である。20は二重口縁壺、21~24・26は素口縁壺である。20は大きく外反する二重口縁の口唇部にまで横のミガキを施す。口縁部内面は横方向のハケメが残り、外面には丁寧な横方向のミガキが施される。

21はまず鉢状の胴下半部を作り、球胴状の上半部を積み上げ、その上にやや長く外反する口縁部を付けている。鉢状の胴下半部は外面を斜めのハケメで掻き上げ、内面には粗いミガキが施された。上半部は積み上げとともに外面をハケメで仕上げ、内面は指ナデされている。口縁部外面は指ナデのみであるが、内側には細かな横のハケメが施された。胴部中位や下には、ハケメの後に指オサエの痕跡を認めることができる。補修の痕跡である。胴下半に比較し上半が厚手なため重量感がある。

22は胴部が下膨れの壺である。鉢状の胴下半部は、指ナデによる掻き上げを確認できる。胴部中位から肩部にかけては、細かなヘラミガキが施される。ヘラミガキは、まず胴部下半と肩部に横方向に施し、その上に斜めに連続し、最後に肩部から胴部中位にかけて斜めに施す。口縁部の外面には縦、内面には横方向のヘラミガキが施される。また、ヘラミガキを施したのち、肩部と口縁部の接合部、口唇部には横方向のナデが施される。

23はやや縦長で球形の胴部に口の広い口縁部の付いた壺である。肩部から口縁部にかけては、細かなヘラミガキがとても丁寧に施された。胴部内面にはヘラ削りの跡が残る。ヘラミガキは頸部から胴部中央にかけて、口縁部は内外面とも上部から下部にかけて縦方向のヘラミガキを施す。器肉も薄く丁寧に仕上げられた壺である。

24は口縁部の破片である。内外面ともハケメが残る。器肉も厚くやや雑な造りである。25は器肉の厚い大型の壺である。口縁部の破片で外面に縦、内面に横のハケメがみられる。高さ80cmを超える

壺かもしれない。

26は小型の壺である。口縁部はやや内湾しつづ直線的に長く開く壺である。胴下半は欠損するが、球形となると考えられる。胴部は細かな削りの痕跡が残る、頸部には上方へ掻き上げたハケメの痕跡が残る。口唇部に横方向の明瞭なヘラミガキが残る。胴部の内面には、縦方向のナデ上げがみられる。口縁部内面には、頸部付近に斜め方向のヘラミガキを施し、そのうち口縁部上半に横方向のヘラミガキを施している。

27は装飾壺の肩部破片である。頸部に横方向の櫛目が走り、肩部には網目状のキザミを見ることができ。色調がほかの土器と異なり、こげ茶色に近い。硬質に焼き上がり器表に光沢がある。

28～30は壺の胴部から底部にかけての破片である。28はまず鉢状の部分の外面に下方から上方にかけてハケメが施され、その上に粗いヘラミガキが縦方向、あるいは斜め方向に施される。内面には横方向の粗いヘラミガキが施され、上位は指ナデの痕跡を残すだけとなる。

29は球形の壺の胴部である。最大径は胴下半にある。色調や調整技法など23と近似し、同一個体かもしれないが接合部位がない。鉢状の外面にヘラミガキを施したのち、肩部、胴中位の順にヘラミガキが施される。内面にはナデ上げた痕跡が残る。

30は大型の壺の底部である。外面を細かく丁寧磨き込んでいる。内面には指ナデによってナデ上げた跡がみられる。

31～34は壺である。31・32は素口縁の壺である。31は口唇部に面をもつ壺で、胴部は無花果形となる。底部はやや上げ底である。内面には、まず、鉢状の底部と胴部の境目に斜め方向のハケメが施され、次に底部からハケメが掻き上げられ、胴部に横方向にハケメを施す。その後、肩部内面が斜めに掻き上げられる。口縁部には横方向のハケメが施される。外面には、胴下半に斜めのハケメを

施し、指オサエや削り込みを行い、底部付近を上部にハケメで掻き上げる。そして最後に胴下半部に縦方向のヘラミガキを施す。胴部から肩部にかけては、横方向のハケメが施され、口縁部は頸部から掻き上げられたハケメがみられる。32は外面に斜めのヘラミガキが連続して加えられる。口縁部内面には、横方向のハケメがみられる。内面は横方向、または斜め方向にナデ上げられた指ナデの跡をみることができ。33も調整技法は同様である。

34は内外面にハケ跡が確認できるだけであり。胴下半の破片で、甕か壺か不詳である。

35～74は台付壺である。

35・36は「S」字状口縁台付壺の口縁部破片である。乳白色の焼き上がりで器壁が薄い。口縁部が「S」字に屈曲する。肩部には斜めの細かなハケメが施され、その上に横方向の不連続なハケメが施される。胴下半は欠損して分からない。同種の甕は、東海地方西部に型式学的な淵源が求められるが、在地の製品である。

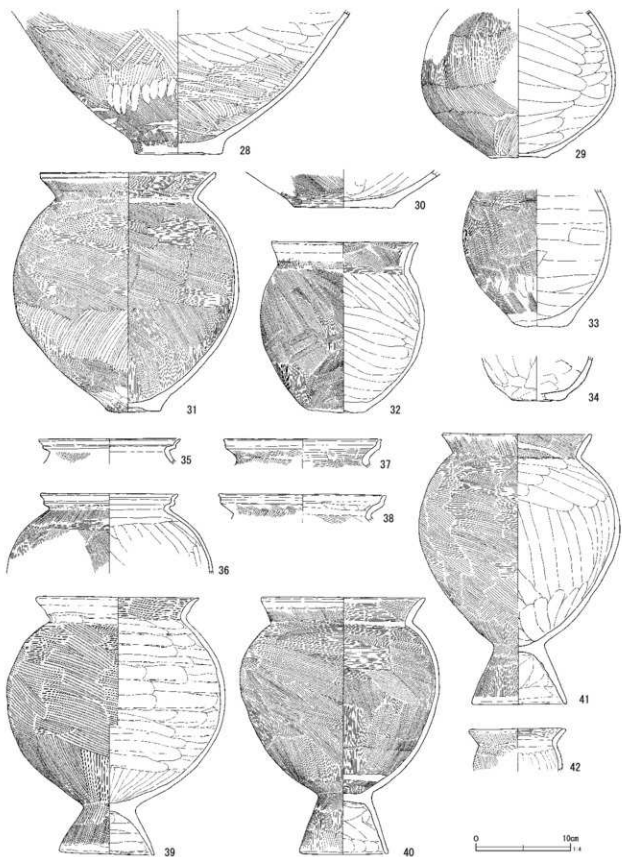
37・38の口縁部は一端外反して受け口状となる。器内が厚い。このような口縁の甕は近江地方に出自を求められるが、在地の製品である。

39～41は一般的な大きさの台付壺である。外面には胴下半に縦ハケメ、胴部中位から肩部にかけては横ハケメ、口縁部にはハケメの掻き上げがみられる。

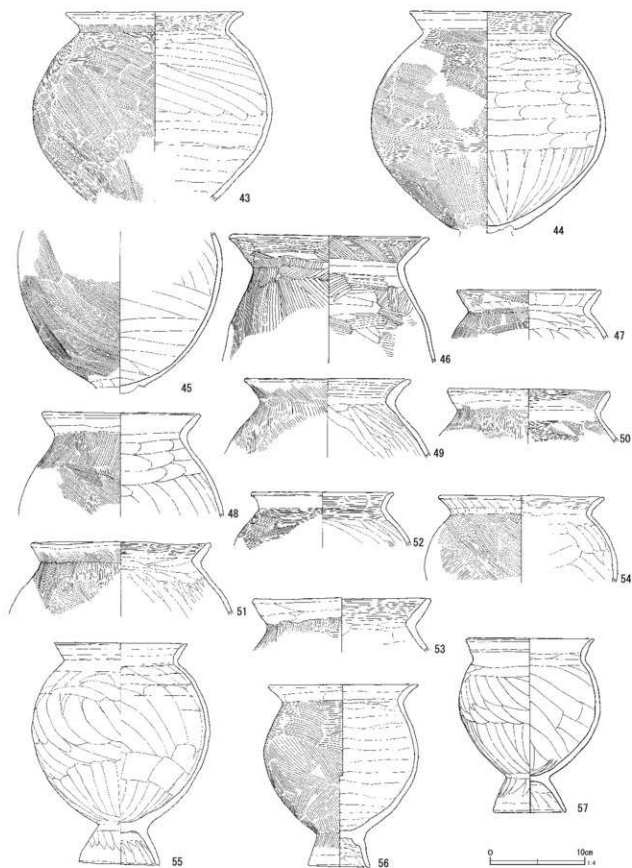
40の内面にはハケメがみられるが、ほかはナデ上げられている。42は小型の壺である。肩部に横方向のハケメがみられる。

43～54は一般的な大きさの台付壺である。

46・49・53を除き、調整技法は39～41と共通する。46は下影れの胴部に大きく開いた口縁部がつく。内外面ともに粗いヘラミガキが施される。作りは粗雑だが硬質に焼き上げられている。49・53は厚い口縁部が、やはり下影れの胴部から「く」の字にのびる。外面には粗いハケメが施される。

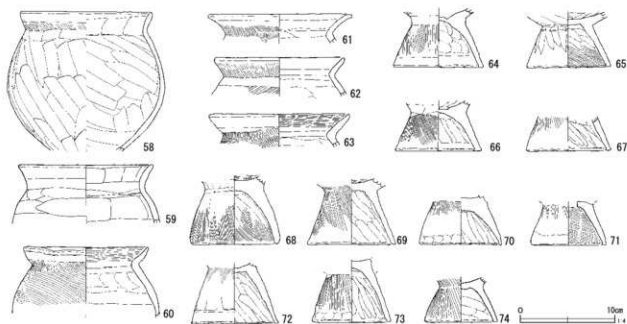


第10图 第1号住居跡出土遺物(2)



第11图 第1号住居跡出土遺物(3)





第12図 第1号住居跡出土遺物(4)

内面は指ナデの痕跡をみる。栃木県や茨城県などの東関東に共通した甕がみられる。

55～63は中型の台付甕である。56には粗いハケメを確認できるが、ほかは粗く削られただけである。内面にもハケメを確認できない。

61・63の口縁部は内湾する。器肉も厚く、やはり東関東系の甕の一つと考えたい。

64～74は台付甕の脚台部である。胴部との接合部にハケメが施される。

66・68・71などは内面にも斜めにハケメが施された。台部の端部は内傾した面をもつ。脚台部の折り返しはみられない。

なお、本住居跡については、灰跡が検出されなかった点に加え、上記のように装飾性の高い土器や東海系の甕など特殊な遺物が多くみられることから、通常の住居とは異なる遺構の可能性も考えられよう。

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ1	土師器	裝飾器台	60	18.1	17.0	13.5	白色結晶岩・片岩	良好	橙	No 8
2	SJ1	土師器	高坏	20	21.3			片岩	良好	橙	No13
3	SJ1	土師器	高坏	10	23.5			白色結晶岩・片岩	良好	橙	
4	SJ1	土師器	高坏	20				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No24
5	SJ1	土師器	高坏	20	15.4			白色結晶岩・片岩	良好	明赤褐	No28
6	SJ1	土師器	高坏	10	12.0			白色結晶岩・片岩	良好	明赤褐	
7	SJ1	土師器	高坏	40	11.7			白色結晶岩・片岩	良好	橙	No 3
8	SJ1	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	
9	SJ1	土師器	高坏	5				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
10	SJ1	土師器	高坏	5					良好	橙	
11	SJ1	土師器	小型器台	40	10.2	11.1	8.4	白色結晶岩・片岩	良好	橙	No26
12	SJ1	土師器	小型器台	40	9.2	11.3	9.0	白色結晶岩・片岩	良好	橙	No 7
13	SJ1	土師器	小型器台	36	8.7			白色結晶岩・片岩	良好	橙	No 4
14	SJ1	土師器	小型器台	40	8.1	11.2	9.6	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No 2・10・34
15	SJ1	土師器	小型器台	20	8.6			白色結晶岩・片岩	良好	橙	
16	SJ1	土師器	小型器台	10				白色結晶岩・片岩	普通	暗褐	
17	SJ1	土師器	小型器台	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
18	SJ1	土師器	小型鉢	80	7.6	3.0	5.7	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.5
19	SJ1	土師器	小型鉢	20	4.0	1.0	2.2		良好	橙	
20	SJ1	土師器	有段口縁壺	5	22.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	
21	SJ1	土師器	壺	90	12.1	6.2	27.3	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.22・23
22	SJ1	土師器	壺	90	14.7	7.2	25.0	白色結晶岩・片岩	良好	にぶい橙	No.6
23	SJ1	土師器	壺	20	11.8			白色結晶岩・片岩	良好	橙	No.42・43
24	SJ1	土師器	壺	10	13.0			白色結晶岩・片岩	良好	橙	No.45
25	SJ1	土師器	壺	5				白色結晶岩・片岩	良好	橙	
26	SJ1	土師器	小型壺	10	9.0			白色結晶岩・片岩	普通	浅黄	
27	SJ1	土師器	壺	5				白色結晶岩・片岩	良好	赤褐	No.29
28	SJ1	土師器	壺	20		9.3		白色結晶岩・片岩	良好	橙	No.11
29	SJ1	土師器	壺	30		5.4		白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	No.42
30	SJ1	土師器	壺	5		10.3		白色結晶岩・片岩・角閃石	普通	にぶい橙	
31	SJ1	土師器	壺	90	18.6	5.7	25.5	白色結晶岩・片岩	普通	暗褐	No.9・10・11・40
32	SJ1	土師器	壺	90	15.4	5.8	18.0	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.15
33	SJ1	土師器	壺	40		5.0		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.40
34	SJ1	土師器	壺	5		5.0		白色結晶岩・片岩	普通	暗褐	No.30
35	SJ1	土師器	S字状口縁台付壺	5	15.0			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
36	SJ1	土師器	S字状口縁台付壺	10	14.4			白色結晶岩・片岩・角閃石	良好	にぶい橙	No.35
37	SJ1	土師器	台付壺	5	16.6			白色結晶岩・片岩	良好	橙	
38	SJ1	土師器	台付壺	5	17.7			白色結晶岩・片岩	良好	橙	
39	SJ1	土師器	台付壺	80	17.2	10.0	27.3	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい赤褐	No.33・34・38
40	SJ1	土師器	台付壺	80	17.3	9.4	27.3	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.39・40
41	SJ1	土師器	台付壺	90	15.6	9.8	29.0	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.1
42	SJ1	土師器	小型壺	5	10.0			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
43	SJ1	土師器	台付壺	40	18.7			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.35
44	SJ1	土師器	台付壺	40	17.2			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.18・19・33・34
45	SJ1	土師器	台付壺	30				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい褐	No.30
46	SJ1	土師器	台付壺	20	20.2			白色結晶岩・片岩	普通	暗赤褐	No.20
47	SJ1	土師器	台付壺	20	15.2			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.30・42
48	SJ1	土師器	台付壺	20	16.2			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.42
49	SJ1	土師器	台付壺	10	17.2			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
50	SJ1	土師器	台付壺	10	17.0			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
51	SJ1	土師器	台付壺	10	18.5			白色結晶岩・片岩	良好	橙	
52	SJ1	土師器	台付壺	10	14.7			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
53	SJ1	土師器	台付壺	10	18.4			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
54	SJ1	土師器	台付壺	20	17.4			白色結晶岩・片岩	普通	橙	
55	SJ1	土師器	台付壺	40	14.1	8.0	23.4	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.32
56	SJ1	土師器	台付壺	90	16.0	6.5	19.6	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.44・45
57	SJ1	土師器	台付壺	80	13.0	7.4	18.6	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.37
58	SJ1	土師器	台付壺	60	13.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.15・17
59	SJ1	土師器	台付壺	10	14.0			白色結晶岩・片岩	不良	暗褐	
60	SJ1	土師器	台付壺	20	13.2			白色結晶岩・片岩	普通	赤褐	No.27・41
61	SJ1	土師器	台付壺	5	14.8			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	
62	SJ1	土師器	台付壺	10	13.6			白色結晶岩・片岩・角閃石	普通	橙	
63	SJ1	土師器	台付壺	5	14.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	
64	SJ1	土師器	台付壺	10		9.5		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.36
65	SJ1	土師器	台付壺	10		8.3		白色結晶岩・片岩	普通	橙	
66	SJ1	土師器	台付壺	10		9.0		白色結晶岩・片岩	普通	暗褐	No.19
67	SJ1	土師器	台付壺	5		8.8		白色結晶岩・片岩	良好	橙	
68	SJ1	土師器	台付壺	10		9.0		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.14
69	SJ1	土師器	台付壺	10		9.2		白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	
70	SJ1	土師器	台付壺	10		8.6		白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	No.16
71	SJ1	土師器	台付壺	5		7.8		白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	No.25
72	SJ1	土師器	台付壺	10		9.2		白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.21
73	SJ1	土師器	台付壺	10		8.0		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No.31
74	SJ1	土師器	台付壺	10		7.6		白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	

### 第5号住居跡 (第13~15図)

W-19グリッドに位置する。第2区中央南寄りに検出され、第6号土壇及び第4・6・7号住居跡と重複するが、第4・7号住居跡は平安時代の住居跡で本住居跡より新しい。第6号住居跡は本住居跡を切っているが、ほぼ同時期の遺構で規模も近い。1mほど南西側にずれているだけで大部分が重複しており、本遺構の西側部分は第6号住居跡の床面下に壁溝のみが検出された。また、第6号土壇は第5・6号住居跡を切って作られるが、出土遺物はなく時期は不明である。

平面形はほぼ方形を呈し、東西6.3m、南北は5.6mと僅かに東西が長く、壁溝が全周する。主軸方位はN-60°-Eである。

黒色土を主体とする覆土は東壁側で観察され、床面までの深さは10cm程度である。

炉跡は西壁寄りに検出された。0.4m×0.3mほどの楕円形で、深さ10cmほどの掘り込みには、赤褐色の明瞭な焼土が観察された。また、南側の縁には長さ25cm、厚さ3cmほどの扁平で細長い石が置かれていた。

貯蔵穴は南西コーナー部分で検出された。0.95m×0.50mほどの楕円形を呈するが、床面からの深さは35cm及び60cmと二段に掘りこまれており、時期の異なる2基の重複である。

ピットは4本検出された。ほぼ3.3m間隔で正方形に並び、床面からの深さは43cm~66cmと全体的に深い。柱痕等は観察されず、柱は抜き取られたものと思われる。

なお、床下を精査したところ、貼り床を確認できた(第14図)。壁に沿って数cm掘り下げられており、ロームを主体とする土で床が貼られていた。

出土遺物は、遺構の大部分が第6号住居跡と重複するため少なく、図示できたのは3点のみである(第15図)。1・2は土師器の台付甕である。台部のみが残る。1には胴部との接合部、内側にハケメがみられる。3は粘土を紐状にして焼成した

遺物である。用途不詳。

以上、出土遺物は少ないものの、遺構形状等より古墳時代前期の住居跡と考えたい。

### 第6号住居跡 (第16~18図)

W・X-19グリッドに位置する。第5号住居跡と重複して検出されたが、南西側の一部は調査区域外となる。第7号住居跡及び第6号土壇に切られる。第5号住居跡は、所屬時期・規模とも本遺構に極めて近いが、そのほとんどの部分が本遺構と重複している。土層断面の観察から本遺構の方が新しい。

平面形は方形を呈し、東西6.0m、南北6.1mと第5号住居跡に極めて近い。床面までの深さは20cmほどで、主軸方位はN-61°-Eである。覆土は明瞭な黒褐色土を主体とし、2層に分層された。

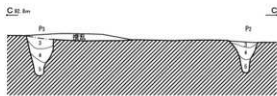
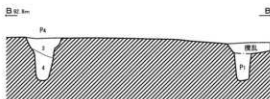
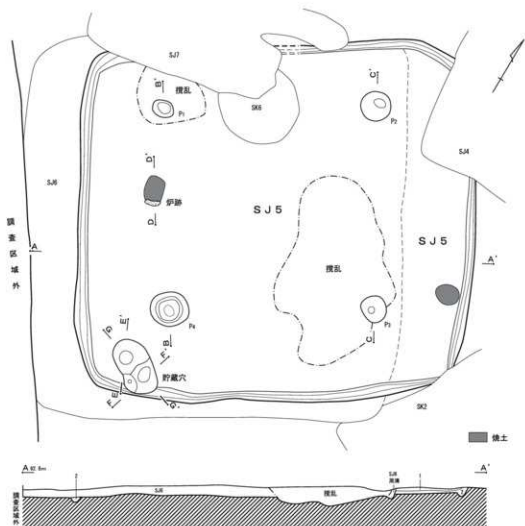
壁溝は四辺で検出されたが、深さは3~4cmと浅く、南西側で一部が途切れる。

炉跡は西壁寄りに検出された。0.4m×0.7mほどの範囲に3cmほどの厚さで焼土が検出されたが、掘り込みは確認できなかった。第5号住居跡の炉跡に比べて被熱の割合は少なく、明瞭な焼土塊は認められなかった。なお、第5号住居跡と同様に炉跡中央部に厚さ約5cm、長さ約20cmほどの石が置かれていた。

貯蔵穴は南西コーナー部分で検出された。0.65m×0.60m程の不整形の掘り込みで、床面からの深さは約35cmである。覆土は自然的な堆積状態を示し、北側からの流れ込みが観察される。

ピットは4本検出された。柱間は3.4m~3.5mとほぼ等しく、壁に並行して方形に配される。床面からの深さはP2~P4が50cm~65cmであるのに対し、P1は30cmとやや浅目である。何れも柱痕等は確認されなかった。

なお、床下を精査したところ貼り床を確認できた(第17図)。第5号住居跡とは異なり、壁際と中央部を高く残し、その間をドーナツ状に掘り下げ



S J 5

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土

炉跡

- 1 褐色土

貯蔵穴 (新)

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土

貯蔵穴 (古)

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土

ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (1~5cm) 少量 黄土粒子 (2~5mm) 微量

ローム粒 (2~5mm) 多量 ロームブロック (1~5cm) 含む

黄土粒子 (2~5mm) 少量

ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (1cm) 少量

ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (1cm) 多量

ロームブロック 多量 暗褐色土まじり

ローム粒 (2~5mm)・黄土粒子 (2~5mm) 多量 ロームブロック

(1cm)・黄土ブロック (2~4cm) 含む 炭粒子 (2~5mm) 少量

ローム粒 (2~5mm)・黄土粒子 (2~5mm) 少量

ローム粒 (2~5mm) 含む ロームブロック (1cm) 少量 黄土粒子 (2~5mm) 微量

ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (1cm) 少量

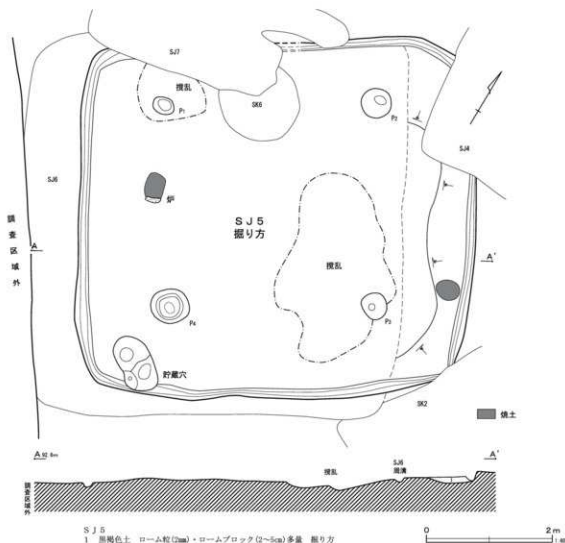
ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (2cm) 含む

ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (2~5cm) 多量

ローム粒 (2~5mm)・ロームブロック (2~5cm) 多量

0 2m

第13図 第5号住居跡



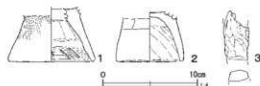
第14図 第5号住居跡掘り方

ている。

出土遺物は第18図に示した。1は特殊高坏、2・3・5は高坏、4は器台、6は甕、7は壺、8は甕、9は台付甕、10は手焙り形土器である。

1の特殊高坏は加飾性が高い。裝飾高坏とも呼べる。大きくラッパ状に開く脚部の先端は欠損しているが、3のような裾部となろう。六個の円孔が、二段三方(互い違い)にあく。大きく外反す

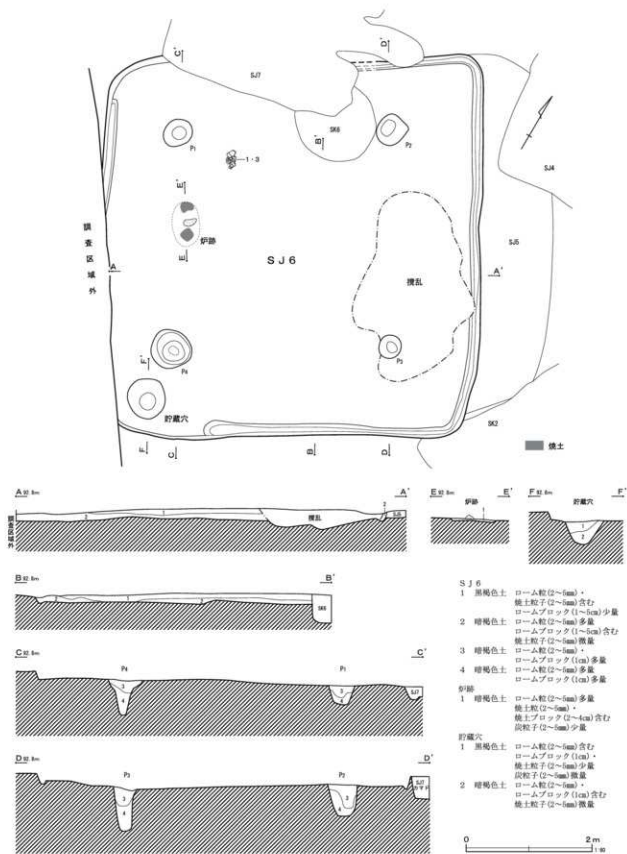
る坏部の口唇は、上方へ小さくつまみあげられる。坏部のやや低いところに円孔を11箇所あける。第



第15図 第5号住居跡出土遺物

第3表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ5	土師器	台付甕	10		9.0		白色結晶岩・片岩	普通	橙	貯蔵穴
2	SJ5	土師器	台付甕	5		7.1		白色結晶岩・片岩	普通	橙	P3
3	SJ5	土師器	手焙り製品	5				白色結晶岩・片岩	普通	にじい橙	P3

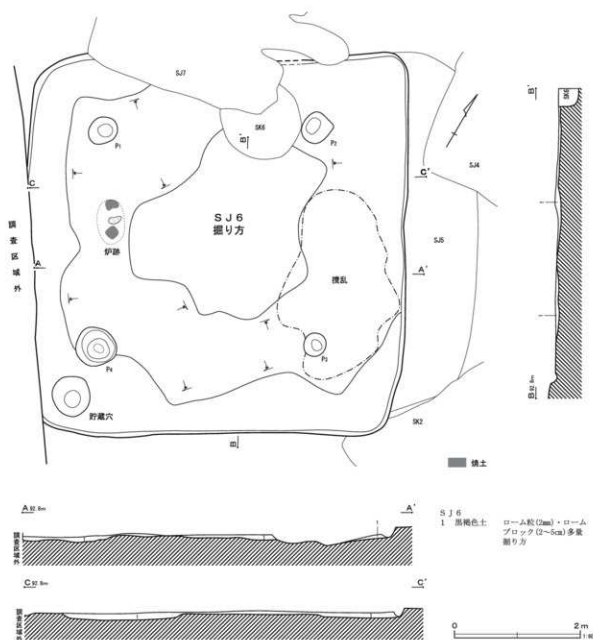


第16図 第6号住居跡

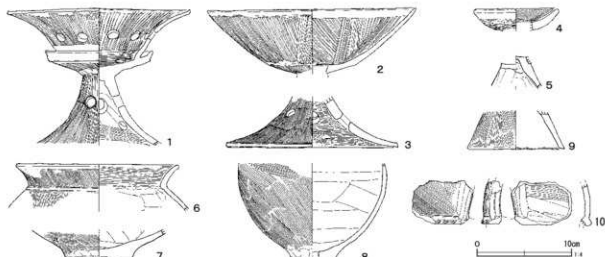
1号住居跡の特殊高環と共通する。坏部に円孔を穿つが、脚部を貫く中心孔の無いことから高環とした。坏部外面は台部から口唇部にかけて縦の細かなヘラミガキ、内面は円孔部で二段となる縦のヘラミガキを丁寧に施す。坏部底面には、横に細かなヘラミガキを施す。台部は小さく立ち上がり、受け皿状となる。受け部にも細かなヘラミガキが施され、裾部外面には上位円孔部を境に二段のヘラミガキが施された。脚部裾の内面には横にハケ

メが残る。ハケメの上部は指ナデの状態のままである。

2は高環の坏部、3は脚部であるが、両者は別個体と考えた。2は内外面、坏底部に縦の細かなミガキが施される。3は円孔が三つ穿たれ、少なくとも3段のヘラミガキが施された。内面には横方向にハケメが施される。円孔の内面は、丁寧に面取りをする。5は坏底部に円孔が貫通しないことから高環と考えた。



第17図 第6号住居跡掘り方



第18図 第6号住居跡出土遺物

第4表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ6	土師器	裝飾高坏	30	19.4			白色結晶岩・片岩	良好	橙	No 1
2	SJ6	土師器	高坏	20	21.7			白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	
3	SJ6	土師器	高坏	10		18.3		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No 1
4	SJ6	土師器	器台	10	8.9			白色結晶岩・片岩	良好	赤褐	
5	SJ6	土師器	高坏	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	
6	SJ6	土師器	壺	5	17.2			白色結晶岩・片岩	良好	明赤褐	
7	SJ6	土師器	壺	5		6.8		白色結晶岩・片岩	普通	橙	
8	SJ6	土師器	甕	20		4.7		白色結晶岩・片岩	良好	橙	
9	SJ6	土師器	台付壺	5	10.2			白色結晶岩・片岩	普通	ぶい橙	
10	SJ6	土師器	手焙り形土師	5				白色結晶岩・片岩	普通	灰褐	

4は器台の受け部である。内面には斜め放射状、外面には横方向にヘラミガキを細かく施す。口縁部は小さく直線的にのびる。

6は素口縁の壺である。口縁部外面は下から上へ、肩部は上から下へハケメが施される。また口縁部の内面には、横方向のハケメが施される。内面はナデがみられる。7は壺の底部で、外面に下から上に向かってハケメが施される。8は底部に小孔のあいた甕である。底部付近には指オサエの跡が残るが、外面の全体にハケメが施されている。胴部上半は欠損するため、全体像は分からないが、鉢または甕状の器形となる。9は台付壺の台部である。6と同一個体かもしれない。

10は手焙り形土師の開口部破片である。開口部の口縁はアーチ状となる。鉢状の体部とドーム状の天井部の境には隆帯がめぐり、その隆帯には5mm間隔で斜めの刺突を列点状に施す。刺突具は、

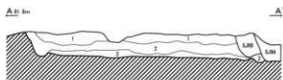
木目のみられることからハケメを施す木口状工具と考えられる。ドーム状の天井および内面には、丁寧なハケメが施される。内面に煤の痕跡は確認できない。比較的硬質に焼成された丁寧な作りの土器である。

#### 第10号住居跡 (第19・20図)

V-18グリッドに位置する。第2区北寄りに検出されたが、南西側の大部分は調査区域外となり、僅かに北東側の壁と2箇所のコーナー部分を調査することができた。南東コーナー部分で重複する第9号住居跡は、平安時代に属するもので、本住居跡を切って作られている。

平面形は不明だが、唯一検出できた北東壁部分で長さは3.75m、方位はN-35°-Wであり、主軸方向からは古墳時代前期の住居跡の可能性が高いと思われる。





- S J10  
 1 黒褐色土 ローム粒(1~5mm)・焼土粒子(2~4mm)少量  
 2 暗褐色土 ローム粒(1~5mm)・焼土粒子(2~4mm)少量  
 3 暗褐色土 ローム粒(1~5mm)多量 ロームブロック(1~3cm)含む

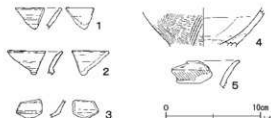


第19図 第10号住居跡

上面は攪乱が著しく、掘り込みの深さは40cmほどである。覆土は黒褐色土を主体とし3層に分層された。但し3層はローム土を多量を含む層で、締まりはよくないか貼り床と考えられる。なお、壁溝は土層断面では確認できたが、平面的な検出は難しかった。

出土遺物は少なく図示した土器もすべて小破片であり、竪穴住居跡の時期を断定することはできないが、覆土の状況から古墳時代前期と考

えたい。



第20図 第10号住居跡出土遺物

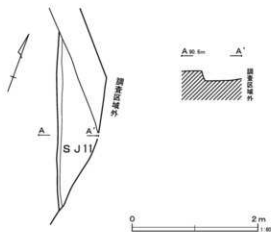
第5表 第10号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ10	土師器	有段口縁杯	5					良好	暗褐色	ローム台地
2	SJ10	土師器	有段口縁杯	5					良好	にぶい橙	ローム台地・黒色処理
3	SJ10	土師器	坏蓋模倣杯	5					良好	橙	ローム台地
4	SJ10	土師器	台付埴	5				白色結晶岩・片岩	普通	暗褐色	
5	SJ10	土師器	壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	

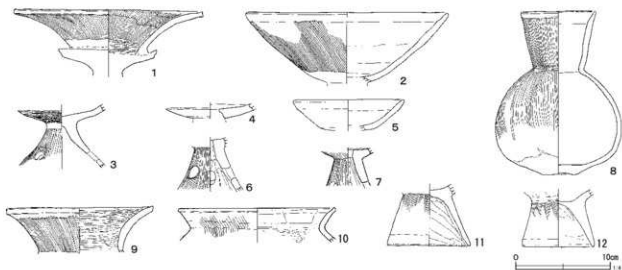
### 第11号住居跡 (第19・20図)

Q-15グリッドに位置する。第3区南東隅に発見されたが東側の大部分は調査区域外となり、僅かに西壁の一部が検出された。遺構上面は攪乱が著しく、確認面からの深さは15cmほどである。

検出された西壁は直線的で、コーナー部分は検出されなかった。出土遺物より古墳時代前期の遺構と思われるが、西壁の方位はN-20°-Wと他の同時期の遺構とは異なり、むしろ古代の住居跡に近い。



第21図 第11号住居跡



第22図 第11号住居跡出土遺物

第6表 第11号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ11	土師器	高環	5	19.8			白色結晶岩・片岩	良好	橙	
2	SJ11	土師器	高環	30	21.4			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
3	SJ11	土師器	高環	10				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
4	SJ11	土師器	高環	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	
5	SJ11	土師器	高環	5	11.8			白色結晶岩・片岩	普通	橙	
6	SJ11	土師器	器台	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	
7	SJ11	土師器	器台	10				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
8	SJ11	土師器	甕形壺	100	8.0	3.7	17.3	白色結晶岩・片岩	普通	橙	
9	SJ11	土師器	壺	5	15.5			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
10	SJ11	土師器	甕	5	16.6			白色結晶岩・片岩	普通	橙	
11	SJ11	土師器	台付壺	10		8.7		白色結晶岩・片岩	普通	橙	
12	SJ11	土師器	台付壺	10		7.5		白色結晶岩・片岩	普通	橙	

出土遺物は遺構面積に比して非常に多く、12点を図示した(第22図)。1～5は土師器の高環、6・7は器台、8は甕形壺、9は壺、10は甕、11・12は台付壺である。

1は口縁部が大きく外反する高環で、外面は縦に丁寧にヘラミガキされ、内面は二段にわたり縦にヘラミガキされる。台部から剥がれた痕跡を確認でき、本来土器集中区の1のような器形をしていたのかもしれない。2は高環の坏部である。坏底部の破片まで残るが、底部にはミガキの痕跡を確認できなかった。全体に器表が荒れている。3はとても丁寧にヘラミガキされた高環である。円形の透かし穴が三方にあく。4は高環の坏底部の破片である。5は小型高環の坏部である。荒れていてミガキの単位などは不明。

6・7は三方に円孔のあく器台の破片である。外面には丁寧にヘラミガキが施されている。

8は頸部から直線的に広がる甕形壺である。口縁部には縦の細かなヘラミガキが施され、肩部から胴部中位にかけて細かなヘラミガキが施される。頸部には横方向のヘラミガキを施す。口縁部内面にヘラミガキの痕跡はない。胴部内面の調整は観察できなかった。底部は小さく上げ底となる。

9は口縁部が大きく外反する壺である。外面に縦のヘラミガキ、内面に横方向のヘラミガキが施される。10は素口縁の甕の破片である。外面と内面にハケメの痕跡をみる。11・12は底部と台部の境にハケメの残る台付壺の台部である。折り返しはない。

## (2) 遺物集中区

本遺跡では、古墳時代前期の遺構は、標高が高く緩やかな斜面が広がる第2区から第3区南端に集中しており、それより北側は旧河川の度重なる氾濫原であったことが土層の観察からも明らかになっている。しかしながら、その第3区中央のO・P-14グリッドを中心に、古墳時代前期の遺物が集中して出土した(第23図・写真図版11)。

出土遺物はほとんどが破片で、取り上げ総数は1,912点。その内訳は、高坏・器台90、壺272、甕1,169、壺または甕の胴部破片263、台付甕56、その他62である。それらのうち、接合・復元できた99点を第31～33図に示した。

1～28は高坏、29～34は器台、35・36は鉢、37～51は壺、52は壙形の鉢、53～99は甕である。

1～3は器台状の脚台部に、大きくラッパ状に開く坏部をのせた装飾高坏である。1は坏部の外面は粗いミガキが施されるが、内面はナデの痕跡が残るだけである。坏部の受けにもミガキが施される。坏部、脚部ともに透かし穴は無い。脚部の外面は二段、または三段のヘラミガキが施される。

2・3は坏部の接合面に掻き上げたハケメが残る。内面にはヘラ状工具によるナデの痕跡が残る。1の器受け部外面には縦方向のヘラミガキが施されるが、2はヘラケズリの跡を残すだけである。2の脚部も1と同様にラッパ状に開く。4は直線的に開く高坏の口縁部である。器表が荒れ、調整の痕跡が分からない。

5は外面に縦のヘラミガキを施した高坏の坏部である。6は坏脚部である。坏部にミガキの痕跡はない。裾部は直線的に開き、上方に三つの円孔がみられる。10・11も共通する。9は口縁部と底部の境に隆帯を巡らせる。外面に粗い縦のヘラミガキが施されるが、隆帯の内側、内面にミガキのみられないことから、装飾高坏の口縁部が裾に段の付く高坏の脚部か、二重口縁部の破片と考えられる。

12～17は小型高坏である。すべて坏部が、半球形である。16を除き内面にヘラミガキがみられない。17のみ口縁部外面に横の細かなヘラミガキを施す。脚部は小さく三角形である。18・19は高坏か器台の脚部である。19は三方二段の円孔を穿つ。20～28は三方に円孔を穿つ。28を除き外面の調整は明瞭である。

29は器台の口縁部である。30は小型の器台で、口縁部内外面に縦方向のヘラミガキを施す。31～34は器台の裾部の資料でやはり三方に円孔を穿つ。円孔の位置は比較的高い。

35は内外面に細かなヘラミガキを施した鉢である。底部付近が欠損しているため全体像は分からないが、高坏の坏部かもしれない。36は粗い調整痕跡を残す鉢である。

37は口縁部に装飾を施した複合口縁壺である。口縁部には粘土紐を張り付け、連続して刻み状に木口状工具を斜めに押し当てる。その上に4本5単位の棒状浮文が添付される。頸部には細い突帯がめぐる。球形の胴部外面には、ナデの痕跡が残る。赤彩等はみられない。

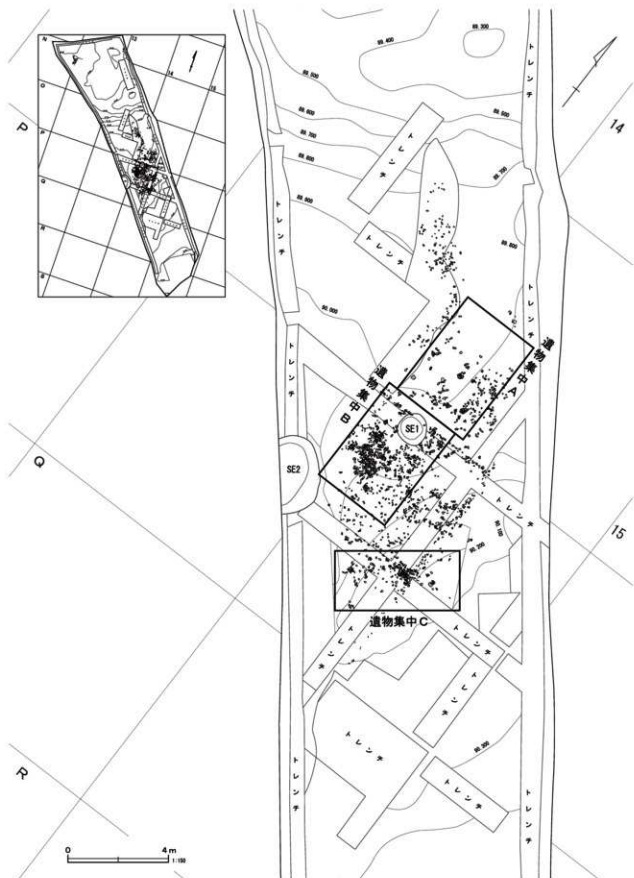
38～42は二重口縁壺である。直立する頸部から水平にあごが出て、そこから再び大きく外反する。40にはハケメを確認したが、ほかには見られない。48・49は装飾壺(いわゆる「パレス型壺」)の胴部破片である。48は櫛歯状工具で横帯を描き、その下に鋸歯状の施文を施す。49は細い沈線で鋸歯状の文様を描く。ともに赤彩は認められない。

50と51は小型の壺の破片である。同一破片ではない。

52は球形の胴部に「く」の字型に屈曲する口縁部の付く鉢である。内面は黒色化している。

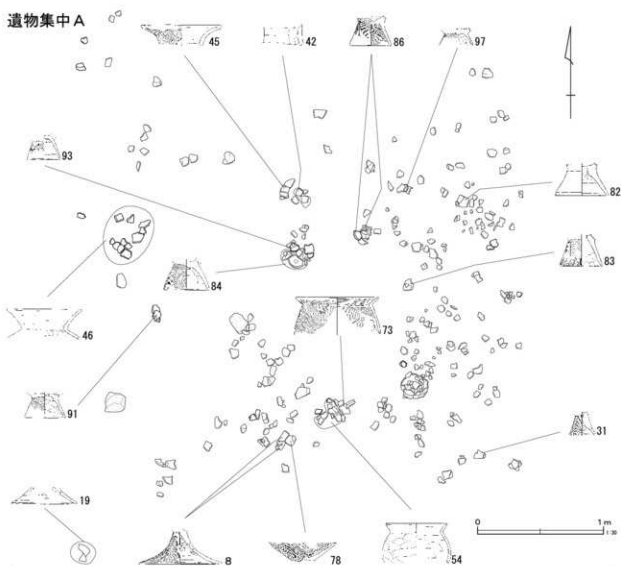
53は広口の甕である。口縁部上端、頸部から胴部中位にかけて横のヘラミガキが施される。口縁部の内外面にはヘラミガキの痕跡はみられない。

54～56は素口縁の小型甕である。54・55には胴部にケズリの痕跡がみられるが、56には明瞭なハ

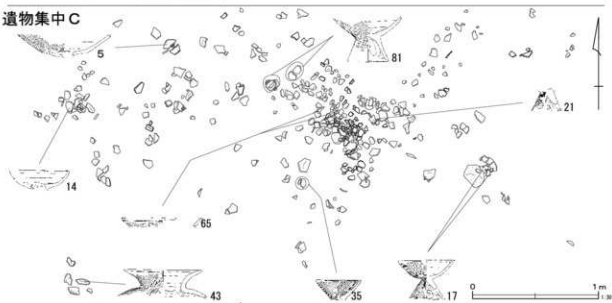


第23図 遺物集中区全体図

遺物集中A

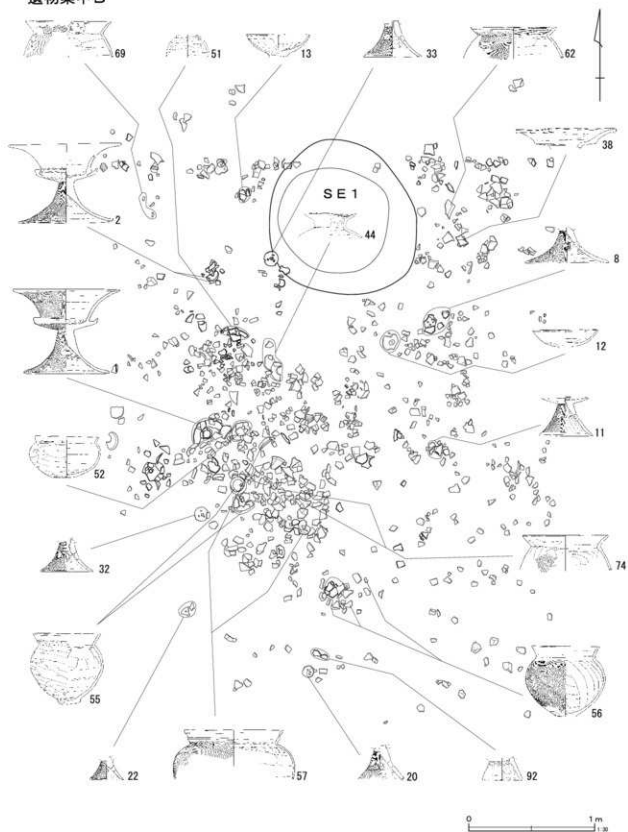


遺物集中C

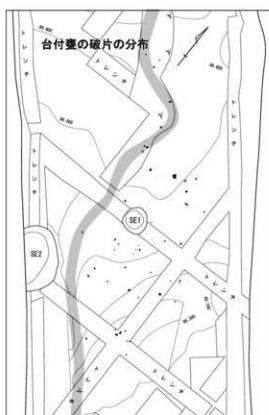
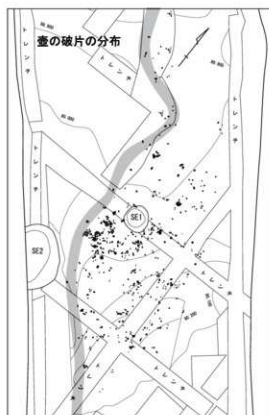
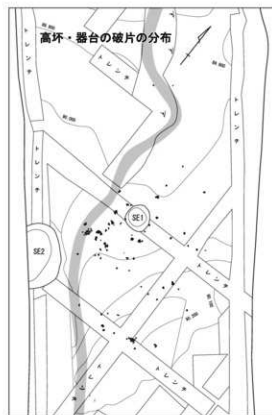


第24図 遺物集中A・C

遺物集中B



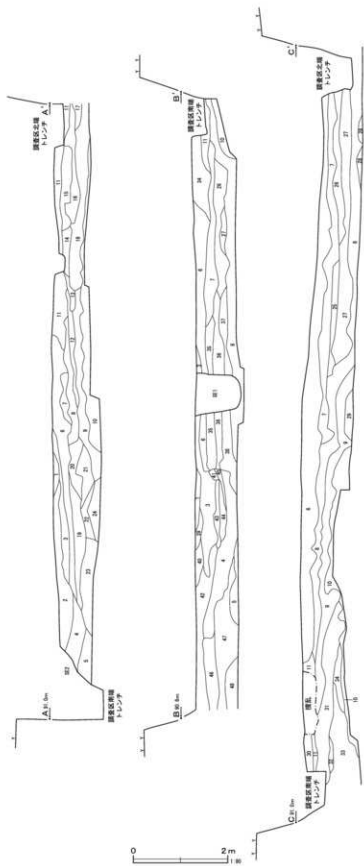
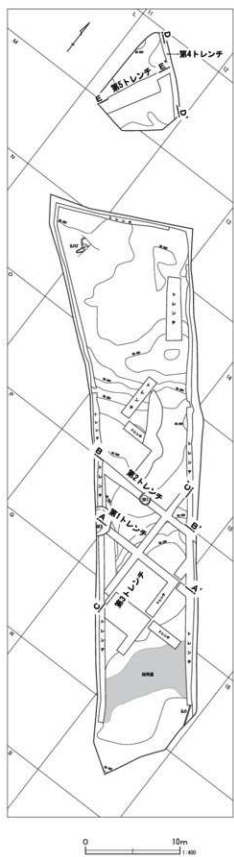
第25図 遺物集中B



旧河道東辺 (推定)

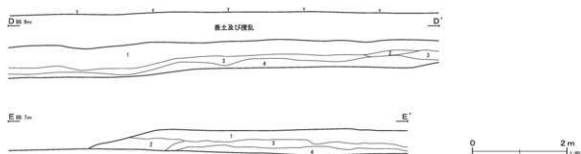
0 4 m  
1:100

第26図 器種別分布図



第27図 第3区土層断面図





第1トレンチ (A-A')

- 1 灰黄褐色土 砂礫層
- 2 褐灰色土 礫層 (褐色ブロック1~3cm大) 多い
- 3 褐灰色土 砂層
- 4 黒褐色土 礫層
- 5 黒褐色土 砂礫層
- 6 黒褐色土 礫(0.5~3cm)・炭化物(1cm以下)多量 焼土粒子僅か  
※この層に大平の土器
- 7 黒褐色土 6層に近似 ローム粒の混入が多い
- 8 灰黄褐色土 小礫(1cm以下)・ローム粒多量
- 9 褐灰色土 ローム粒多量 小礫(1cm以下、但し大半は20.5cm以下)少量
- 10 褐色土 ローム層
- 11 暗褐色土 礫(0.5~5cm)・ローム粒多量
- 12 黒褐色土 礫(0.5~3cm)・ローム粒少量
- 13 褐灰色土 礫(0.5~5cm) 極多量 ローム粒少量
- 14 褐灰色土 礫層
- 15 黒褐色土 礫(0.5~5cm) 多量
- 16 褐灰色土 礫層
- 17 黒褐色土 礫層
- 18 黒褐色土 砂礫層
- 19 黒褐色土 6層に近似 炭化物・焼土の混入なし
- 20 黒褐色土 小礫(0.5~1cm) 多量 炭化物・焼土粒子僅か
- 21 灰黄褐色土 小礫(0.5~1cm)・ローム粒多量
- 22 黒褐色土 礫(0.5~3cm)・ローム粒多量 炭化物・焼土粒子僅か
- 23 灰黄褐色土 礫(0.5~2cm)但し6層・19層に比べると少ない・ローム粒多量 炭化物・焼土粒子僅か
- 24 褐灰色土 礫(0.5~3cm)・ローム粒多量  
※礫層を除くほぼ全ての層に、量の大小はあるが鉄分の比着が見られる

第2トレンチ (B-B')

- 34 黒褐色土 7層に近似 ローム粒やや多量
  - 35 褐灰色土 小礫(1cm以下) 少量
  - 36 黒褐色土 小礫(1cm以下) やや多量
  - 37 褐灰色土 小礫(1cm以下) 少量 ローム粒やや多量
  - 38 褐灰色土 砂礫層
  - 39 灰褐色土 砂層
  - 40 灰褐色土 砂礫層
  - 41 黒褐色土 6層のプロック
  - 42 褐灰色土 礫層
  - 43 褐灰色土 砂層
  - 44 褐灰色土 砂礫層
  - 45 灰褐色土 砂層
  - 46 灰黄褐色土 礫(1~5cm) 僅か 炭化物
  - 47 近い黄褐色土 礫(1~3cm) 僅か
  - 48 褐灰色土 砂礫層
- 第3トレンチ (C-C')
- 25 黒褐色土 小礫(0.5~1cm) 多量
  - 26 黒褐色土 礫(0.5~3cm) 極多量 炭化物少量
  - 27 灰褐色土 小礫(0.5~1cm) 多量
  - 28 暗褐色土 礫(1cm) 少量
  - 29 暗褐色土 ローム中に砂が混入
  - 30 黒褐色土 6層に近似 混入する礫がやや大きい
  - 31 黒褐色土 小礫(0.5~1cm)・砂少量
  - 32 黒褐色土 砂礫層
  - 33 黒褐色土 小礫(1cm以下) 僅か ローム層少量
  - 34 黒褐色土 砂礫層
- 第4トレンチ (D-D' E-E')
- 1 褐灰色土 白色粒子(火山灰?) 鉄分沈着極多量
  - 2 褐灰色土 砂礫層
  - 3 灰黄褐色土 礫(1~3cm)少量 鉄分沈着少
  - 4 灰褐色土 砂礫層

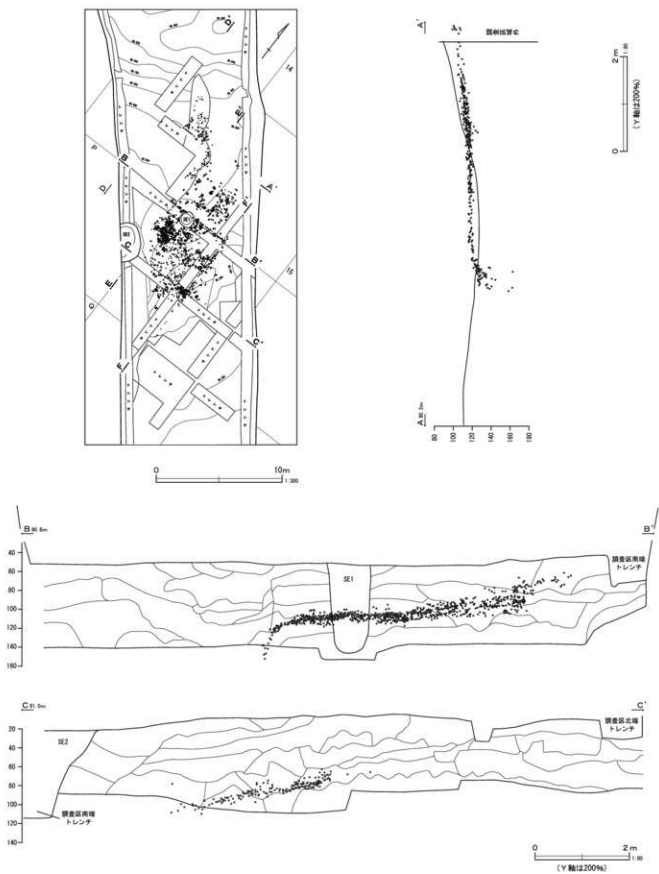
第28図 第4区土層断面図

ケメの痕跡がみられる。57~61はS字状口縁台付甕である。57は口縁部が長くのび、器内も厚い。肩部には横方向のハケメがみられる。58はやや厚い口縁部である。59・60は小型のS字状口縁台付甕である。口唇端部が水平となる。よく似た破片だったが、別個体と判断した。61は白色がかったS字状口縁台付甕の胴部破片である。

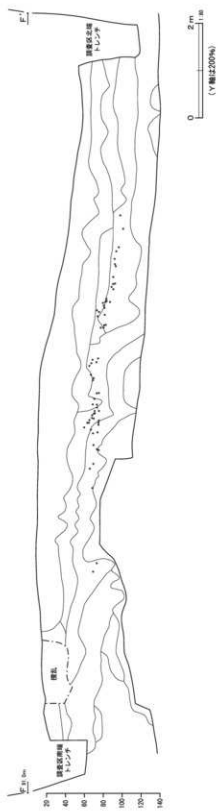
62~67は口唇部外面に幅5mm程の面をもつ素口縁の甕である。69~77は口唇部が直線的のび丸く仕上げられる。内外面にハケメを確認できる。79・80は台の付く小型の土器である。必ずしも台付甕とは言えない。81~99は台付甕の台部であ

る。台端部の折り返しはみられない。99は小型の台付甕の台部で、第1号住居跡の56のような器形になるかもしれない。

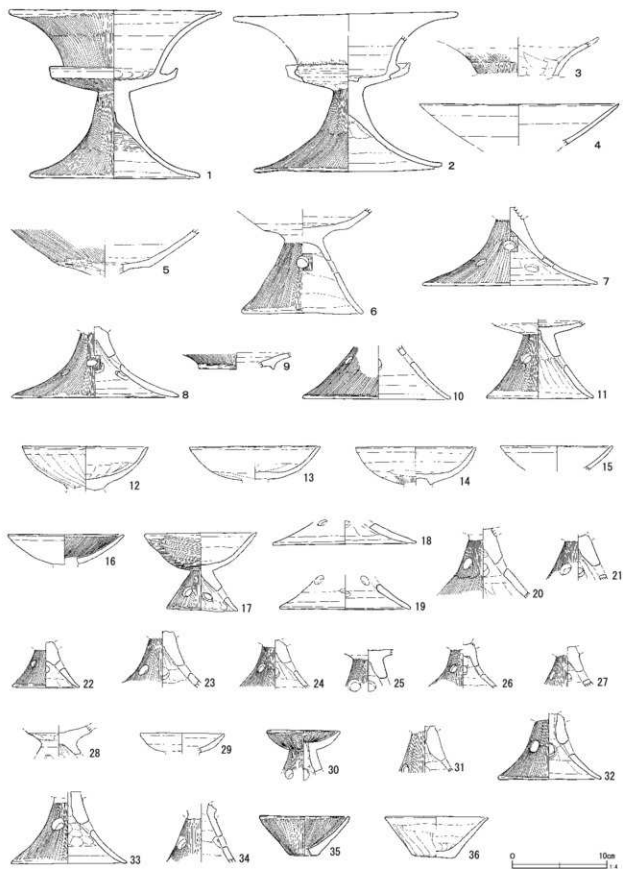
さて、第3・4区の土層断面図を第27図に示した。遺物集中区には、第1~3トレンチが掛るが、その断面を見ても土層の堆積は単純ではなく、度重なる流路の変遷と氾濫土の堆積によって複雑な土層が形成されているのが見てとれる。また、その土層断面図に、出土遺物の垂直分布状況を投影させたのが第29・30図である(視認性を良くするためY方向を200%に拡大した)。また、断面図は東西方向のA-A'、B-B'、C-C'と南北方向の



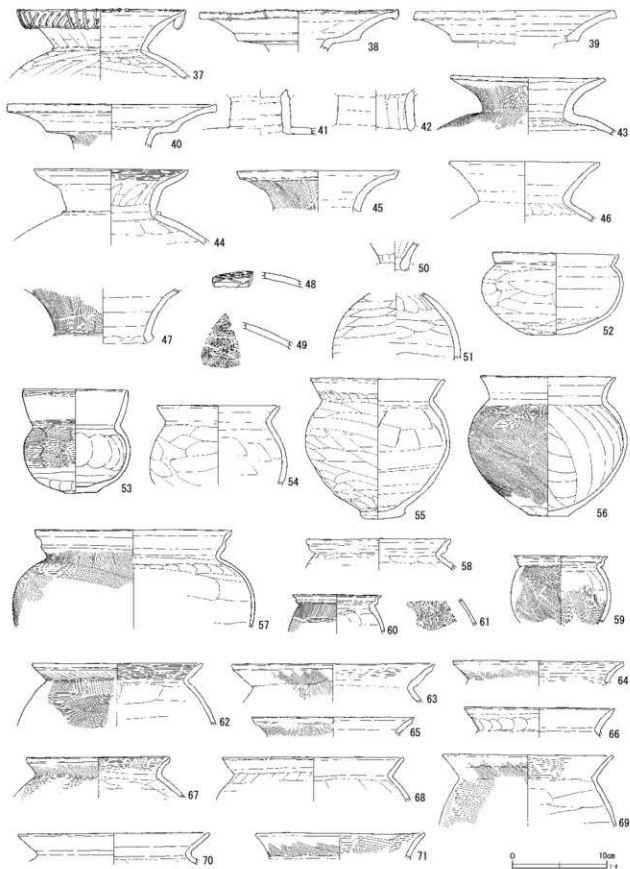
第29図 遺物集中区垂直分布図(1)



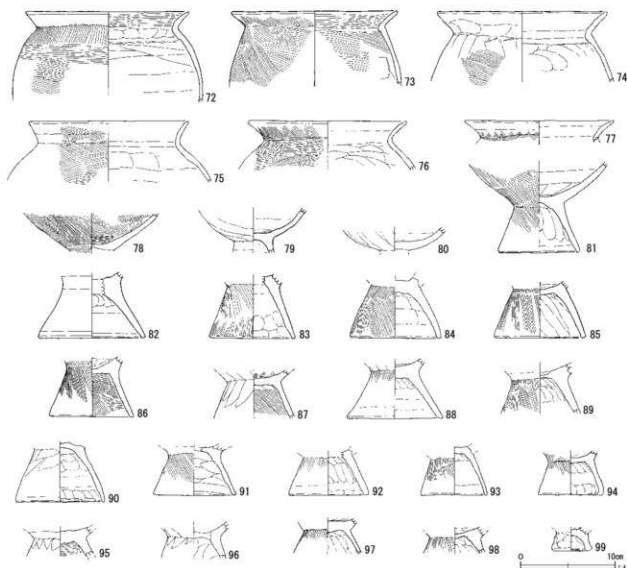
第30図 遺物集中区垂直分布図 (2)



第31图 遗物集中区出土遗物 (1)



第32图 遗物集中区出土遗物 (2)



第33図 遺物集中区出土遺物 (3)

D-D'、E-E'、F-F'に分かれるが、東西方向の断面はそれぞれ南側5m、南北方向の断面は東側5mの遺物を投影したものである。これら遺物投影図に明らかのように、遺物の出土レベル差は10~30cmほどもあり、土層の堆積状況にも同期していることから、土器の廃棄行為はある程度の期間を通じて繰り返し行われたものと思われる。

また、A~C断面の遺物分布状況を見ると何れも西端で急激に落ち込んでいるが、これは廃棄が行われた時点での河川の縁を表していると考えられる。そこで、これらの位置と遺物の平面分布状

況から旧河道の東縁を推定したのが、第26図に網帯で示したラインである。遺物の分布が最も濃密であり、最も頻繁に廃棄行為が行われたと思われる「遺物集中B」のまとまりが、最も水辺に近い位置にあるのが見てとれる。また、全ての器種がここに集中するのに対し、壺そして甕類は数が多いだけでなく広範囲に分布する状況が見られるが、これは、廃棄行為の時間的な変遷の結果とも思われ、II章で触れた「こぶヶ谷戸祭祀遺跡」の出土状況を想起させる。

第7表 遺物集中区出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	遺物集中区	土師器	高坏	60	22.3	18.0	17.8	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No35・36・907・912・930
2	遺物集中区	土師器	高坏	40		20.0		白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・褐	No970・979・993・995
3	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No804
4	遺物集中区	土師器	高坏	5	21.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No195
5	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	黒褐	No83
6	遺物集中区	土師器	高坏	20		12.6		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No781・783
7	遺物集中区	土師器	高坏	10		18.5		白色結晶岩・片岩	普通	淡赤橙	No555
8	遺物集中区	土師器	高坏	10		17.6		白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No198・199
9	遺物集中区	土師器	高坏	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	
10	遺物集中区	土師器	高坏	5	15.4			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No816
11	遺物集中区	土師器	高坏	10		11.5		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No84・477
12	遺物集中区	土師器	高坏	30	13.3			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No547
13	遺物集中区	土師器	高坏	30	13.8			白色結晶岩・片岩	普通	褐灰	No998
14	遺物集中区	土師器	高坏	50	12.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No27
15	遺物集中区	土師器	高坏	5	11.9			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	
16	遺物集中区	土師器	高坏	5	12.3			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No312
17	遺物集中区	土師器	高坏	90	11.7	7.8	8.0	白色結晶岩・片岩	普通	不良	No176
18	遺物集中区	土師器	高坏	10		15.2		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No627
19	遺物集中区	土師器	高坏	10		13.7		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No334・335
20	遺物集中区	土師器	高坏	20				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No218
21	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No1016
22	遺物集中区	土師器	高坏	20		6.8		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No707
23	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	
24	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No482
25	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No98
26	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	不良	灰褐	No1133
27	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No409
28	遺物集中区	土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No188
29	遺物集中区	土師器	器台	5	8.9			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No32
30	遺物集中区	土師器	器台	5	7.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No1191
31	遺物集中区	土師器	器台	5				白色結晶岩・片岩・角閃石	普通	橙	No11
32	遺物集中区	土師器	器台	10		10.8		白色結晶岩・片岩	普通	橙	No840
33	遺物集中区	土師器	器台	10		12.0		白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No991
34	遺物集中区	土師器	器台	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No294
35	遺物集中区	土師器	鉢	10	9.6			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No107
36	遺物集中区	土師器	鉢	60	10.8	4.0	4.4	白色結晶岩・片岩	不良	にぶい・橙	
37	遺物集中区	土師器	パレン型壺	10	17.8			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No236・237・238
38	遺物集中区	土師器	有段口鉢	5	21.1			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No607・608
39	遺物集中区	土師器	有段口鉢	5	21.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No290
40	遺物集中区	土師器	有段口鉢	10	22.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	
41	遺物集中区	土師器	有段口鉢	10				白色結晶岩・片岩	不良	橙	No993・994・995
42	遺物集中区	土師器	有段口鉢	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No237
43	遺物集中区	土師器	壺	10	16.0			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No44
44	遺物集中区	土師器	壺	10	16.2			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No965
45	遺物集中区	土師器	壺	10	17.2			白色結晶岩・片岩	不良	浅黄褐	No232・235
46	遺物集中区	土師器	壺	10	15.9			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No255
47	遺物集中区	土師器	壺	5				片岩	普通	にぶい・橙	No930
48	遺物集中区	土師器	パレン型壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No403
49	遺物集中区	土師器	パレン型壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	No266
50	遺物集中区	土師器	小型壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No790

番号	道標	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考	
51		遺物集中区	土師器	小煎茶	20			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No976	
52		遺物集中区	土師器	鉢	50	13.3	5.0	8.6	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No902
53		遺物集中区	土師器	壺	50	11.2	3.4	11.2	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No626・628・629
54		遺物集中区	土師器	小煎茶	20	12.9			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No184・185・186・187
55		遺物集中区	土師器	小煎茶	90	14.2	2.6	14.9	白色結晶岩・片岩	普通	橙	No845・846・849・851
56		遺物集中区	土師器	小煎茶	50	14.2	4.2	14.8	白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No707・724・731・735・738・743・744・747・748
57		遺物集中区	土師器	S字状口縁台付壺	10	20.9			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No823・891・894
58		遺物集中区	土師器	S字状口縁台付壺	10	15.4			白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	No622
59		遺物集中区	土師器	S字状口縁台付壺	10	9.8			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・暗褐	No74・91・119
60		遺物集中区	土師器	S字状口縁台付壺	5	9.4			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	No78
61		遺物集中区	土師器	S字状口縁台付壺	5				片岩	普通	淡黄	No1183
62		遺物集中区	土師器	壺	10	18.0			白色結晶岩・片岩	良好	暗褐	No592
63		遺物集中区	土師器	壺	5	21.5			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No759
64		遺物集中区	土師器	壺	5	18.1			白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	No491
65		遺物集中区	土師器	壺	10	17.1			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No138・144
66		遺物集中区	土師器	壺	10	15.8			白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	No859・905
67		遺物集中区	土師器	壺	10	15.2			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	
68		遺物集中区	土師器	壺	10	19.2			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No247・248
69		遺物集中区	土師器	壺	10	18.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No3・4
70		遺物集中区	土師器	壺	10	20.2			白色結晶岩・片岩	不良	橙	No709
71		遺物集中区	土師器	壺	10	18.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No210
72		遺物集中区	土師器	壺	20	17.4			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No684・762・764
73		遺物集中区	土師器	壺	10	17.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No180
74		遺物集中区	土師器	壺	10	18.0			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No791・857
75		遺物集中区	土師器	壺	5	17.0			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No209
76		遺物集中区	土師器	壺	5	16.8			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No214
77		遺物集中区	土師器	壺	5	15.8			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No415
78		遺物集中区	土師器	壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	黒褐	No197
79		遺物集中区	土師器	壺	10				白色結晶岩・片岩	不良		No345
80		遺物集中区	土師器	壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No375
81		遺物集中区	土師器	台付壺	30	8.3			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No100・1020・1043・1045・1051・1052
82		遺物集中区	土師器	台付壺	10	11.2			白色結晶岩・片岩	不良	橙	No68
83		遺物集中区	土師器	台付壺	10	8.6			白色結晶岩・片岩	普通	暗褐	No133
84		遺物集中区	土師器	台付壺	20	9.5			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No228・229・230
85		遺物集中区	土師器	台付壺	10	9.2			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No47・151・152・158
86		遺物集中区	土師器	台付壺	20	8.8			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No111・112・113
87		遺物集中区	土師器	台付壺	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No825
88		遺物集中区	土師器	台付壺	10	9.8			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No282
89		遺物集中区	土師器	台付壺	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No264
90		遺物集中区	土師器	台付壺	10	9.2			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No5・14・15
91		遺物集中区	土師器	台付壺	10	8.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No257
92		遺物集中区	土師器	台付壺	5	8.2			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No713
93		遺物集中区	土師器	台付壺	10	6.8			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No231
94		遺物集中区	土師器	台付壺	5	6.7			白色結晶岩・片岩	普通	橙	No118
95		遺物集中区	土師器	台付壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No740
96		遺物集中区	土師器	台付壺	5				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No813
97		遺物集中区	土師器	台付壺	10				白色結晶岩・片岩	普通	橙	No107
98		遺物集中区	土師器	台付壺	10				白色結晶岩・片岩	不良	橙	No141
99		遺物集中区	土師器	台付壺	50	3.5			白色結晶岩・片岩	普通	にぶい・橙	No382



### 3. 古墳時代後期以降の遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡

古墳時代後期以降の竪穴住居跡は、第2区中央部から第3区北端にかけて7軒が検出された。

そのうち、第2区北端で検出された2軒(第2・3号住居跡)は、攪乱による破壊が著しく、形状や所属時期等を確定することは難しかった。また、第3区北端で住居跡の一部が検出されたが(第12号住居跡)、同区南端の第11号住居跡とは旧河道の氾濫原を挟んで50m程度隔てており、南側の住居跡群とは別の集落に属するものと考えられる。なお、第4号住居跡からは「古家」の墨書土器が、第7号住居跡からは30点もの土鍬がまとめて出土している。

#### 第2号住居跡 (第34図)

T・U-18グリッドに位置する。第2区北端で検出されたが、攪乱による破壊が著しく、壁の一部と床面が僅かに検出されたにすぎない。東側の壁が0.4mほど検出され、確認面からの掘り込みは10cm程度である。

出土遺物は少なく、また小破片のみで図示できるものはなかったが、7世紀前半と思われる土器片が出土している。

#### 第3号住居跡 (第35・36図)

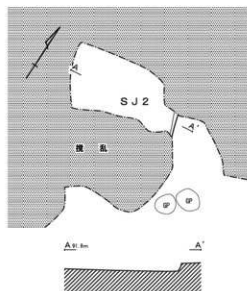
第2号住居跡の東側、U-18グリッド北端で検出された。遺構の北東側の大部分が調査区域外になるほか、攪乱による破壊が著しく、更に遺構の北西部分を欠損する。

調査できたのは遺構の南部分で、南西壁が2m程度残されており、壁の方位はN-37°-Wである。

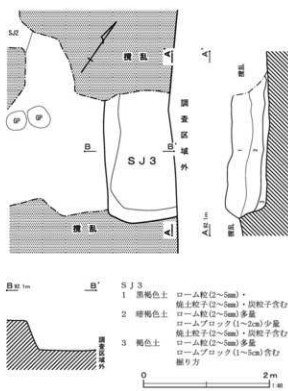
覆土は60cmほど残されており、3層に分層されたが、ローム土を主体とする3層の上面が味面と思われる。

出土遺物は少なく、8点を図示した(第36図)。

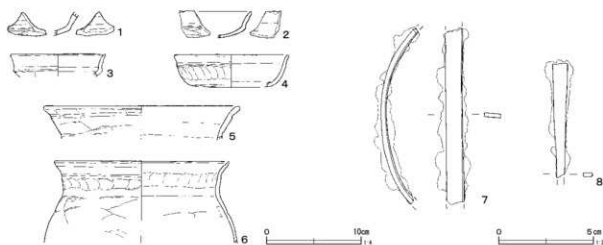
1~4は食器、5・6は煮沸具である。



第34図 第2号住居跡



第35図 第3号住居跡



第36図 第3号住居跡出土遺物

第8表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	部種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	構成	色調	備考
1	SJ3	土師器	有段口縁坏	5				角閃石	不良	淡黄	自然地的・覆土中の混入
2	SJ3	土師器	坏蓋模倣坏	5					良好	橙	ローム台地・覆土中の混入
3	SJ3	土師器	坏蓋模倣坏	5	10.1				良好	にぶい橙	ローム台地・覆土中の混入
4	SJ3	土師器	坏	5	12.1	8.6	3.4		良好	橙	ローム台地
5	SJ3	土師器	甕	5	20.8			白色結晶岩・片岩	普通	明赤褐	
6	SJ3	土師器	甕	10	18.5			白色結晶岩・片岩・角閃石	良好	明赤褐	
7	SJ3	鉄製品	棒状品		長さ[10.2]cm	幅0.9cm	厚さ0.2cm	重さ17.3g			
8	SJ3	鉄製品	棒状品		長さ[6.0]cm	幅0.5cm	厚さ0.2cm	重さ5.1g			

1～4は土師器の坏である。1は有段口縁坏、2・3は坏蓋模倣坏である。1は砂質で自然堤防上の粘土を用いるが、2・3はローム台地上の粘土と考えられる。4は平底の坏で外面に指オサエの跡を残し、小さく外反する。ローム台地上の粘土を用いる。

5・6は土師器の甕である。肩部のヘラ削りは粗いが、器壁をととても薄くケズリ込む。ゆるく頸部が外反することから、「コ」の字状口縁甕より以前の形態の土器である。

7・8は厚さ0.2cmほどの棒状の鉄製品である。7は幅0.9cm弓形に湾曲する。8は上端0.8cm、下端0.4cmと下に向かって細くなっている。

第3号住居跡に直接かかわる土器は、4～6の3点と少ないが、8世紀末から9世紀初頭と考えておきたい。なお、1～3は覆土中の混入品である。古墳時代後期、7世紀前半の遺物である。当該期の遺構は、調査区域内に確認できなかった。

#### 第4号住居跡 (第37・38図)

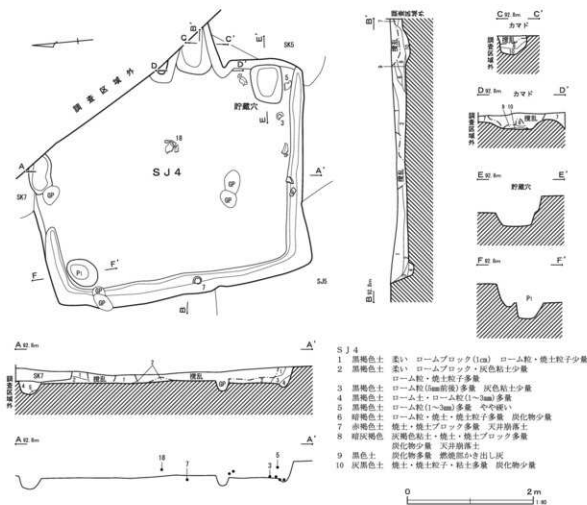
V-19及びW-19・20グリッドに位置する。第2区南寄りに検出されたが、北東コーナーとカマドの一部は調査区域外となる。第5・7号土壇及び第5号住居跡と重複し、第5号住居跡より新しく、第7号土壇より古い。

平面形は東側が僅かに開く長方形を呈し、南北4.3m、東西3.5mで東壁以外の壁下に壁溝が検出された。主軸方位はN-94°-Eである。

カマドは東壁やや南寄りに検出されたが、北東部分は調査区域外となり、攪乱の影響も大きい。カマド付近からの遺物の出土はなかった。

覆土上部が攪乱で破壊されており、遺物のほとんどは床面直上の出土である。1～15は食器、16～21は貯蔵・煮沸具である。1・2は土師器の坏、3～14は須恵器の坏、15は須恵器の高台付碗である。

1は平底の暗文土器である。体部内面には、底



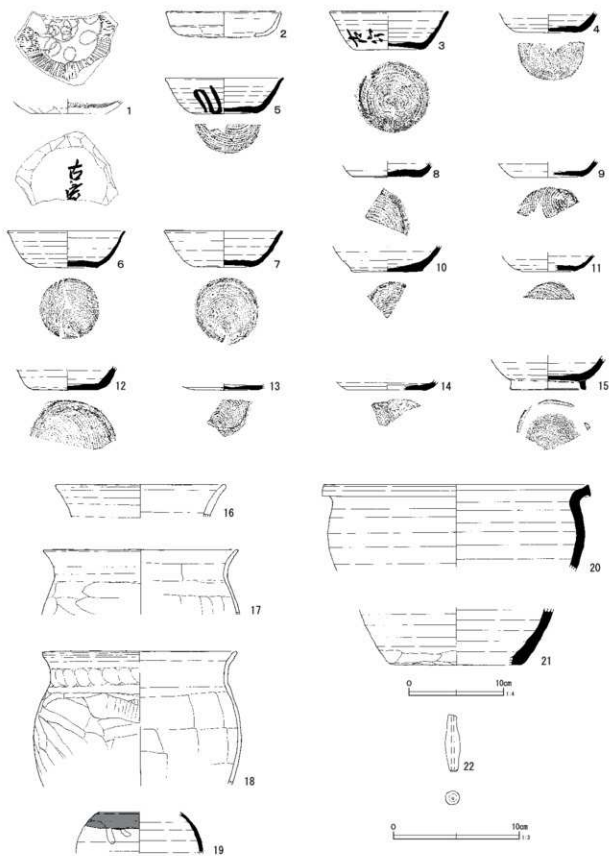
第37図 第4号住居跡

部から口縁部に向かい放射状暗文を施したのち、底部内面に螺旋状暗文を施す。放射状暗文は7~10本単位で放射状に施され、螺旋状暗文は体部の立ち上がり付近から内側に円弧を描くように、中心に向かって施文される。外面は底部・体部ともヘラケズリの後にヘラミガキを施したようであるが、その単位を確認することはできなかった。在地産暗文土器である。底部の中央には、「古家」の墨書が残る。墨痕は鮮明だが、「家」の下半分は欠損する。「古家」については、「まとめ」で詳述する。

2は平底で扁平な土師器坏である。底部外面を粗くヘラケズリするが、器壁はとても薄い。

3・4・8・12~14には底部周辺に回転ヘラケ

ズリが認められ、他は糸切り後の調整を行わない。また、12~14には胎土に白色針状物質(海綿骨針)がみられる。さらに、3~11・15には白色結晶粒(石英)や片岩粒が含まれる。よって、12~14は鳩山町南比企窯の製品、3~11・15は寄居町木野窯跡群の製品と考えられる。なお、4・8は南比企窯の可能性も残る。また、14は底径がやや大きく、混入の可能性が残る。3と5には体部外面に墨書がみられる。3は「古家」、5は「弓」か「川」・「己」などと考えられる。3の「古家」は、墨痕が薄く、判読することが難しい。1の「古家」に倣って釈読した。5は「弓」の最終画が不鮮明となったと考えるか、「川」や「己」などとするか、意見の分かれるところである。



第38图 第4号住居跡出土遺物

第9表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ4	土師器	坏	10		8.1		白色結晶岩・片岩	良好	橙	内面底部に縦施文・外面底部に横 書「古家」
2	SJ4	土師器	坏	5	12.2	9.7	2.7		良好	橙	
3	SJ4	須恵器	坏	40	12.6	7.0	4.1	白色結晶岩・片岩	普通	灰オリーブ	墨書「古家」・末野 No.8
4	SJ4	須恵器	坏	20		7.1		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	末野
5	SJ4	須恵器	坏	30	12.5	6.4	3.8	白色結晶岩・片岩	普通	灰白	墨書「弓」か「川」・末野 No.3
6	SJ4	須恵器	坏	80	12.5	6.4	3.9	白色結晶岩・片岩	普通	灰	末野 カマド
7	SJ4	須恵器	坏	60	12.5	6.0	4.0	白色結晶岩・片岩	良好	灰白	末野 No.4
8	SJ4	須恵器	坏	5		7.5		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	末野
9	SJ4	須恵器	坏	5		7.2		白色結晶岩・片岩	普通	灰	末野
10	SJ4	須恵器	坏	5		7.5		白色結晶岩・片岩	普通	灰白	末野
11	SJ4	須恵器	坏	5		5.5		白色結晶岩・片岩	普通	灰白	末野 カマド
12	SJ4	須恵器	坏	5		6.2		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	良好	灰	末野 カマド
13	SJ4	須恵器	坏	5		7.0		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	南北企
14	SJ4	須恵器	坏	5		8.3		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	良好	灰	南北企
15	SJ4	須恵器	高台付壺	5		8.1		白色結晶岩・片岩	普通	灰白	末野
16	SJ4	土師器	甕	5	18.1			白色結晶岩・片岩・角閃石	良好	にぶい橙	ローム台地 カマド
17	SJ4	土師器	甕	5	20.6			角閃石	良好	橙	自然堤防
18	SJ4	土師器	甕	30	20.7			角閃石	良好	にぶい橙	ローム台地 カマド No.9
19	SJ4	須恵器	小型甕	5					良好	灰	東金子
20	SJ4	須恵器	鉢	5	28.1			白色結晶岩・片岩	良好	灰	末野
21	SJ4	須恵器	鉢	5		13.9		白色結晶岩・片岩	普通	灰	末野
22	SJ4	土製品	土鏝		長さ4.5cm	幅1.1cm	重さ5.1g				

16～18は土師器の甕である。16は口縁部破片のため壺かもしれない。17と18はヘラケズリは粗いが、とても薄く削り込む。ゆるく頸部が外反することから、「コ」の字状口縁壺より以前の形態の甕である。16・18はローム台地の粘土、17は自然堤防の粘土が用いられている。

19は須恵器の小型壺、おそらく長頸甕であろう。肩部に自然釉の釉垂れがあり、胴部中心から底部に向かってロクロによる削り込みがみられる。硬質に焼き上がる入間市東金子窯の製品である。

20・21は須恵器の鉢である。同一個体かもしれないが、21が長胴広口壺の底部の可能性も残る。末野窯の製品である。

22は土鏝である。

第4号住居跡は、出土した須恵器の坏や土師器の甕から8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

### 第7号住居跡 (第39・40図)

W-19グリッド北西隅で検出された。第4号住居跡の西約2.5mに位置し、形状・主軸方位とも近似する。南側で古墳前期の第5・6号住居跡を切つて造られ、第6号土壇に切られる。

平面形は南北に長い長方形を呈し、東壁にカマドを有する。南北4.4m、東西3.1mで、床面までの深さは約30cm。主軸方位はN-80°Eである。壁溝は深さ10cmほどで明瞭に検出され、全周する。

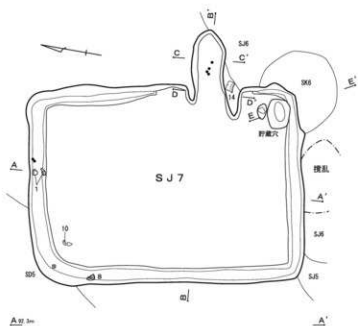
カマドは東壁のやや南寄り、壁を大きく掘り込んで構築され、橙褐色粘土を用いた袖は比較的小さい。カマドからの遺物の出土はなかった。

貯蔵穴はカマド南脇のコーナー部に位置する。柱穴等は検出されなかった。

出土遺物は第40図に15点を図示した。なお、覆土中から多量の土鏝が出土している(第41図)。

1は土師器の坏、2～11は須恵器の坏、12・13は須恵器の蓋、14・15は土師器の甕である。

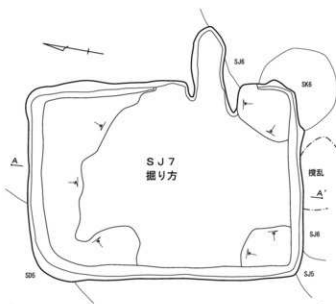
1は内面に放射状暗文と螺旋状暗文を施す暗文土器である。放射状暗文は、3～5本が一単位となる。少なくとも8単位以上施す。放射状暗文は、底部から口唇部に向かいはね上げるように暗文を施す。螺旋状暗文は、底部周辺から中心部に向かうように右回りで施文される。三回転で中心に向かう。深身の坏で口径もやや大きく、やや硬質に焼かれている。底部周辺を横方向にヘラケズリする。以上の点は、群馬県に広く分布する「上野型」



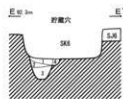
A 10m



A 10m



A 10m



S J 7

- 1 黒褐色土 ローム粒(2~5mm)多量・ロームブロック(1~3cm)・粘土粒子(2~5mm)含む 炭粒子(2~5mm)少量
  - 2 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~3cm)多量 粘土粒子(2~5mm)少量 炭粒子(2~5mm)微量
  - 3 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)含む 粘土ブロック(2cm)少量 炭粒子(2~5mm)微量 粘土粒子(2~5mm)・炭粒褐色粘土ブロック多量
  - 4 褐色土 ローム粒(2~5mm)多量・ロームブロック(1~3cm)含む
  - 5 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)・粘土粒子(2~5mm)含む 粘土ブロック(1cm)少量 炭粒子(2~5mm)微量 炭粒褐色粘土ブロック多量
  - 6 炭粒褐色土 ローム粒(2~5mm)少量 粘土粒子(2~5mm)多量 粘土ブロック(1~3cm)含む 炭粒子(2~5mm)微量 炭粒褐色粘土ブロック多量
  - 7 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)少量 粘土粒子(2~5mm)・粘土ブロック(1~5cm)多量 炭粒子(2~5mm)微量 炭粒褐色粘土粒子多量 粘土ブロックはカマド天井が砕\*に剥落したもの
  - 8 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)多量 粘土粒子(2~5mm)含む 粘土ブロック(1~3cm)少量 炭粒子(2~5mm)微量 炭混初期成土
  - 9 炭粒褐色土 ローム粒(2~5mm)・粘土粒子(2~5mm)含む 粘土ブロック(1cm)少量 カマド成土 黒褐色土まじり
  - 10 炭粒褐色土 ローム粒(2~5mm)・粘土粒子(2~5mm)少量 粘土ブロック(1cm)少量 炭粒褐色粘土ブロックのソズ構築土
- 貯蔵穴
- 1 褐色土 ローム粒(2~5mm)含む 粘土粒子(2~5mm)・炭粒子(2~5mm)少量
  - 2 褐色土 ローム粒(2~5mm)・炭粒褐色粘土ブロック含む・ロームブロック(1~5cm)・粘土粒子(2~5mm)少量 炭粒子(2~5mm)微量 カマドからの流入
  - 3 褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~5cm)含む 炭粒褐色粘土ブロック多量 カマドからの流入
  - 4 褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~5cm)多量 炭混埋戻し土
- 掘り方
- 1 黒褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~5cm)多量

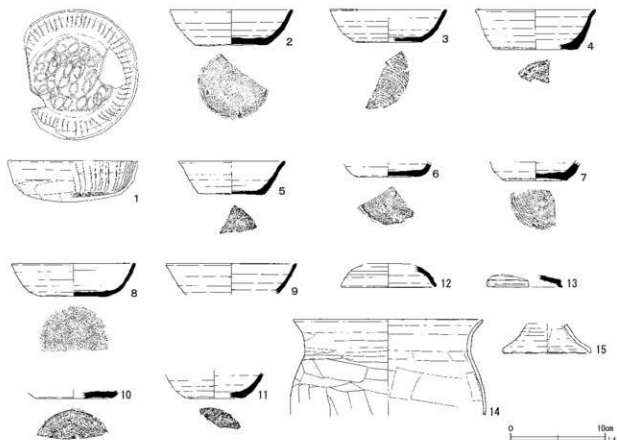
0 2m 1:10

第39図 第7号住居跡

暗文土器の諸特徴と合致する。

須恵器坏のうち、2～7・11は底部糸切り後未調整、8・9は底部全面に回転ヘラケズリがみられる。2～7は白色結晶粒（石英）や片岩粒が含

まれる。また、8～11は白色針状物質（海綿骨針）がみられる。よって、2～7は鳩山岡南比企窯の製品、8～11は寄居町末野窯跡群の製品と考えられる。



第40図 第7号住居跡出土遺物 (1)

第10表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ7	土師器	坏	80	13.8		4.4	白色結晶岩・片岩・角閃石	良好	橙	内面底部に右回りの螺旋文土附物 №5・6
2	SJ7	須恵器	坏	60	13.0	7.5	3.8	白色結晶岩・片岩	良好	灰白	南比企
3	SJ7	須恵器	坏	10	12.4	7.0	3.5	白色結晶岩・片岩	不良	にぶい橙	南比企
4	SJ7	須恵器	坏	5	12.5	8.5	4.3	白色結晶岩・片岩	普通	灰白	南比企
5	SJ7	須恵器	坏	5	11.3	6.4	3.5	白色結晶岩・片岩	普通	灰白	南比企
6	SJ7	須恵器	坏	5		6.5		白色結晶岩・片岩	普通	灰	南比企
7	SJ7	須恵器	坏	5		6.6		片岩	普通	灰オリーブ	南比企
8	SJ7	須恵器	坏	30	13.0	7.5	3.5	白色結晶岩・片岩・白色針状物質	良好	灰	末野 №2
9	SJ7	須恵器	坏	10	13.8			白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	末野
10	SJ7	須恵器	坏	5		8.0		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰	末野 №3
11	SJ7	須恵器	坏	5		5.5		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰	末野
12	SJ7	須恵器	蓋	5	10.0				普通	灰	藤岡混入か
13	SJ7	須恵器	蓋	5				角閃石	普通	灰白	藤岡
14	SJ7	土師器	甕	10	20.2			角閃石	良好	橙	ローム台地 №13
15	SJ7	土師器	台付壺	5		9.5			良好	橙	ローム台地

12は天井部と口縁部の境が不明瞭な半球形であることから、古墳時代後期の須恵器灯蓋と考えられる。比較的器高が低く扁平であることから、7世紀に下ると考えたい。やや口径が大きいかもしれない。覆土中の混入品である。

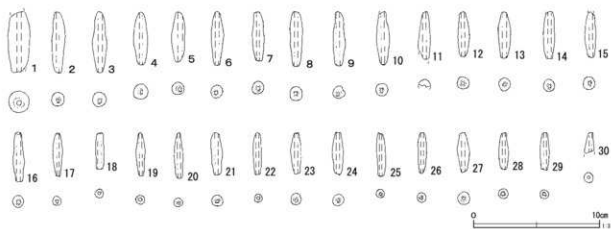
13は口唇部をN字状とした須恵器の蓋である。小破片であり、焼きが甘く黄褐色に仕上がる。末野窯跡の製品といい難い。

14は口縁部がゆるく外反しながら立ち上がる土師器の甕である。外面は粗いヘラケズリ、内面はナデの痕跡がみられる。15は台付甕の台部である。裾部で内湾する。14・15は洗練された丁寧な作りで薄く作られている。

以上出土遺物より、本住居跡は8世紀末から9世紀初めにかけて営まれた遺構と考えたい。

なお、本住居跡からは下記のとおり30点の管状土錘が出土している。他の遺構では、第4号住居跡で1点出土しているのみである。必ずしも一か所にまとまった状態での出土ではなかったが、11と30が半分ほど欠損するほかは、ほぼ完形である。また、大きさ・形状は突出して大きい1を除けば大きな差はないが、黒色・緻密でやや小型の17～19・22・25・26・28～30は明らかに他に異なり注意される。

分類等については第V章2を参照されたい。



第41図 第7号住居跡出土遺物(2) 土錘

第11表 第7号住居跡出土土錘観察表

番号	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	分類	胎土	色調
1	4.8	1.8	0.35	15.0	E a V Z	ア	黒褐色
2	4.8	1.1	0.3	5.1	B a V X	イ	にぶい橙色
3	4.8	1.2	0.35	5.2	B a V X	イ	褐灰色
4	4.1	1.1	0.2	4.4	B a VI X	ア	褐灰色
5	4.0	1.1	0.3	3.4	B a VI L	ア	にぶい橙色
6	4.2	0.9	0.3	3.0	B a VI L	イ	にぶい橙色
7	4.0	0.9	0.3	3.1	A a VI L	ア	褐灰色
8	4.3	1.0	0.3	3.9	B a VI L	ア	褐灰色
9	4.3	1.0	0.3	3.0	B a VI L	ア	にぶい橙色
10	4.3	1.0	0.25	4.0	C a VI X	イ	褐灰色
11	—	1.0	0.3	2.2	B a —	M	にぶい橙色
12	3.5	1.0	0.3	2.8	B a VI M	ア	にぶい橙色
13	3.6	1.0	0.3	2.9	B a VI M	ア	にぶい橙色
14	3.7	0.9	0.3	2.8	B a VI M	ア	にぶい橙色
15	3.8	0.9	0.25	2.9	B a VI M	ア	褐灰色

番号	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	分類	胎土	色調	
16	3.9	0.9	0.3	2.4	A a VI M	イ	にぶい橙色	
17	3.4	0.7	0.2	1.6	B a VI S	ウ	黒色	
18	2.9	0.7	0.3	1.4	A a VI S	ウ	黒色	
19	3.4	0.7	0.2	1.8	B a VI S	ウ	黒色	
20	3.6	0.8	0.2	1.8	B a VI S	ア	にぶい橙色	
21	3.3	0.9	0.2	2.6	B a VI M	イ	にぶい橙色	
22	3.4	0.7	0.2	1.7	B a VI S	ウ	黒色	
23	3.3	0.8	0.3	1.9	B a VI S	ア	褐灰色	
24	3.4	0.9	0.2	2.8	C a VI M	ア	にぶい橙色	
25	3.5	0.7	0.2	1.7	B a VI S	ウ	黒色	
26	3.2	0.7	0.2	1.7	B a VI S	ウ	黒色	
27	3.1	0.9	0.3	2.4	C a VI M	ア	にぶい橙色	
28	2.9	0.8	0.2	1.7	B a VI S	ウ	黒色	
29	3.0	0.7	0.2	1.5	B a VI S	ウ	黒色	
30	—	0.8	0.2	0.9	B a —	S	ウ	黒色



## 第8号住居跡 (第42・43図)

V・W-18グリッドに位置する。第2区中央部で検出されたが、ほとんどの部分が調査区域外で、僅かに北東コーナーとカマドの一部を調査することができた。北側で第9号住居跡と重複する。

平面形は方形を呈するものと思われ、東壁にカマドを設置し、主軸方位は凡そN-96°-Eである。床面までの深さは約45cmで、黒褐色土を主体とする覆土は2層に分層された。第9号住居跡との重複部分は少ないが、土層断面の観察では、第9号住居跡の方が新しいと判断される。

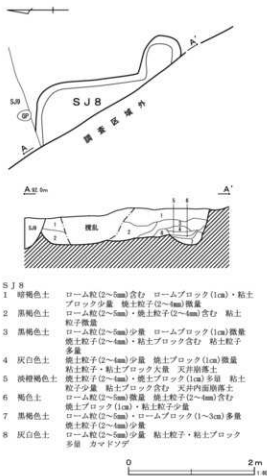
カマドは東壁を60cmほど掘り込んで構築されており、燃焼部の幅も約60cmである。袖は明瞭には検出できなかったが、土層断面で確認することができた。灰白色粘土を主体とする8層が袖芯材に相当すると思われ、7層が掘り方、その上面が火床面であろう。また、焼土ブロックを多量に含む4・5層は、天井部の崩落によるものと考えられる。

壁溝・柱穴等の施設は検出できなかった。

出土遺物は少なく、4点を図示するに留まった。

1・2は須恵器の坏、3・4は土師器の甕である。1・2は白色針状物質（海綿骨針）がみられる小破片である。鳩山町南比企窯の製品と考えられる。

3・4も白色針状物質（海綿骨針）が含まれるが、児玉地方や群馬県藤岡市の埴輪にも同物質が含まれることから、児玉地方のローム台地の粘土



第42図 第8号住居跡

を用いた製品と考えたい。

出土土器は少ないが、底径を8cmに復元できる須恵器坏(1)や、口縁部がゆるく外反する土師器甕(3)などの存在から、本住居跡は8世紀後葉から9世紀初頭の所産と考えられる。



第43図 第8号住居跡出土遺物

第12表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ8	須恵器	坏	5	12.5			白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	南比企
2	SJ8	須恵器	坏	5				白色針状物質	普通	灰	南比企
3	SJ8	土師器	甕	5	18.6			角閃石・白色針状物質	普通	黄	藤岡 カマド
4	SJ8	土師器	甕	5		4.3		角閃石・白色針状物質	良好	ぶい・橙	藤岡 カマド

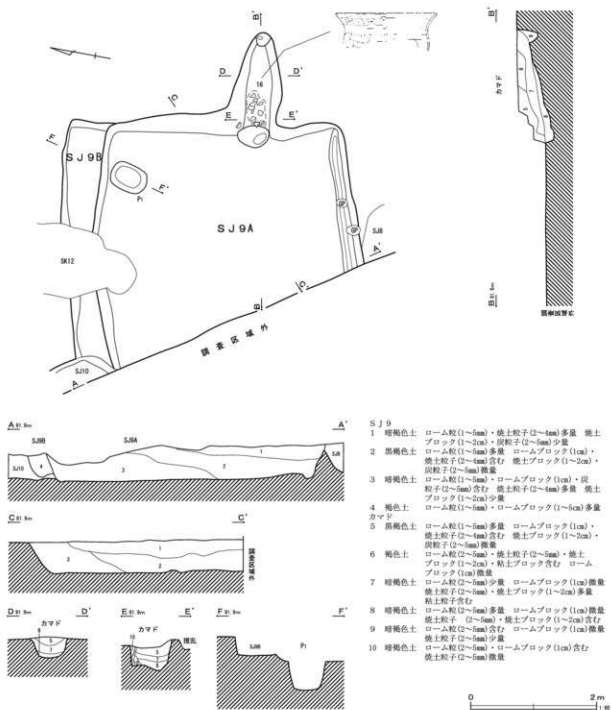
### 第9号住居跡 (第44~46図)

V-18グリッド東寄りに検出された。第2区中央に位置し、南西側の一部が調査区域外となる。

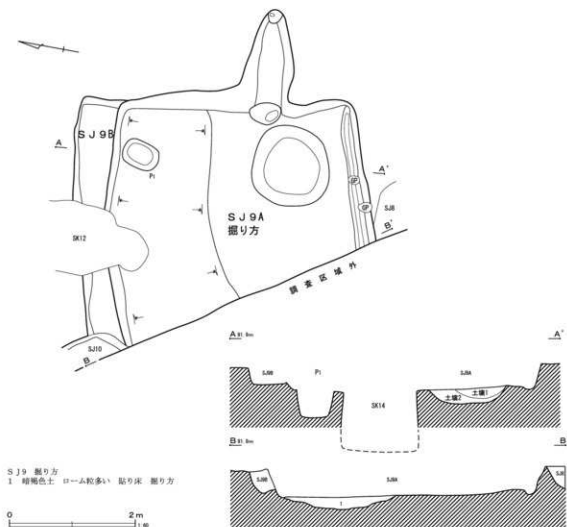
第8・10号住居跡及び第12号土壇と重複する。北側で重複する第12号土壇は、明らかに本遺構より新しい。他の2軒は重複部分が少なく、特に第

10号住居跡は時期的にも近い遺構であるが、土層断面観察の結果、何れも本遺構に切られているようである。

平面形は東西方向に長い長方形を呈すると思われる、東壁にカマドを設置する。なお、北側で二重に壁が検出されたため、南側をSJ-9A、北側部



第44図 第9号住居跡



第45図 第9号住居跡掘り方

分をSJ-9 Bとして調査を行った。因みにSJ-9 Aでは南北約4m、東西現存長約4mで、主軸方位はN-79°-Eである。

壁溝は南壁部分のみで検出され、深さは8cmほど。明確な柱穴や貯蔵穴は検出されなかった。

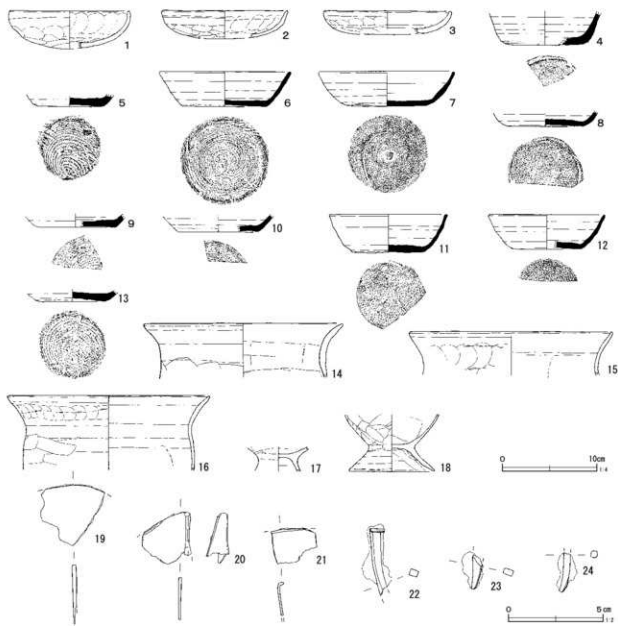
カマドは東壁の南寄りに設置され、壁を1.5m程掘り込んで構築される。燃焼部の幅は70cmほどである。袖は明瞭には検出されなかったが、断面図の10層が袖に相当すると思われる。10層中で縦位に出土した細長い石は、袖の芯材として用いられたものであろう。なお、焼土ブロックを多量に含む7層は、カマド天井部の崩落によるものと考えられる。

なお、調査後に床下を精査したところ、掘り方

とともにカマド西脇で浅い土壇状の掘り込みを検出した。覆土はローム土を主体として焼土を含むが、二重の掘り込み状況は注意されよう。

出土した遺物は第46図に示した。1~3が土師器の坏、4~13は須恵器の坏である。また、14~18は土師器の甕か台付甕である。1は深めの内湾口縁坏で薄く削られる。2・3はやや扁平な坏である。3点ともローム台地の粘土が用いられている。

4・8~12は糸切り後底部周辺に回転ヘラケズリを施す。6・7は底部の全面に回転ヘラケズリがみられる。ほかは糸切り後未調整のままである。4・5には白色結晶粒（石英）や片岩粒が含まれるため、寄居町末野窯跡群の製品と考えられ、ほかは白色針状物質（海綿骨針）がみられるため、



第46図 第9号住居跡出土遺物

鳩山町南比企窯の製品と考えられる。4・5は口縁部が箱型に近く立ち上がる。6～10は底径が9cm前後と大きい。6の口縁部は直線的にのびるが、ほかは緩く内湾する。

14～16は土師器甕の口縁部破片であり、指オサエを残す。器肉はとても薄く、緩く外反する。17・18は台付甕の台部の破片である。土師器の甕は、すべてローム台地の粘土を用いている。

19～24は鉄製品である。19～21は厚さ0.1～0.2cmほどの板状品で、20はL字に曲げられ、21は上

端が僅かに折り返されている。用途は明瞭でないが同一個体の可能性がある。22～24は断面方形の釘である。22・23は同一個体と思われる。

第9号住居跡から出土した土器のうち、土師器坏の1～3、須恵器坏の6～10、土師器甕の14などは8世紀中葉の特徴をもち、須恵器坏の4・5・11～13、土師器甕の15～18は8世紀後半から9世紀初頭の特徴をもつ。発掘調査時には、第9B号住居跡の覆土（第4層）に多量のロームブロックが含まれることから、住居の建て替え（縮小）に

第13表 第9号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ9	土師器	坏	20	12.3		4.0	白色結晶岩・片岩	普通	橙	ローム台地
2	SJ9	土師器	坏	5	13.4		3.1		良好	橙	ローム台地
3	SJ9	土師器	坏	5	13.5		2.5	白色結晶岩・片岩	良好	にぶい橙	ローム台地
4	SJ9	須恵器	坏	5		8.4		白色結晶岩・片岩	普通	灰白	未野 床下
5	SJ9	須恵器	坏	20		6.5		白色結晶岩・片岩	不良	にぶい橙	未野
6	SJ9	須恵器	坏	60	13.9	9.0	3.6	白色結晶岩・片岩・白色針状物質	良好	灰	南比企
7	SJ9	須恵器	坏	80	14.5	8.3	3.6	白色結晶岩・片岩・白色針状物質	良好	灰	南比企 床下
8	SJ9	須恵器	坏	20		8.1		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰	南比企 カマド
9	SJ9	須恵器	坏	5		8.4		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	南比企
10	SJ9	須恵器	坏	5		8.5		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰	南比企
11	SJ9	須恵器	坏	40	12.5	7.1	4.0	白色結晶岩・片岩・白色針状物質	良好	灰	南比企
12	SJ9	須恵器	坏	20	12.3	6.7	3.6	白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	南比企 床下
13	SJ9	須恵器	坏	20		6.6		白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰白	南比企 カマド
14	SJ9	土師器	壺	10	21.0			角閃石	普通	橙	ローム台地
15	SJ9	土師器	壺	5	21.6			角閃石	良好	にぶい橙	ローム台地 カマド1
16	SJ9	土師器	壺	5	21.5			角閃石	良好	にぶい橙	ローム台地
17	SJ9	土師器	台付壺	5				角閃石	良好	明赤褐	ローム台地
18	SJ9	土師器	台付壺	10		9.1		白色結晶岩・片岩	良好	明赤褐	
19	SJ9	鉄製品	板状品		長さ3.3cm	幅3.2cm	厚さ0.2cm	重さ4.0g			
20	SJ9	鉄製品	板状品		長さ2.5cm	幅2.2cm	厚さ0.1cm	重さ3.1g			
21	SJ9	鉄製品	板状品		長さ2.3cm	幅1.8cm	厚さ0.1cm	重さ1.6g			
22	SJ9	鉄製品	釘		長さ3.6cm	幅0.4cm	厚さ0.3cm	重さ4.2g			
23	SJ9	鉄製品	釘		長さ1.8cm	幅0.5cm	厚さ0.3cm	重さ1.4g			
24	SJ9	鉄製品	釘		長さ2.0cm	幅0.3cm	厚さ0.35cm	重さ1.3g			

伴う埋め戻しと判断したが、上記のとおり出土遺物に時期差があることから、重複した2軒の堅穴住居である可能性も考えられよう。

#### 第12号住居跡 (第47・48図)

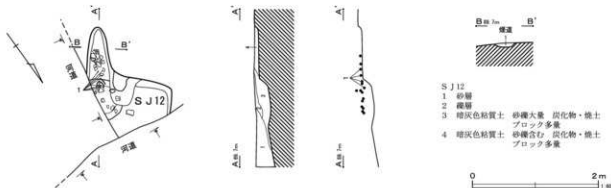
N-11・12グリッドに位置する。第3区北端で単独で検出された。旧河道による破壊が著しく、北東コーナーとカマドの一部のみを検出することができた。床面までの深さは8cmほどである。

土層断面図にも明らかのように(第1・2層)、2時期の旧河道が認められ、礫層を主体とする東側が古く、砂層を主体とする北側の河道が新しい

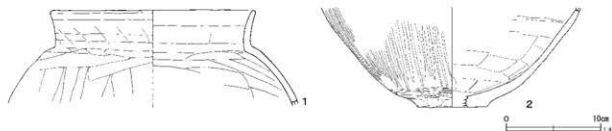
ようである。

カマドは南西壁に設置されており、燃焼部奥壁はほとんど壁を掘り込んでおらず、袖の一部と煙道部分が0.8mほど検出された。

遺物はカマド周辺から小片が出土したが、図示できたのは2点である。1・2は壺の破片である。1は口縁部が短く直立する。肩部に斜めのヘラケズリ、胴部には縦のヘラケズリが施される。2は壺の胴部下半から底部にかけての破片である。外面に粗いヘラミガキが加わる。1・2とも古墳時代後期の土器と考えられる。



第47図 第12号住居跡



第48図 第12号住居跡出土遺物

第14表 第12号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ12	土師器	壺	20	21.8			白色結晶岩・片岩	普通	にじい橙	No.10・12・13
2	SJ12	土師器	壺	20		7.2		白色結晶岩・片岩	普通	にじい橙	

## (2) 井戸跡

井戸跡は2基検出された。何れも第3区中央部に位置し、前記した古墳時代前期の遺物集中区と重複する。基本的に旧河川による氾濫原と考えられる地域で、他の遺構は検出されていない。何れも遺物の出土はなく、所属時期は不明である。

### 第1号井戸跡 (第49図)

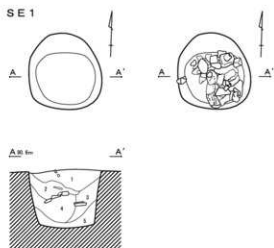
O・P-14グリッド北端で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、1.20m×1.15mと僅かに南北

方向が長い。円筒状の掘り込みで、検出面からの深さは93cmである。

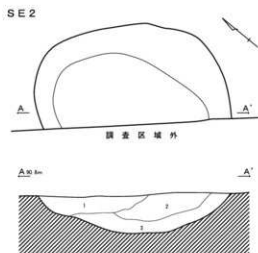
覆土は、暗褐色土と黒褐色土の自然堆積状況を示すが、中位層（2層付近）から多量の礫が出土した。10~20cmほどの扁平な片岩がほとんどで、廃棄されたものと思われる。

### 第2号井戸跡 (第49図)

P-13・14グリッドに位置し、南西部分は調査区域外となる。不整形円形を呈するもので、現状で



- SE 1
- 1 暗褐色土 暗褐色土と4号褐色土の混土層 小礫(1cm以下)多量 礫(5cm以下)・ロームブロック部あり
  - 2 暗褐色土 小礫(1cm以下)・黒褐色土多量
  - 3 黒褐色土 褐色粒子多量 小礫(1cm以下)少量
  - 4 黒褐色土 3層に近似 小礫をほとんど含まない
  - 5 黒褐色土 小礫(1cm以下)少量 粘性強い



- SE 2
- 1 黒褐色土 黒色ブロック(1~5cm)・暗褐色土多量
  - 2 暗褐色土 小礫(1cm以下)少量 粘土粒子微量
  - 3 黒褐色土 2層に近似 色調が暗く粘性強い



第49図 井戸跡

直径3.05mと大型で、深さは60cmほど。底部は旧河道の砂礫層に掘り込まれている。

### (3) 土壌

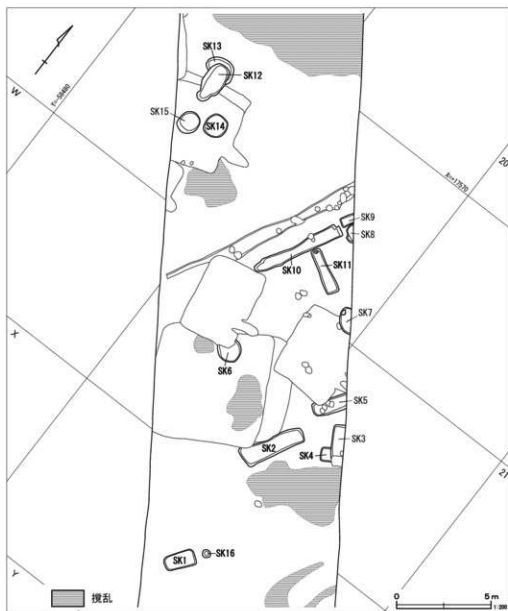
土壌は、第2区で16基が検出された。形状は、およそ長方形のものと不整形のものに分けられるが、大きさは様々で、遺物の出土によって時期が特定できるのは第14・16号土壌のみであった。

第1～5号土壌は、ほぼ長方形の平面形を呈するもので、集落域の南側で検出された。何れも幅0.8m前後と思われるが、深さは5～15cmと非常

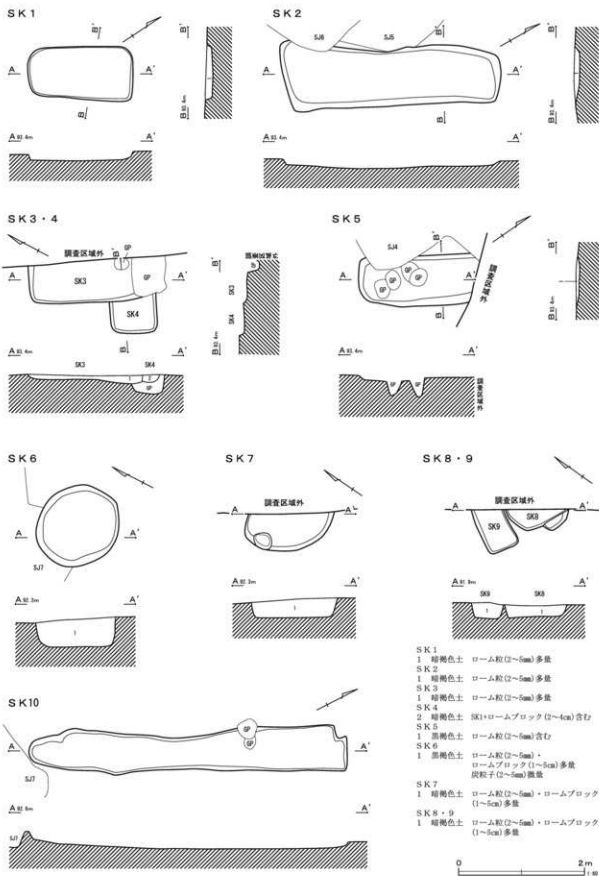
に浅い。なお、第3・4号土壌からは鉄製品が出土している(第53図8)。幅約1cm、厚さ0.3cmほどの棒状品であるが、所属遺構は不明である。

第8～12号土壌も長方形を呈するもので、第4号住居跡と第5号溝跡の間でまともって検出された。そのうち第12号土壌は掘り込みも深く、第9号住居跡を切って構築される。なお、第10号土壌としたものは、その形状から溝の底部が残したものと考えられる。

第6・7・13～15号土壌は、不整形もしくは楕円形を呈するもので、前述した長方形のものに



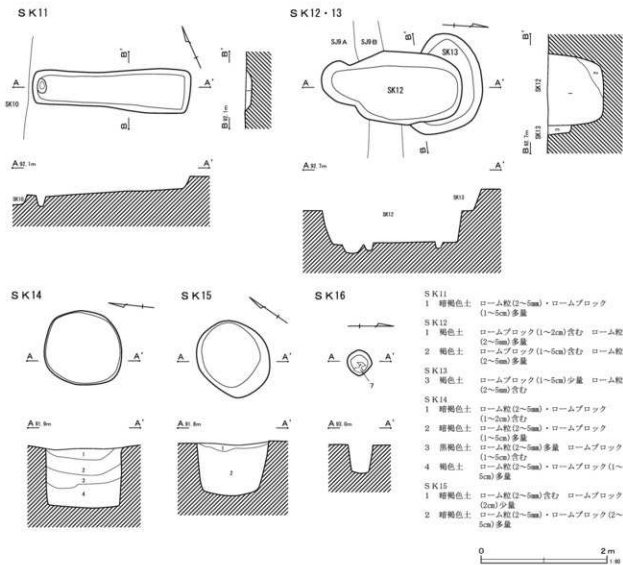
第50図 土壌分布図



- SK 1  
1 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)多量
- SK 2  
1 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)多量
- SK 3  
1 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)多量
- SK 4  
2 暗褐色土 SK1+ロームブロック(2~4cm)含む
- SK 5  
1 黒褐色土 ローム粒(2~5mm)含む
- SK 6  
1 黒褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~5cm)多量  
炭粒子(2~5mm)微量
- SK 7  
1 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~5cm)多量
- SK 8・9  
1 暗褐色土 ローム粒(2~5mm)・ロームブロック(1~5cm)多量

第51図 土壌 (1)





第52図 土壌 (2)

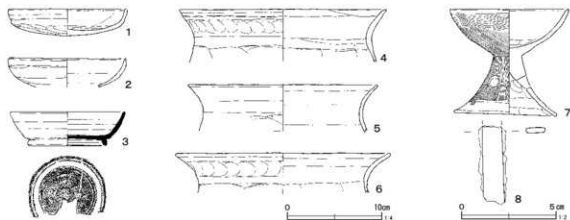
比べて掘り込みも深い。第6号土壌は第5・6・7号住居跡と、第7号土壌は第4号住居跡と重複するが、何れも土壌の方が新しい。

第14・15号土壌は、何れも深さ80cm以上あるので、第9号住居跡を切っている。第14号住居跡からは、遺物がまぎらまぎら出土している(第53図1~6)。1・2は土師器の坏である。3は須恵器の高台付坑である。4~6は土師器の甕である。1は皿形、2は椀形の坏である。3は底部周辺回転ヘラケズリの後、台形の高台を貼り付ける。白色針状物質(海綿骨針)を含むことから南比企窯の製品と考えられる。4~6は器壁のとても薄い甕で口縁部は緩く外反する。肩部が横方向にヘラ

ケズリされる。第14号土壌の土器は、8世紀中葉とした第9号住居跡の出土土器群と共通し、同時期の土器と考えられる。

第16号土壌は、第2区南端のX-20グリッドで検出された。他の土壌とは異なり、直径約40cm、深さ45cmとむしろ柱穴状である。底部付近からはほぼ完形の高杯が1点出土している。

7は土師器の高杯である。口縁部の外面にはハケメが施され、短く開く脚部には三方に円孔があげられる。脚部にはヘラミガキが残る。脚部は指ナデのままである。内面にはナデの痕跡が残る。古墳時代前期に比定されるもので、出土状況から埋納されたものと考えられる。



第53図 土壌出土遺物

第15表 土壌出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	構成	色調	備考
1	SK14	土師器	坏	60	13.0		2.8	白色結晶岩・片岩	普通	橙	ローム台地
2	SK14	土師器	坏	10	12.4		3.3	角閃石	良好	暗褐	ローム台地
3	SK14	須恵器	高台付埴	30	12.2	8.0	3.6	片岩・白色針状物質	良好	暗灰黄	南比企
4	SK14	土師器	壺	10	21.9				良好	にぶい橙	ローム台地
5	SK14	土師器	壺	5	20.1			角閃石	良好	橙	ローム台地
6	SK14	土師器	壺	5	28.0				良好	明赤褐	ローム台地
7	SK16	土師器	高坏	90	12.5	10.9	11.3	白色結晶岩・片岩	普通	橙	
8	SK3・4	鉄製品	棒状品		長さ4.1cm	幅1.05cm	厚さ0.3cm	重さ4.6g			

#### (4) 溝跡

溝跡は5条検出された。そのうち第1～4号溝跡は東西方向に流れる溝で、第1区 AA-21・22・23グリッドでまとまって検出され、第5号溝跡は第2区中央部で検出された。何れも遺物の出土はなく、所属時期は不明である。

##### 第1・2号溝跡 (第54図)

調査区を東西に横切るように、長さ10mほどに亘って検出された。幅は約50cm、深さ30cmほどで西側で第2号溝跡と重複する。第2号溝跡は、幅約32cm、深さ20cmほどで第1号溝跡よりは小ぶりである。両者の関係が2条の重複なのか、同一溝の分岐なのかは確認できなかった。但し、重複とすれば第1号溝跡の方が新しいことになる。流れの方向は不明だが、地形的には東から西に流れたものと推察される。また、土層断面で1層とした部分は、鉄分を多く含む堅く締まった層で道の跡と判断される。溝がほぼ埋まりかけた状態で、そ

の上が通路として利用されたことによって形成された層であろう。なお、西側では溝が錯綜しているため、明瞭には検出できなかった。

##### 第3号溝跡 (第54図)

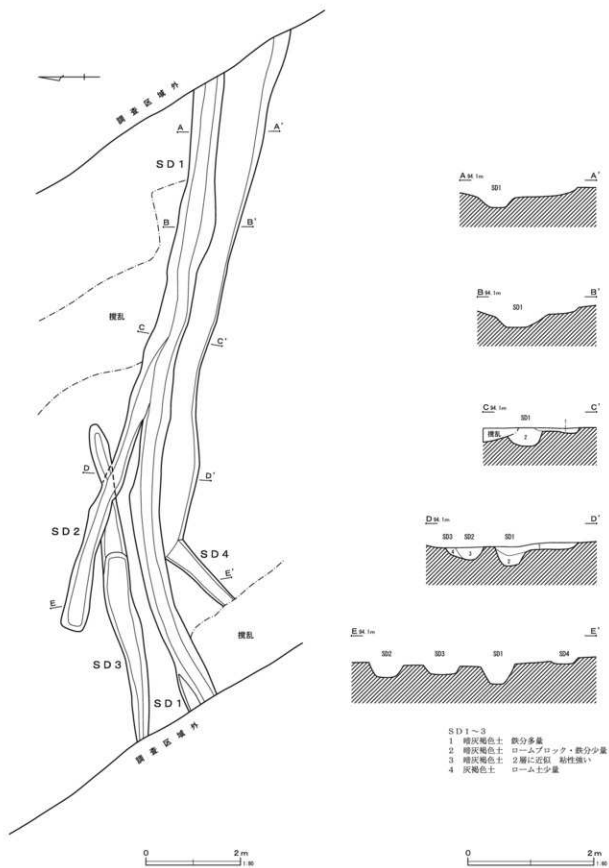
調査区西端で第2号溝跡と交差するように5mほど検出された。幅約40cm、深さ15cmほどで、第2号溝跡に切られている。

##### 第4号溝跡 (第54図)

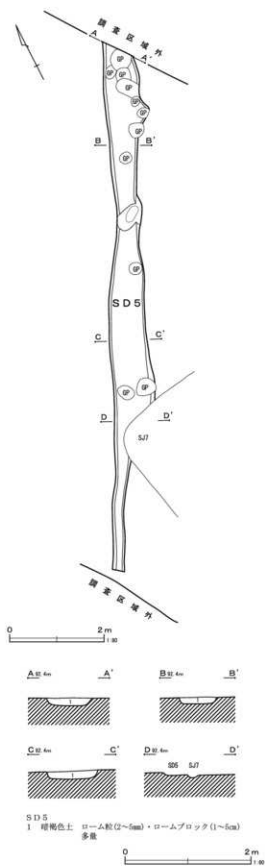
第1号溝跡の南で1.3mほど検出されたが、深さも10cm程度で明瞭ではない。

##### 第5号溝跡 (第55図)

V・W-18・19グリッドに位置する。第2区中央部を横切るように北東-南西にはしる。深さ10cmほどの浅い溝跡で第7号住居跡を切って構築されている。流路の方向は明瞭でないが、地形的には南西から北東方向に流れたものと思われる。



第54図 溝跡 (1)

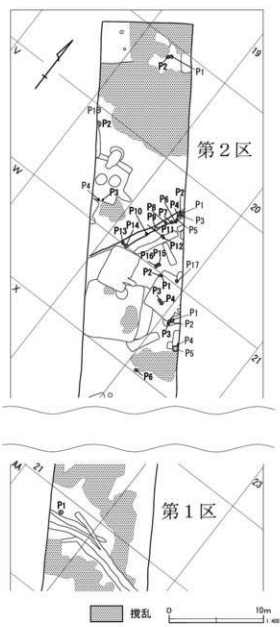


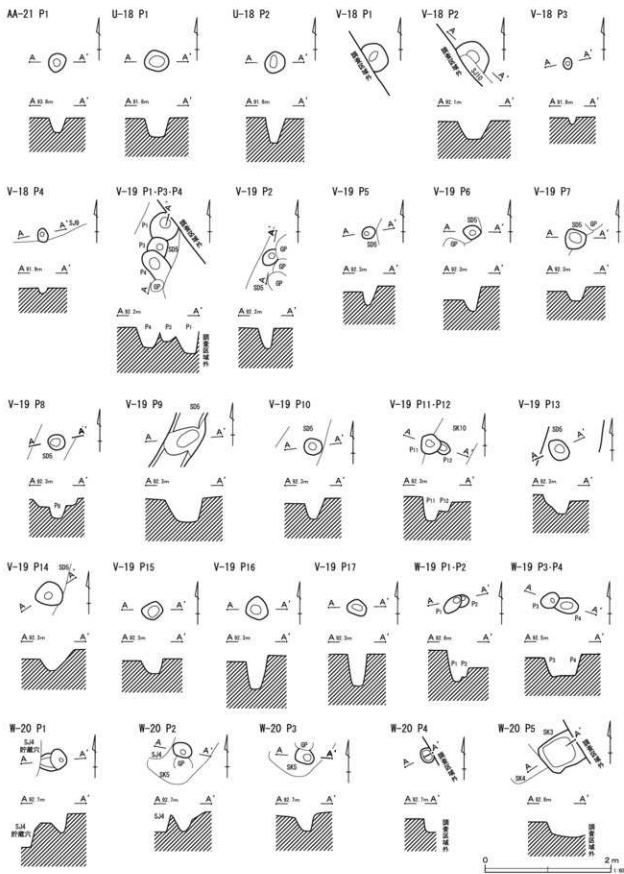
### (5) ビット

ビット (グリッドビット) は、第2区を中心に33基が検出された。直径30cm以下で不整形形のプランを呈するものが多いが、何らかの施設を想定できるような配列は確認できなかった。

また、何れも遺物の出土はなく、所属時期・性格を特定できなかった。

グリッドごとに番号を付し、計測値を一覧表で示した。





第57図 ピット

第16表 ビット計測表

グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
AA-21	P 1	30.0	25.0	23.0	V-19	P 5	23.0	23.0	30.0	V-19	P 16	36.0	31.0	53.0
U-18	P 1	39.0	33.0	30.0	V-19	P 6	29.0	22.0	49.0	V-19	P 17	30.0	23.0	50.0
U-18	P 2	34.0	31.0	39.0	V-19	P 7	43.0	42.0	22.0	W-19	P 1	34.0	20.0	50.0
V-18	P 1	46.0	(32.0)	—	V-19	P 8	26.0	23.0	30.0	W-19	P 2	19.0	(11.0)	42.0
V-18	P 2	55.0	(25.0)	28.0	V-19	P 9	66.0	36.0	35.0	W-19	P 3	29.0	22.0	35.0
V-18	P 3	17.0	13.0	11.0	V-19	P 10	28.0	26.0	33.0	W-19	P 4	(34.0)	25.0	33.0
V-18	P 4	22.0	20.0	9.0	V-19	P 11	32.0	30.0	36.0	W-20	P 1	(42.0)	28.0	30.0
V-19	P 1	(44.0)	41.0	49.0	V-19	P 12	(17.0)	17.0	21.0	W-20	P 2	30.0	(21.0)	30.0
V-19	P 2	(24.0)	21.0	32.0	V-19	P 13	37.0	28.0	30.0	W-20	P 3	29.0	21.0	29.0
V-19	P 3	(23.0)	31.0	20.0	V-19	P 14	41.0	31.0	33.0	W-20	P 4	24.0	(19.0)	22.0
V-19	P 4	(51.0)	32.0	41.0	V-19	P 15	30.0	25.0	23.0	W-20	P 5	(55.0)	52.0	25.0

#### 4. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物を一括する。野中遺跡では、縄文時代から平安時代までの遺物が出土しているが、縄文時代及び弥生時代の遺構は検出されなかった。従って、遺構から出土したのもでも同時代に属するものは本項に一括した。

##### 縄文・弥生時代の土器 (第58図)

###### 第I群 (第58図1)

縄文時代早期に属するものである。1は燃糸文土器の胴部破片で、Lの原体による燃糸文が縦位に施される。

###### 第II群 (第58図2～6・10)

縄文時代前期に属するものを一括する。

2は胎土に繊維を含み、赤褐色粒子の混入が目立つ。原体は単節 RL と r の捻紐を用いた附加条である。3は繊維を含まず、胎土も緻密。裏面は、横方向に丁寧に磨かれる。縄文は単節 RL が施される。4は薄手の土器で胎土に細砂を含み、全面に RL の単節縄文が施される。5・6は同一個体と思われ、胎土に1mm前後の砂粒が目立つ。0段多条の単節 RL と LR を結束した原体を用いて羽状縄文が施される。10は、半截竹管状工具による平行沈線と曲線的なモチーフが描かれる。2・3は黒浜式、4は諸磯式、5・6・10は前期末葉に比定されよう。

###### 第III群 (第58図7～9・11～31)

縄文時代中期に属するものを一括する。

7はキャリバー形土器の口縁部で、受け口上の

口唇及び口唇下を横走る隆帯上に細かい刻目が施される。8は弧状の平行沈線が引かれ、地文は細かい RL の単節縄文。7・8は五領ヶ台式である。

9は口縁部である。口唇下の低い隆帯上に縦の刻み目が施されるもので、阿玉台式と思われる。

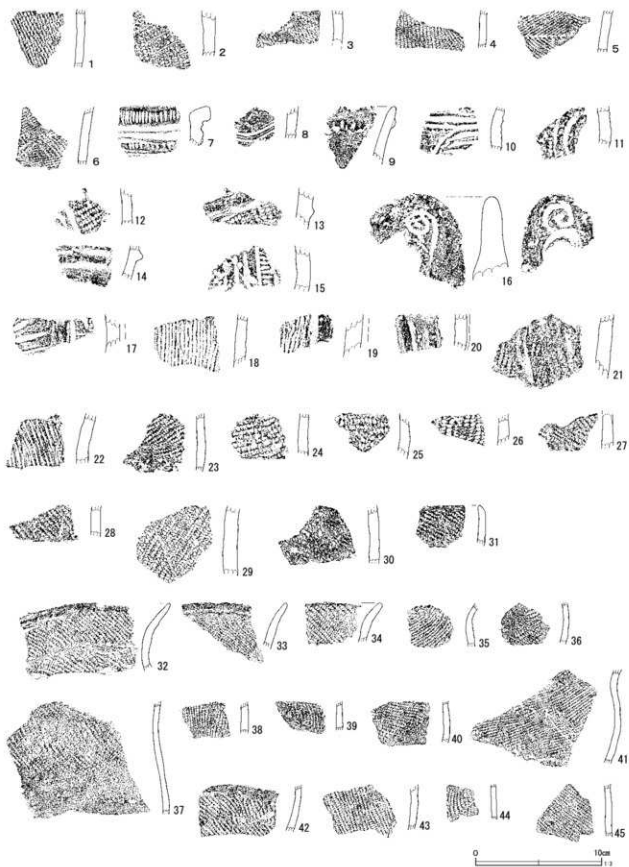
10～31は加曽利 E 式段階に比定されよう。

11～14は胴部破片で、沈線もしくは隆帯による渦巻文が施されるものである。15・17は地文に短沈線が施される。15は3本沈線、17は隆帯による懸垂文が垂下する。16は把手である。表裏両面に沈線による渦巻状のモチーフが施される。18は条線文が全面に施される。19・20は隆帯による懸垂文が垂下する胴部破片で、19の地文はLの燃糸文である。21は2本の沈線が垂下する胴部下半で、地文には RL の単節縄文が縦位に施され、沈線間は磨り消されるようである。22～30は地文のみが施される胴部破片である。22がLの燃糸文、23・24・28・29がLRの単節縄文、25～27・30がRLの単節縄文である。

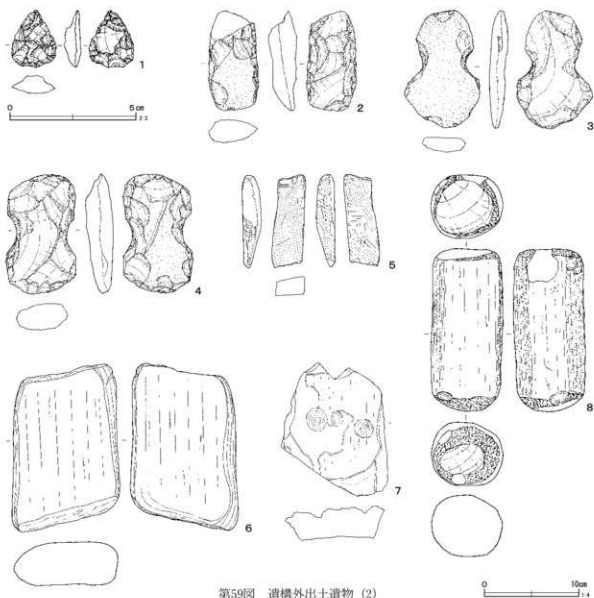
31は口縁部破片である。薄手の土器で、外削ぎ状の口唇は僅かに内湾する。0段多条 RL の単節縄文が全面に施される。あるいは後期に属するものかもしれない。

###### 第IV群 (第58図32～45)

弥生時代後期の土器を一括する。いわゆる吉ヶ谷式土器で、多くが第1号住居跡の覆土から出土している。32～34は口縁部である。何れも0段多



第58图 道槽外出土遺物 (1)



第59図 遺構外出土遺物 (2)

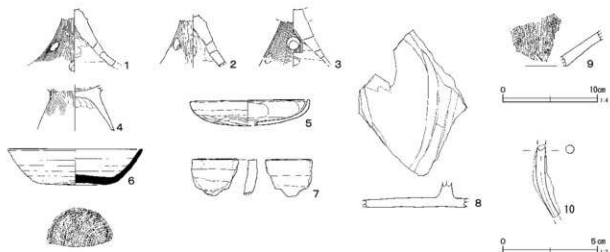
第17表 遺構外出土遺物観察表

番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	SJ8	石鏃	チャート	2.3	1.8	0.7	2.4	
2	Q-15	打製石斧	ホルンフェルス	10.6	5.3	3.0	183.9	
3	SJ1	打製石斧	ホルンフェルス	12.6	8.0	1.9	192.0	
4	SJ7	打製石斧	砂岩	12.7	7.5	3.0	310.7	
5	SJ1	砥石	凝灰岩	9.8	3.8	2.0	85.1	
6	O-14	砥石		17.7	11.5	5.0	1707.4	
7	Q-15	石皿	結晶片岩	14.1	11.3	4.3	887.6	
8	SE1	砥石	結晶片岩	17.3	7.7	6.8	1576.2	

条の RL 単節縄文が施される。35・41は頸部付近の破片で、屈曲部は横方向に縄文がナゲ消されている。地文は細かい LR の単節縄文で、同一個体の可能性がある。37は同じく頸部下位の胴部破片

であるが、風化著しく施文は明瞭でない。地文は RL の単節縄文と思われる。36・38～40・42～45は胴部破片で、全て0段多条の地文が施される。43・44が単節 LR、他は単節 RL である。





第60図 遺構外出土遺物 (3)

第18表 遺構外出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SE1	土師器	高坏	5				白色結晶岩・片岩	普通	橙	
2	SE1	土師器	高坏	5				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
3		土師器	高坏	10				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	
4		土師器	台付壺	10				白色結晶岩・片岩	普通	にぶい橙	No.150
5		土師器	内湾口縁坏	50	12.7		2.8	白色結晶岩・片岩	普通	橙	ローム台地
6	N-11・12	須恵器	坏	30	14.3	6.0	3.8	白色結晶岩・片岩・白色針状物質	普通	灰	南比企
7	SD6	近世土器	焙烙	5					普通	黒褐	
8	O-13	近世土器	仕切盤	10				白色結晶岩	普通	灰オリーブ	
9	O-13	中世陶器	撞鉢	5				白色結晶岩・片岩	良好	にぶい橙	
10	O-14	鉄製品	棒状品		長さ [3.9]cm	幅0.45cm	厚さ0.5cm	重さ2.6g			

### 縄文時代の石器 (第59図)

1は緑灰色のチャート製石鏃で完形である。  
 2～4は打製石斧である。2は刃部を欠損する。  
 3・4は両側縁に抉りもつ、いわゆる分銅形で刃部は丸刃である。5・6は砥石である。5は全面に使用痕が認められる。7は石皿の破片である。8は円柱状の緑泥片岩で、上下の円周に敲打痕が認められる。敲石であろう。

### 古墳時代以降の遺物 (第60図)

1～4は古墳時代前期の遺物である。1～3は高坏の脚部である。1・3は二段三方に円孔が穿たれる。4は台付壺の脚部である。

5・6は平安時代の土器である。5は土師器の

内湾口縁坏である。扁平な坏でナデの痕跡がよく残る。ローム台地の粘土を用いる。6は須恵器の坏である。糸切り後底部周辺にヘラケズリを施す。白色針状物質(海綿骨針)を含むことから南比企窯の製品と考えられる。

7～9は江戸時代の遺物である。7は焙烙の口縁部破片である。8は仕切り盤の一部である。仕切り盤は円形または楕円形のたらい状の土製品である。瓦質で焙烙と製作技術等は共通する。仕切り盤は底部内面に蛇行する粘土板を添付して一部を仕切り、一方に水をためて海とし、一方に土や砂を盛り陸としてミニチュアや植物を置いて景色を楽しんだ。9は撞鉢の破片である。

## IV 瘦ヶ谷戸遺跡の調査

### 1. 遺跡の概要

瘦ヶ谷戸遺跡は、児玉郡美里町の南東部に位置する大字猪俣に所在し、JR 八高線用土駅の西約1.5km、あるいは同じく松久駅から南へ約2kmを測る。地形的には、南西の上武山地から延びる松久丘陵と北東を東流する利根川との間に広がる低位台地（北武蔵台地）上に立地する遺跡であるが、むしろ南西の丘陵端部に近く、標高も89m前後と高い。遺跡に沿って南側を北西に流れる猪俣川は、調査区のすぐ北で天神川と合流する。合流地点付近では、古くから「こぶ石」と呼ばれる大岩を中心とした祭祀が行われてきており、しばしば氾濫を繰り返す両河川と折り合いながら共存してきた遺跡であることがわかる。

発掘調査は、一般国道254号猪俣バイパスの建設に伴うもので、野中遺跡の調査開始から1ヶ月遅れ、平成22年1月4日から3ヶ月間実施した。猪俣川の流れに沿った調査区は、野中遺跡の北西に隣接し、幅約11mで南東―北西に細長く、面積は1,291m<sup>2</sup>である。

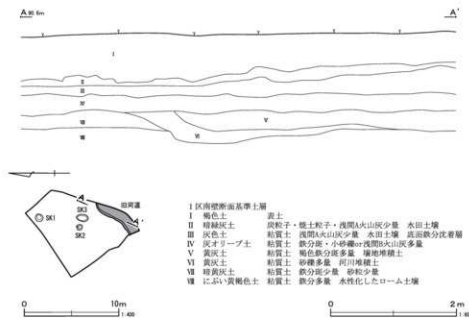
発掘調査にあたっては、便宜上南東側から2区に分割して行ったが（第62図）、調査区の両端で4.5mの比高差のあった野中遺跡に比べ、比高差はほとんどなく、むしろ南半の氾濫原と北側の台地部分に分かれるようである。発見された遺構は土壇7基、溝跡13条、ピット58基である。

第1区は野中遺跡第4区から続く氾濫原に属するが、小型の土壇3基が検出された。遺物は出土しなかったが、覆土の観察から縄文時代中期に属するものと思われる。

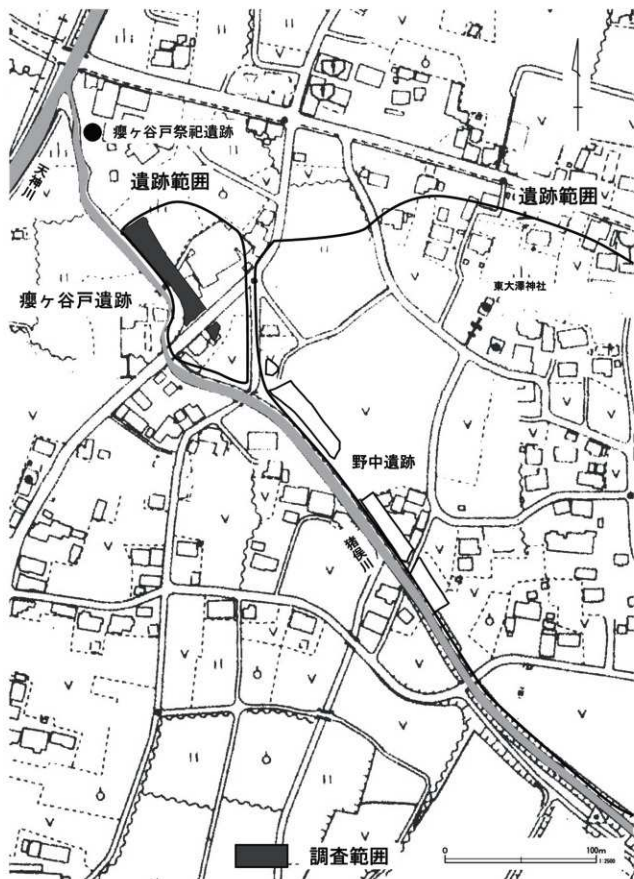
第2区の南東半は第1区から続く氾濫原で、土壇1基、溝跡1条のみが検出された。再堆積ローム土中からは、縄文時代の遺物が出土している。また、北側の台地部では土壇3基、溝跡12条、ピット58基が発見された。

出土した遺物は、縄文時代から近世までであるが、量的には圧倒的に縄文土器が多い。土壇のほとんどは縄文時代、溝跡は中・近世に属するものである。なお、基本土層として第1区南壁の断面を示した（第61図）。河川による堆積層が主体を占め、しばしば流れを変える河川によって浸食・堆積が繰り返されてきた地域であることがわかる。また、II・III層には浅間火山灰が認められ、近世の形成層とわかる。

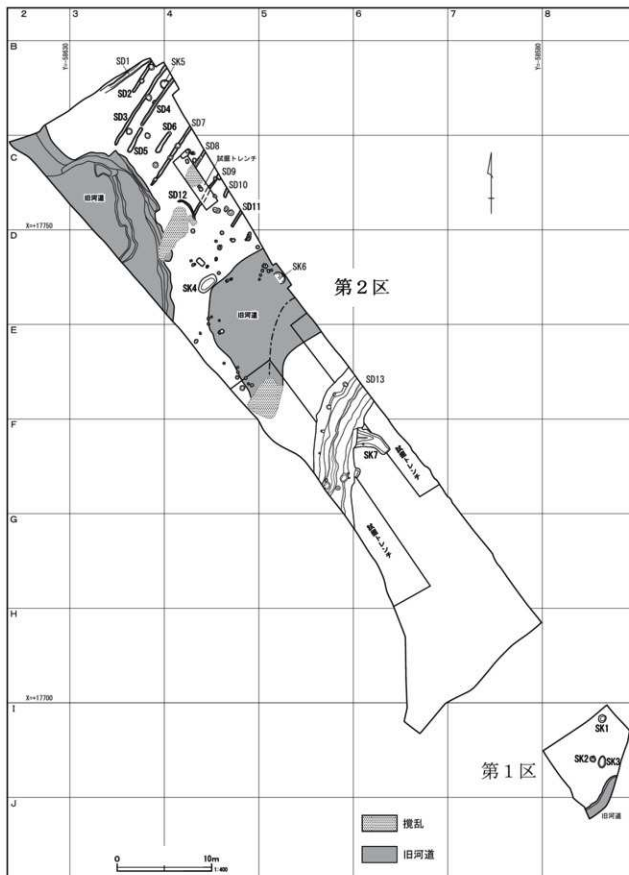
なお、第2区の土層については別記する（第85～87図）。



第61図 瘦ヶ谷戸遺跡基本層序図



第62図 瘦ヶ谷戸遺跡調査範囲



第63図 狭ヶ谷戸遺跡調査区全測図

## 2. 遺構と遺物

### (1) 土壌

土壌は、第1区から第2区北端までで7基検出されている。

第1区及び第2区の中央から南東側は、野中遺跡の第4区から続く旧河川の氾濫原と思われるが、この区域では第1区で3基、第2区で1基の土壌が発見された。

また、第2区の中央から北西側は、旧河川の浸食をうけながらも台地部分が残されており、3基の土壌が検出された。

#### 第1～3号土壌 (第64図)

第1区I-8グリッドに位置する。第1・2号は、それぞれ0.85m×0.78m、0.63m×0.61mの不整形を呈する。また第3号土壌は、1.25m×0.73mの楕円形を呈し、長軸方向はN-9°-Eである。深さ約10cmと浅い。何れも出土遺物はなかったが、周囲から縄文中期の土器片が出土しており、遺構も同時期のものと思われる。

#### 第4号土壌 (第64図)

第2区D-4グリッド中央で検出された。2.30m×1.25mの楕円形を呈し、長軸方向はN-51°-Eである。深さは42cmと深く、覆土は明瞭な黒褐色土である。出土遺物はなかった。

#### 第5号土壌 (第64・65図1・2)

第2区B-3・4グリッドに位置する。第2区北端で検出され、第4号溝跡に切られる。直径0.9m程で円形のプランを呈すると思われる。

遺物は、縄文時代後期初頭の土器片が2点出土している。

#### 第6号土壌 (第64・65図3～20・29～32)

第2区D-5グリッドに位置する。調査区北東縁で検出されたが、南西側の半分ほどは旧河川に

よって破壊されている。長径は1.3mで方位はN-66°-W。楕円形のプランを呈するものと思われる。覆土は黒褐色土を主体として2層に分層されるが、1層下部に焼土が確認された。また遺物は多量で、その多くが1層から出土している。

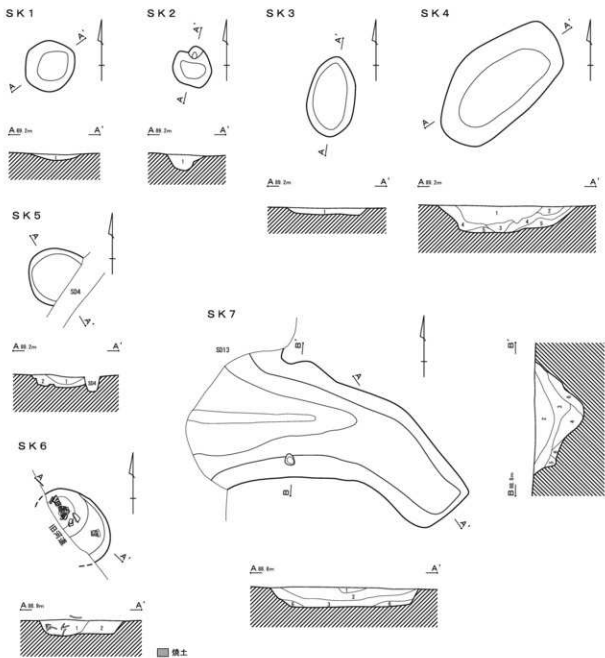
3・4は口唇下に凹線が横走る。3の地文は0段多条の単節RLである。5～6・8～10は隆帯及び凹線によって曲線的なモチーフが描かれるものである。5の縄文は単節LR。7は無文の口縁部で、12は同様の土器の頸部破片であろう。13・14は地文に短沈線が用いられる。11・15～18は胴部破片で、垂下する沈線間は磨り消される。地文は全てRLの単節縄文。31は大型土器の口縁部破片で、橋状把手を有する。地文は0段多条の単節LRである。32は唯一復元できたもので、大型土器の胴上半部である。上部に沈線が1条横走り、以下2本単位で垂下する沈線間は磨り消される。地文は単節縄文LRの縦線施文。29は小片であるが敲石であろう。30は頁岩製の打製石斧で、両側に弱い抉りが認められる。長さ20.0cm、幅5.7cm、厚さ2.2cm、重さ153.2g。なお19は薄手硬質の土器で、縄文後期のものと思われる。

以上、本土壌は出土土器より、縄文時代中期加曾利EⅢ式期の所産と考えられる。

#### 第7号土壌 (第64図・第65図21～28)

F-6グリッドに位置する。第2区南寄りに検出され、第13号溝跡に切られる。幅は1.2m～2.0m、深さも一定でなく性格は不明である。

遺物は21が縄文時代前期、他は中期加曾利E式期に属するものである。21は繊維を含む土器で、黒浜式であろう。Rの無節縄文が施される。22～24は口縁部破片で、22・23は口唇下に沈線が巡り、24は波状口縁の波頂部である。25・26は隆帯による懸垂文が垂下する。28は結晶片岩製の砥



SK 1

1 赤黄褐色土 暗褐色土主体 炭化物・焼土含む

SK 2

1 樽ノリブ土 粘質土主体 小砂礫・水性化したロームブロック含む  
炭粒子多量 炭水堆積

SK 3

1 赤黄褐色土 暗褐色土主体 炭化物・焼土含む

SK 4

1 黒色土 炭粒子・焼土粒子・白色微粒子少量  
2 黒褐色土 ローム小ブロック・灰褐色粘土ブロック少量  
3 黒褐色土 ローム少量 黒褐色土ブロック多量  
4 褐色土 黒褐色土・灰褐色粘土ブロックの混土  
5 にぶい黄褐色土 ロームブロック多量

SK 5

1 にぶい黄褐色土 炭粒子少量 土層フラク  
2 にぶい黄褐色土 ローム粒多量 土層フラク

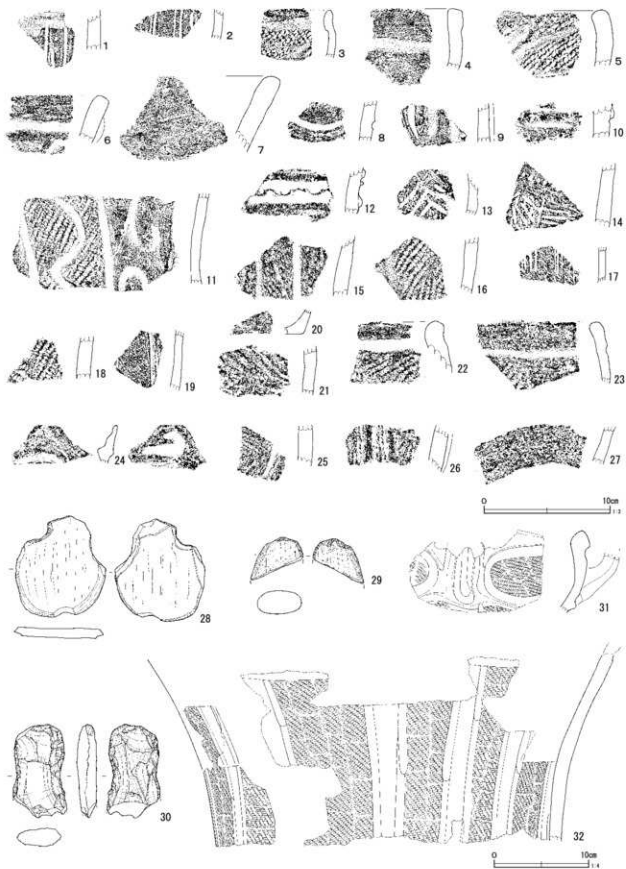
SK 6

1 黒褐色土 炭粒子・焼土粒子少量 底面に焼土の幣状堆積  
但しそれほど被熱は受けていない  
2 黒褐色土 ローム粒・炭粒子少量 白色粒子多量

SK 7

1 にぶい黄褐色土 粘質土 鉄分含有あり  
2 褐色土 粘質土 炭鉄分低層層  
3 褐色土 粘質土 暗灰色粘土多量  
4 褐色土 粘質土 炭化物・小砂礫含む  
5 褐色土 ややしまりに欠ける 杭状の痕跡  
6 黄褐色土 ロームブロック多量

第64図 土壇



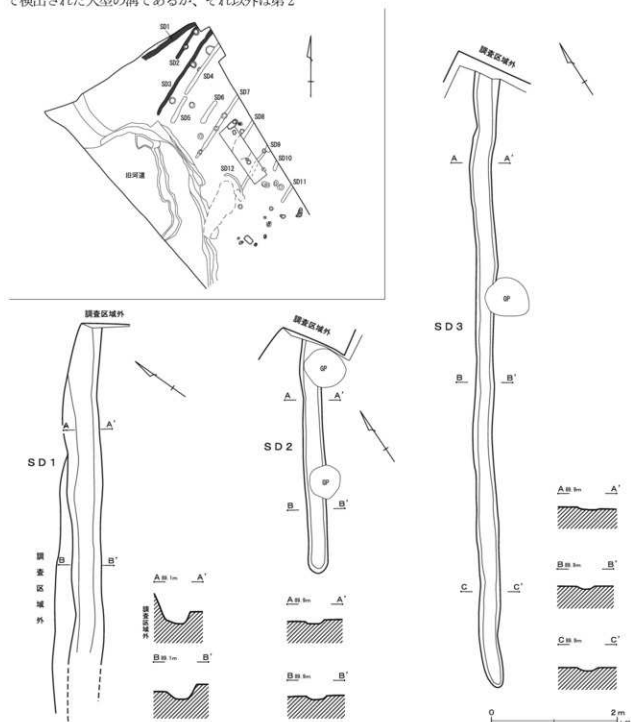
第65図 土壌出土遺物

石と思われるが、左上部に意図的な盛りか認められる。

## (2) 溝跡

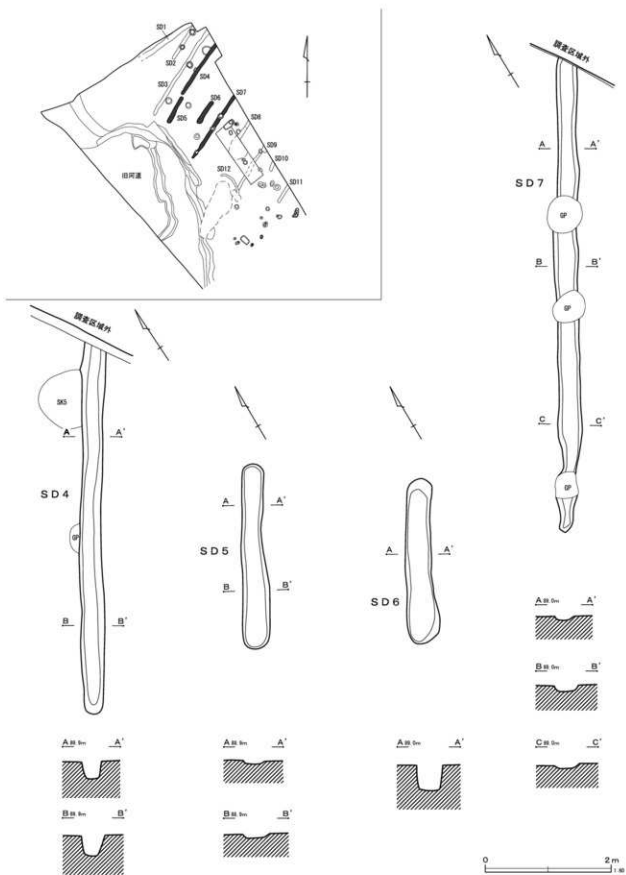
溝跡は、第2区中央から北側で13条検出された。そのうち第13号溝跡は、第2区中央南寄りに単独で検出された大型の溝であるが、それ以外は第2

区北側の台地部分で検出され、何れも幅が細く浅いものがほとんどで、流れの方向も南西-北東方向に並行している。出土遺物は少なく、それぞれの所属時期を決定するには心許ないが、第13号溝跡を平安期、それ以外の細く浅い溝跡を近世以降の所産と考えたい。



第66図 溝跡 (1)





第67図 溝跡 (2)

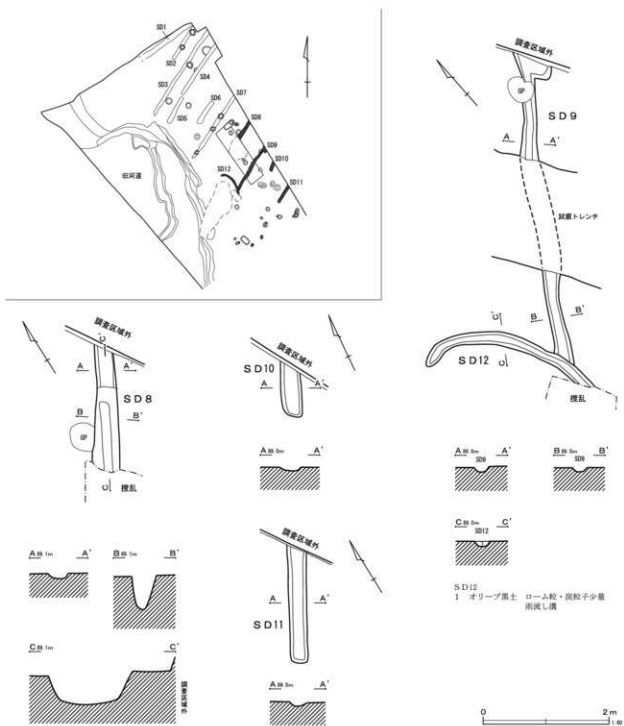
### 第1号溝跡 (第66図)

B-3グリッドに位置する。第2区最北端で調査区北壁に沿うように検出された。幅約0.5m、深さ約20cmで長さ5.5mほど確認されたが、西側は検出できなかった。第2~11号溝跡とは、規模や方向が違ふことから、時期あるいは性格の異なる

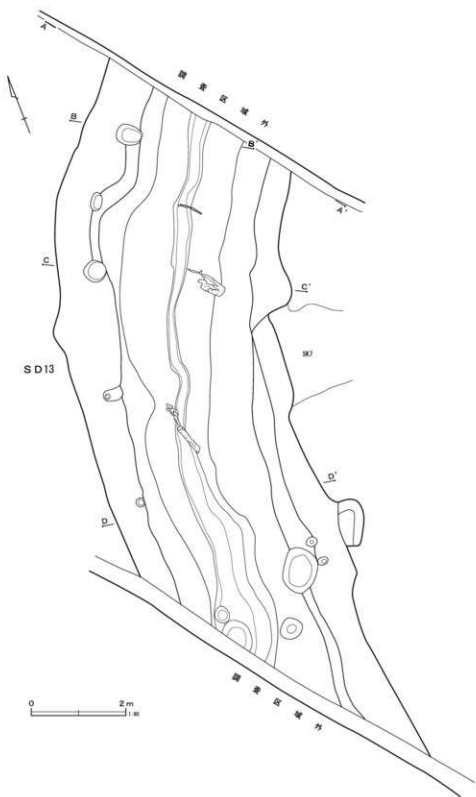
ものと考えられる。

### 第2~11号溝跡 (第66~68図)

B・C-3・4グリッドで10条の溝跡が検出された。何れも幅0.3m~0.4mと規格的で、方向も南西-北東方向に平行する。また、溝間もほぼ1.4



第68図 溝跡 (3)



第69圖 溝跡 (4)

mを単位とするようで、検出されなかったものも含めれば、第2号溝跡と第11号溝跡の約17m間に13条の溝の存在を想定することができる。但し深さは若干異なり、特に第4・6号溝跡が深い。遺物は、鉄製品が2点出土した(第71図1・2)。1は第7号溝跡から出土した。鏝であろう。2は第4号溝跡から出土した火箸である。基部は環状に曲げられ、別の環で結束される。

#### 第12号溝跡 (第68図)

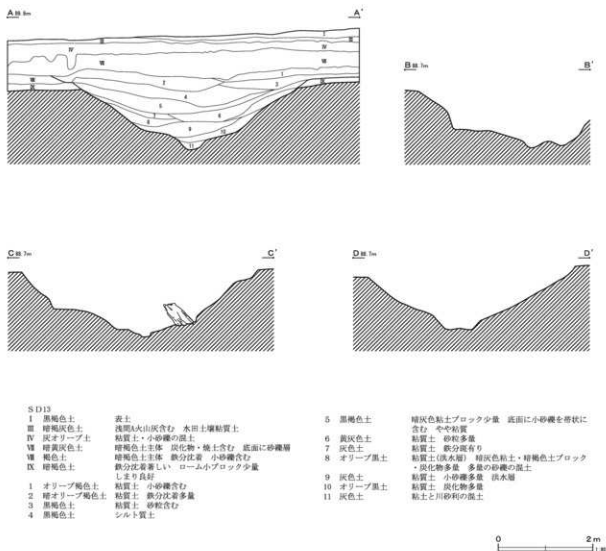
C-4グリッドに位置する。第9号溝跡と交差するように、弧状に検出された。細く浅い溝で、

遺物の出土もないため、時期・性格とも不明である。

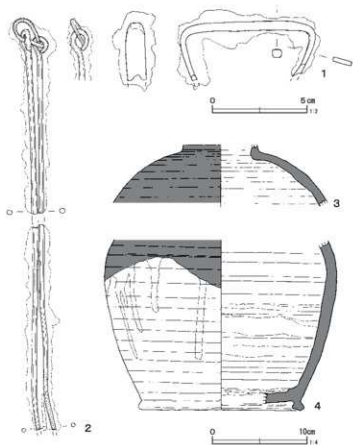
#### 第13号溝跡 (第69図・第71図3・4)

E・F・G-5・6グリッドに位置する。第2区中央南寄りで見出され、第7号土塼を切っている。上幅約4.2m、深さ120cm~155cmと非常に大型で、南から北東へ緩やかな弧を描いて検出された。底面付近から木材が出土している。

出土遺物は少なく、2点を図示した。3・4は灰釉陶器の長頸瓶である。よく似るか接合点はなく、必ずしも同一個体とは限らない。3の肩部に



第70図 溝跡 (5)



第71図 溝跡出土遺物

は、たつぷりと自然釉が掛かる。4の上半部には、ハケ塗りの痕跡が残り、釉垂れも見られる。胴部中位から底部にかけてケズリ込まれる。底部外面にも施釉される。東濃地方、大原2号窯式以降の製品と考えられる。10世紀前半に比定されよう。但し、関連する土器類はない。

なお、出土遺物も少なく、土層の堆積状況も自然なことから、必ずしも人工的な溝ではないかもしれない。

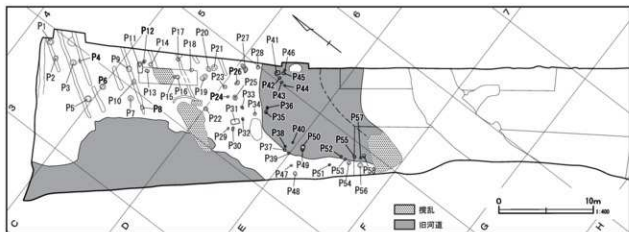
### (3) ビット

ビット（グリッドビット）は、第2区の北側台地部分を中心に58基が検出されたが、住居等の施設を想定できるような配列は確認できなかった。

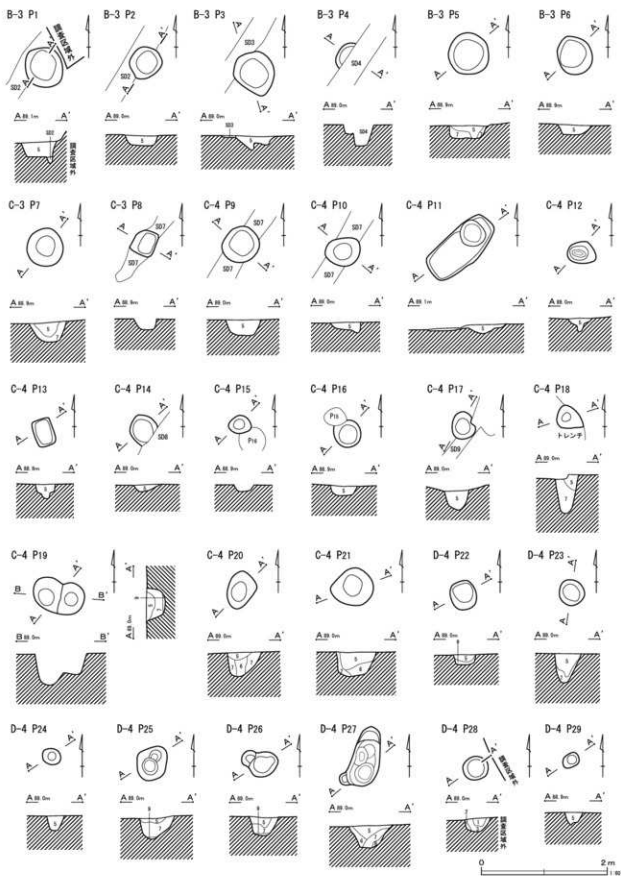
遺物は9基のビットから出土しており、第75図に18点を示した。1は大型土器の無文の口縁部である。2・8には浅い沈線による鋸歯状のモチーフが

第19表 溝跡出土遺物観察表

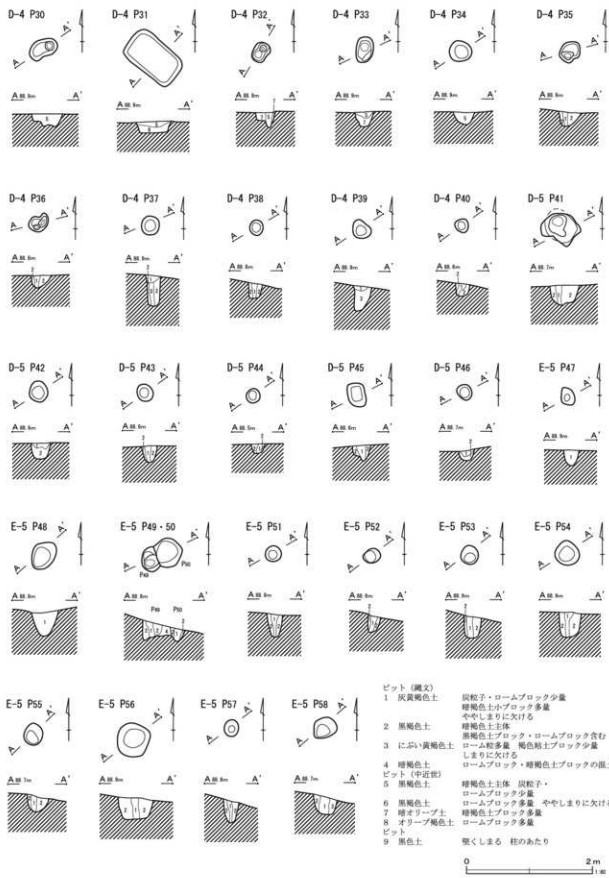
番号	遺構	種別	部種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SD7	鉄製品	用途不明		長さ 7 cm						
2	SD4	鉄製品	火箸		長さ [39.9] cm			径 0.55・0.55 cm			
3	SD13	灰釉陶器	長頸壺	5					良好	灰白	東濃
4	SD13	灰釉陶器	長頸壺	20		17.0			良好	灰白	東濃



第72図 ビット分布図



第73図 ビット (1)

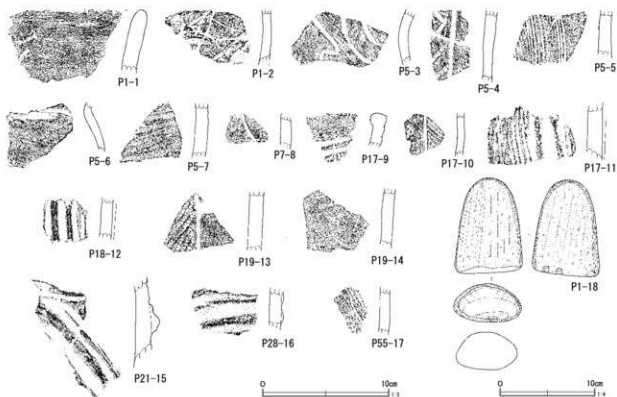


第74図 ビット (2)

第20表 ビット計測表

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	旧番号
P 1	B-3	64.0	58.0	23.0	P53
P 2	B-3	53.0	48.0	16.0	P52
P 3	B-3	64.0	60.0	21.0	P51
P 4	B-3	(46.0)	(16.0)	14.0	
P 5	B-3	65.0	65.0	20.0	P49
P 6	B-3	59.0	54.0	16.0	P50
P 7	C-3	60.0	57.0	31.0	P48
P 8	C-3	41.0	36.0	17.0	
P 9	C-4	59.0	55.0	25.0	P54
P10	C-4	55.0	45.0	16.0	P55
P11	C-4	123.0	57.0	14.0	P45
P12	C-4	45.0	36.0	21.0	P44
P13	C-4	44.0	31.0	21.0	P46
P14	C-4	(39.0)	44.0	9.0	P43
P15	C-4	36.0	30.0	10.0	
P16	C-4	43.0	42.0	15.0	P42
P17	C-4	45.0	(29.0)	31.0	P41
P18	C-4	37.0	36.0	55.0	P40
P19	C-4	83.0	5.0	50.0	P39
P20	C-4	61.0	46.0	38.0	P38
P21	C-4	67.0	60.0	55.0	P37
P22	D-4	46.0	41.0	17.0	P47
P23	D-4	49.0	39.0	46.0	P30
P24	D-4	30.0	25.0	24.0	P29
P25	D-4	58.0	52.0	34.0	P28
P26	D-4	57.0	46.0	28.0	P27
P27	D-4	95.0	42.0	35.0	P26
P28	D-4	40.0	38.0	21.0	P25
P29	D-4	27.0	22.0	20.0	P36

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	旧番号
P30	D-4	47.0	27.0	20.0	
P31	D-4	94.0	54.0	17.0	P34
P32	D-4	31.0	24.0	23.0	P33
P33	D-4	40.0	38.0	23.0	P31
P34	D-4	35.0	34.0	19.0	P32
P35	D-4	34.0	30.0	22.0	P17
P36	D-4	41.0	32.0	19.0	P18
P37	D-4	30.0	29.0	39.0	P12
P38	D-4	24.0	21.0	23.0	P13
P39	D-4	32.0	26.0	48.0	P11
P40	D-4	23.0	22.0	20.0	P14
P41	D-5	54.0	40.0	32.0	P24
P42	D-5	34.0	30.0	25.0	P21
P43	D-5	27.0	24.0	26.0	P20
P44	D-5	23.0	23.0	15.0	P19
P45	D-5	38.0	27.0	25.0	P22
P46	D-5	26.0	21.0	15.0	P23
P47	E-5	30.0	20.0	25.0	P10
P48	E-5	50.0	37.0	38.0	P9
P49	E-5	38.0	(25.0)	31.0	P15
P50	E-5	45.0	(41.0)	20.0	P16
P51	E-5	25.0	25.0	35.0	P8
P52	E-5	25.0	23.0	25.0	P7
P53	E-5	30.0	28.0	34.0	P6
P54	E-5	39.0	38.0	40.0	P5
P55	E-5	34.0	30.0	22.0	P3
P56	E-5	55.0	55.0	34.0	P4
P57	E-5	25.0	23.0	34.0	P2
P58	E-5	36.0	31.0	28.0	P1



第75図 ビット出土遺物



縦位に垂下する。3は沈線による曲線的な文様が描かれる。地文はLRの縄文と思われ、沈線間は磨り消される。4・10・13・14は沈線が垂下する胴部破片で、地文は4が短沈線、10が0段多条のLR、13がRLの単節縄文である。9は口唇内側が張出し、口唇下に2条の沈線が横走する。11・12は貼付隆帯が垂下するもので、12の地文は条線文である。15の弧状の隆帯は、渦巻文を描くものと

#### (4) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物を一括する。本遺跡では、縄文時代から近世までの遺物が出土しているが、そのほとんどは縄文時代に属するものであり、その主体は中期後葉の土器群である。なお、溝跡から出土した縄文時代の遺物は本項で扱う。

##### 縄文土器 (第76図1～第82図263)

###### 第I群 (第76図1)

縄文時代早期の土器が1点確認された。僅かに内湾する口縁で、燃糸文土器と思われる。

###### 第II群 (第76図2～14)

縄文時代前期の土器を一括する。

2・3は花積下層式である。2は口縁部破片で、無節LとRの縄文により羽状構成をとる。明瞭ではないが口唇上にも同様の原体による施文が施されるようである。3は風化著しく施文は不明。両者とも胎土に繊維を含み、2には砂粒が目立つ。

4～11は黒浜式に比定されるものである。何れも胎土に繊維が含まれるが、特に9・10に顕著である。施文は縄文のみで、4・5はRL、6・8・11はLRの単節縄文、7・9は無節R、そして10には無節RとLを用いた羽状縄文が施されている。

12～14は諸磯B式である。12は口縁部破片である。少し肥厚する口唇直下に爪形文が1条巡るもので、地文は細かいLRの単節縄文である。13・14には幅広い爪形文が施される。

思われる。7・14は無文、5・17には条線が施される。18はP1から出土したが、底面周囲に剝離痕が認められることからスタンプ形石器の可能性もあろう。

以上、何れも縄文時代に比定されるが、2・3は称名寺式、9は加曾利B式、6・8・14は後期、他は中期加曾利E式段階であろう。

###### 第III群 (第76図15～第80図206)

縄文時代中期の土器を一括する。

15は短い隆帯が縦位に添付される。胎土に細かい雲母を含むので、阿玉台式と思われる。

16は波状口縁を呈する大型土器の波頂部と思われる。波頂下に円錐状の刺突が施され、その右側は円孔が貫通する。加曾利E I式であろう。

17～19はいわゆる連弧文土器である。17・18は口縁部破片で、口唇直下に2条の円形押捺文が施される。19は頸部付近の破片である。

20～206は加曾利E式土器を一括する。加曾利E II～E IV式段階のものである。

20～28は口縁部に貼付隆帯による文様が施されるものである。20の区画内はRLの単節縄文。24～26は波状口縁の波頂部付近である。28は隆帯下部が大きく張り出しており、橋状の把手が付くものと思われる。区画内には短沈線が充填される。

29～33は口唇下に沈線あるいは凹線が用いられる。30は緩い波状口縁を呈する。地文は31がLの燃糸文、32が単節RLとLRによる羽状縄文、33はRの無節縄文である。

34～44は大型土器の口縁部破片である。34～38は口縁部に隆帯による曲線的な文様帯を有する。39～44は口唇直下に凹線が1条巡るものである。37・43の地文は単節RLと思われる。

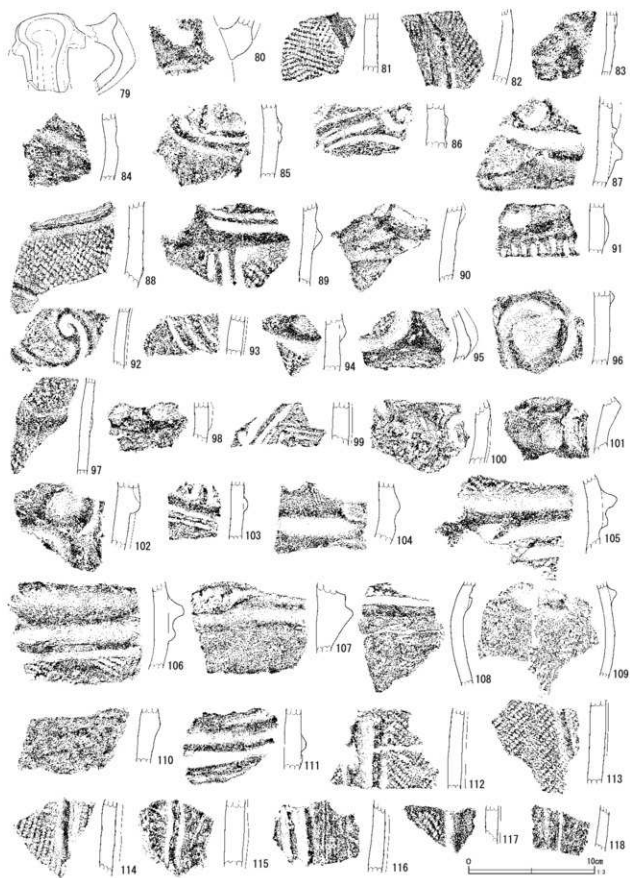
45～57は無文の口縁部破片である。52～57は器壁も厚く、大型の土器である。



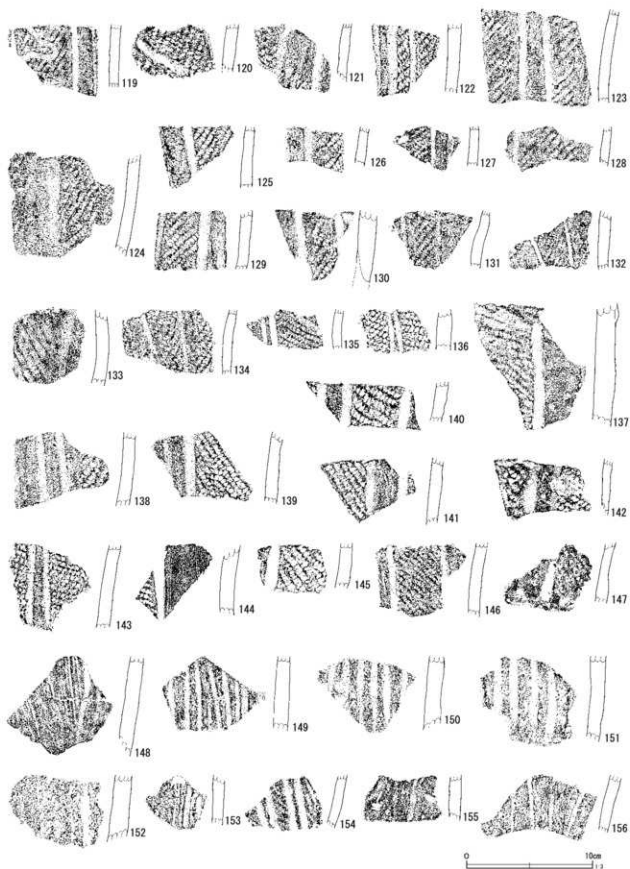
第76図 遺構外出土遺物 (1)



第77图 道橋外出土遺物(2)



第78图 遺構外出土遺物(3)



第79图 遺構外出土遺物(4)

58～67は深鉢の頸部付近の破片である。特に58～63は52～57のような無文口縁の下位に配されるものと思われる。58・59は短沈線、60～63は沈線間に交互刺突が施される。66は楕円状の区画を有し、地文はRLの単節縄文である。

68～72は頸部直下の破片である。68・69は蕨手状、70には蛇行状の沈線が垂下する。地文は全てRLの単節縄文である。

73は内傾する肩部付近と思われる。隆帯直下から、3本沈線による弧状文と懸垂文が施される。

74は薄手の土器で、渦巻状の凹線間には棒状工具による刺突文が連続する。

75～78は加曾利EIV式の浅鉢と思われる。78の胴部には沈線が鋸歯状に施されている。

79・80は口縁部に配される橋状の把手である。

81・82は浅い凹線による曲線的なモチーフが描かれるもので、加曾利EIV式と思われる。82はRL単節縄文、81は単節RLとLRの原体によって羽状に施文される。

83～111は胴部に渦巻状文を配するものを一括する。83・84は凹線、85～111は貼付隆帯を用いるもので、105～107は大型の深鉢である。地文は88・100・106がRL、97がLRの単節縄文、99は短沈線が施される。

112～118は胴下半部の破片で、隆帯による懸垂文が施されるものである。

119～156は胴下半部で沈線による懸垂文が垂下するものを一括する。地文は119～147が単節縄文の縦位施文、148は条線文のようである。149～156には垂下する沈線のみが認められる。

157～169は地文に密な条線が施されるもので、特に158・162の条線は細く鋭い。

170～189は地文に短沈線が用いられるもので、171はRLの単節縄文が併用される。

190～205は地文のみが施される。190・192・194～197はRL、199～202はLRの単節縄文、191・202・203は単節RLとLRによる羽状縄文、

205にはLの原体による擦糸文が施される。

206は無文の胴部破片である。

第IV群 (第81図207～248)

縄文時代後・晩期の土器を一括する。

207～211は無文の口縁部である。

212～215は称名寺式に比定されよう。213は沈線間に列点が施され、214・215はLRの単節縄文が磨り消されている。

216～225は堀之内1式段階のものである。地文は全て条線で、223には3本沈線によるモチーフが描かれる。

226～238は加曾利B式～曾谷式段階に比定される。226は外削ぎ状の口唇に刻目が施される。233～238は紐線文系の土器である。地文は230がRL、228・231・235がLRの単節縄文で、他は条線が多く用いられる。

239～246は同じく紐線文系の土器で、安行式段階であろう。240～244では隆帯上に浅い凹線が加えられる。

247・248は無文の鉢形土器である。247は内削ぎ状の口唇で、口唇下に2本の沈線が巡る。縄文時代晩期に属するものと思われる。

第V群 (第82図249・250)

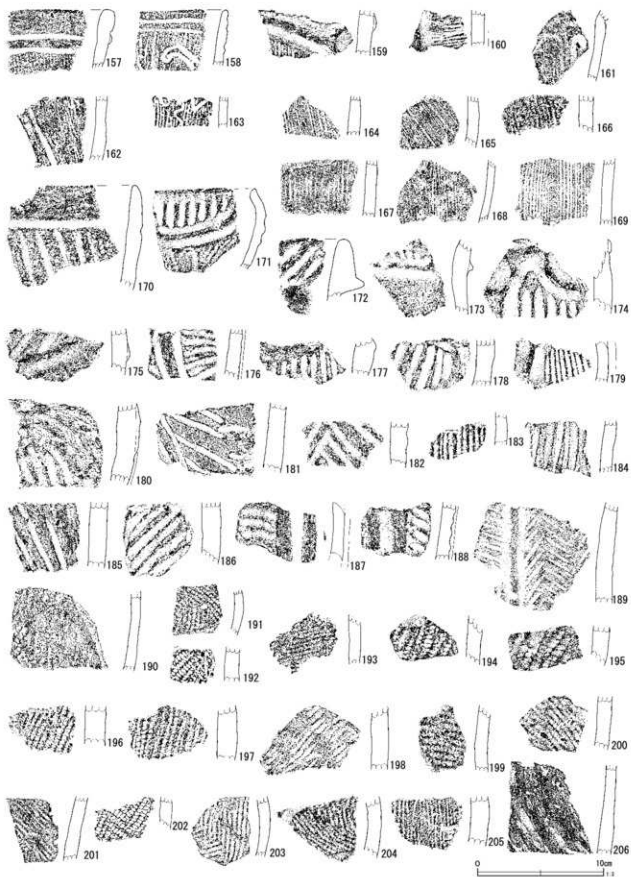
弥生中期と思われる土器が2点出土しており、何れも壺形土器の胴部破片と思われる。249は破片表面の剥落著しい。数本の沈線が横走する下位に鋸歯状のモチーフが描かれる。250は上位に鋸歯状の沈線文が描かれるようで、下位には集合沈線が横走する。

第VI群 (第82図251～263)

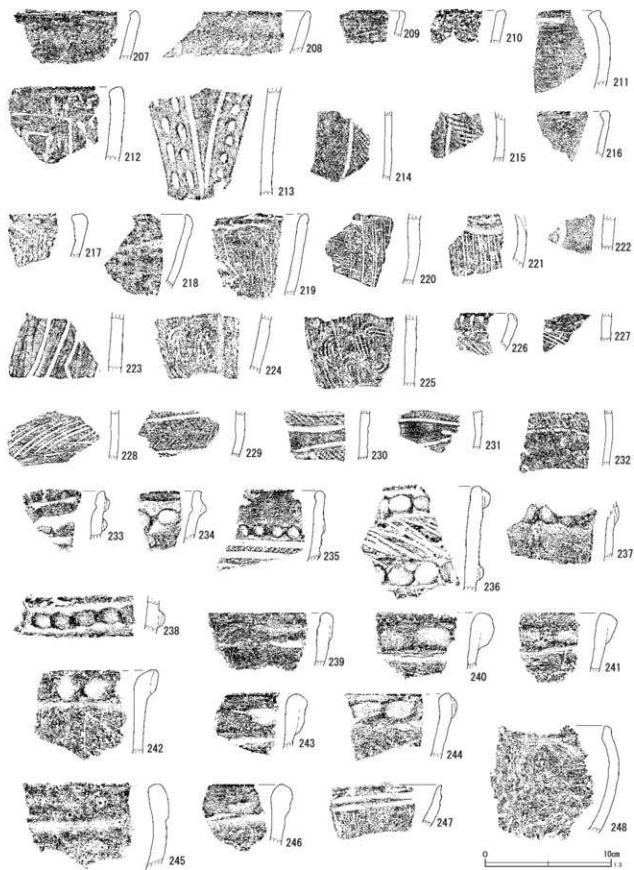
底部破片を一括した。251は器台と思われる。左端には円孔が穿たれる。252は尖底で、花積式の底部であろう。261～263は後期、他は中期に属するものと思われる。

縄文石器 (第82図264～第83図292)

264～267は石鏃で非常に丁寧に作られる。267

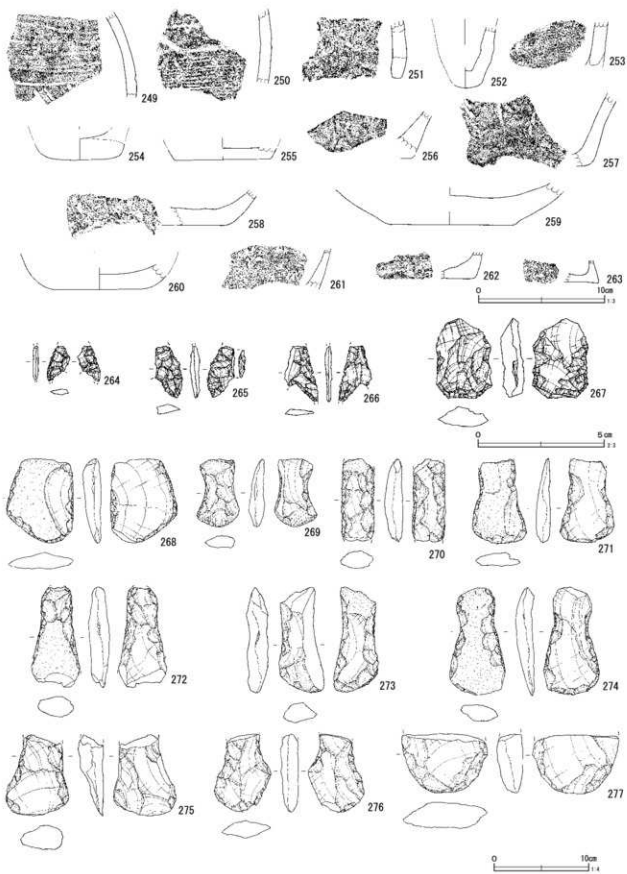


第80图 遺構外出土遺物(5)

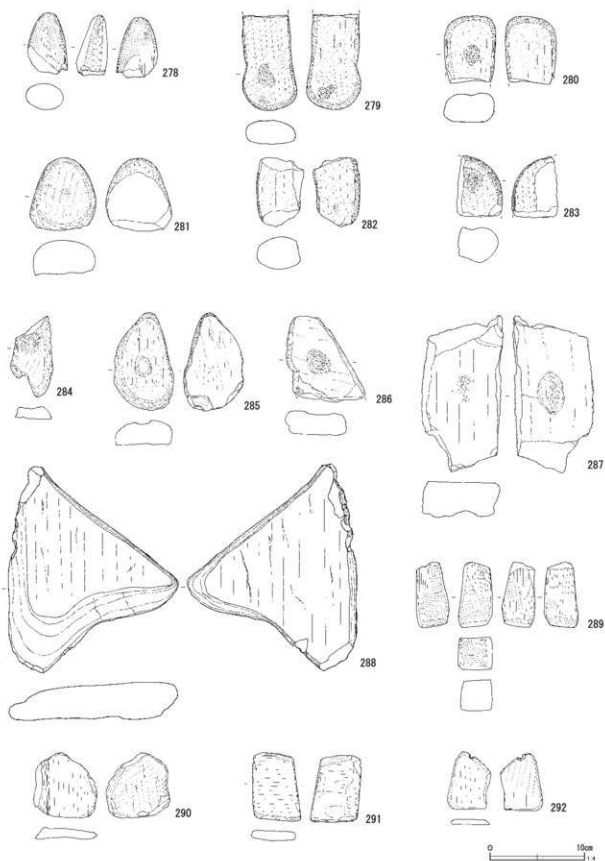


第81図 遺構外出土遺物(6)

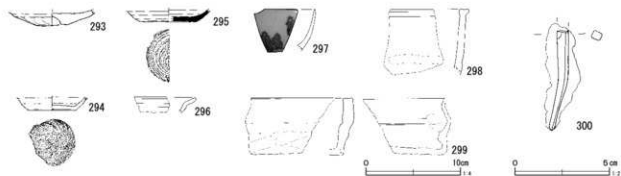




第82图 遺構外出土遺物 (7)



第83図 遺構外出土遺物(8)



第84図 遺構外出土遺物 (9)

第21表 遺構外出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土			焼成	色調	備考
264	F-5	石製品	石鏃		長さ 1.4cm	幅 1.0cm	厚さ 0.3cm	重さ	0.3g				黒曜石
265	F-5	石製品	石鏃		長さ 2.1cm	幅 1.1cm	厚さ 0.4cm	重さ	0.8g				黒曜石
266	F-5	石製品	石鏃		長さ 2.2cm	幅 1.4cm	厚さ 0.3cm	重さ	0.6g				チャート
267	E-5	石製品	石鏃		長さ 3.2cm	幅 2.4cm	厚さ 1.0cm	重さ	7.6g				チャート
268	D-5	石製品	スクレイパー		長さ 9.0cm	幅 7.1cm	厚さ 2.0cm	重さ	128.9g				砂岩
269	SD13	石製品	打製石斧		長さ 7.2cm	幅 4.6cm	厚さ 1.7cm	重さ	57.3g				砂岩
270	SD13	石製品	打製石斧		長さ 8.8cm	幅 3.6cm	厚さ 2.0cm	重さ	81.2g				砂岩
271	SD13	石製品	打製石斧		長さ 8.9cm	幅 5.8cm	厚さ 1.5cm	重さ	81.5g				砂岩
272	G・H 7	石製品	打製石斧		長さ 10.2cm	幅 5.2cm	厚さ 2.3cm	重さ	129.1g				砂岩
273	SD13	石製品	打製石斧		長さ 11.2cm	幅 4.8cm	厚さ 2.3cm	重さ	123.5g				砂岩
274	F-6	石製品	打製石斧		長さ 11.5cm	幅 5.9cm	厚さ 2.0cm	重さ	124.1g				砂岩
275	F-5	石製品	打製石斧		長さ 8.6cm	幅 6.6cm	厚さ 1.8cm	重さ	125.6g				ホルンフェルス
276	C-3・4	石製品	打製石斧		長さ 8.2cm	幅 6.0cm	厚さ 2.0cm	重さ	94.1g				ホルンフェルス
277	SD13	石製品	打製石斧		長さ 6.3cm	幅 9.1cm	厚さ 2.8cm	重さ	209.7g				ホルンフェルス
278	C-3・4	石製品	磨製石斧		長さ 6.6cm	幅 4.2cm	厚さ 3.4cm	重さ	112.2g				凝灰岩
279	SD13	石製品	磨石		長さ 10.2cm	幅 5.8cm	厚さ 2.8cm	重さ	244.1g				砂岩
280	E-5	石製品	磨石		長さ 7.2cm	幅 5.5cm	厚さ 3.1cm	重さ	203.9g				砂岩
281	C-3・4	石製品	磨石		長さ 7.7cm	幅 7.0cm	厚さ 4.6cm	重さ	289.5g				砂岩
282	SD13	石製品	磨石		長さ 7.4cm	幅 5.0cm	厚さ 3.5cm	重さ	171.4g				閃緑岩
283	G-6	石製品	磨石		長さ 6.5cm	幅 4.9cm	厚さ 4.4cm	重さ	188.1g				閃緑岩
284	F-6	石製品	磨石		長さ 8.6cm	幅 4.6cm	厚さ 1.5cm	重さ	56.7g				結晶片岩
285	SD13	石製品	磨石		長さ 10.4cm	幅 6.4cm	厚さ 2.8cm	重さ	247.8g				結晶片岩
286	F-6	石製品	石皿		長さ 9.1cm	幅 8.6cm	厚さ 2.6cm	重さ	229.0g				結晶片岩
287	F-6	石製品	石皿		長さ 16.6cm	幅 8.6cm	厚さ 3.9cm	重さ	841.2g				緑泥片岩
288	SD13	石製品	石皿		長さ 21.9cm	幅 17.9cm	厚さ 4.5cm	重さ	1479.2g				結晶片岩
289	D-4	石製品	砥石		長さ 7.0cm	幅 3.6cm	厚さ 3.5cm	重さ	130.0g				凝灰岩
290	C-3・4	石製品	砥石		長さ 7.0cm	幅 6.8cm	厚さ 1.3cm	重さ	77.4g				結晶片岩
291	C-3・4	石製品	砥石		長さ 7.2cm	幅 5.2cm	厚さ 1.2cm	重さ	88.7g				緑泥片岩
292	C-3・4	石製品	砥石		長さ 6.0cm	幅 4.5cm	厚さ 0.8cm	重さ	29.9g				緑泥片岩
293	C-3・4	土師器	高坏	5		3.0		白色結晶岩・片岩		普通	橙		
294	C-3・4	土師器	坏	5		4.7		白色結晶岩・片岩・白色斜状物質		不良	橙	自然焼防	
295	C-3・4	須恵器	坏	5		5.8		白色結晶岩		普通	灰白	南比企	
296	C-3・4	陶磁器	折口皿	5									
297	C-3・4	陶磁器	塊	5									
298	C-3・4	土器	焙烙鍋	5									
299	C-3・4	土器	焙烙鍋	5									
300	C-3・4	鉄製品	釘		長さ [5.5]cm	幅 0.5cm	厚さ 0.4cm	重さ 10.0g					

は未製品である。

268はスクレイパー。大きく自然面を残す。

269～277は打製石斧、278は磨製石斧の基部で

ある。269・276は側縁が折れる分銅形である。

279～285は磨石、286～288は石皿としたが、器

種分類は必ずしも明確ではない。

288～292は砥石であろう。

### 古墳時代以降 (第84図293～300)

293は古墳時代前期の土器である。土師器高坏の坏底部である。脚部との接合部が残る。

294・295は平安時代の土器である。294は酸化炎焼成による土師器の坏である。ロクロピキによ

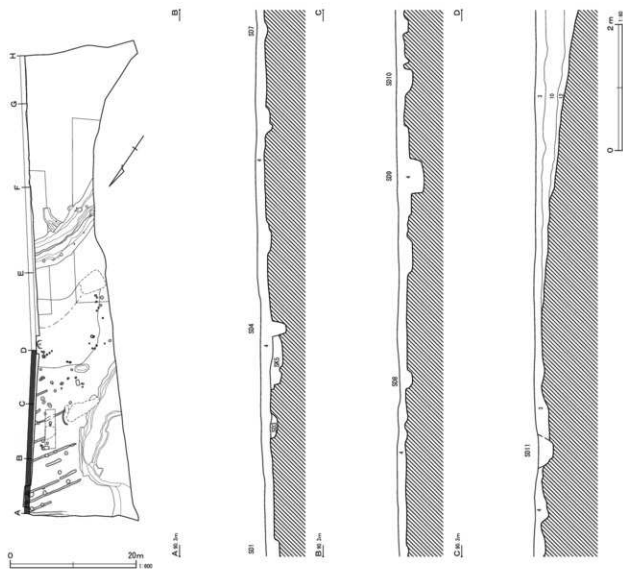
て成形され、底部は糸切り離しのままである。自然堤防の粘土が用いられている。10世紀前半。295は須恵器の坏である。白色針状物質(海绵骨針)を含むことから、南比企窯の製品と考えられる。9世紀前半。

296～299は近世の陶器等である。

## 3. 第2区土層調査

本遺跡では、縄文時代の遺構・遺物のほとんどが第2区の北側で検出されているが、同区北東壁面で土層の堆積状況を観察したところ、野中遺跡

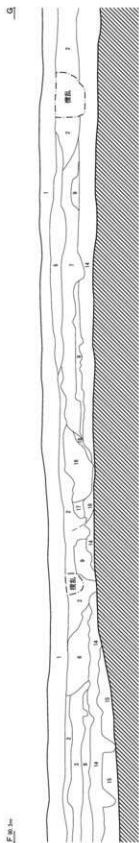
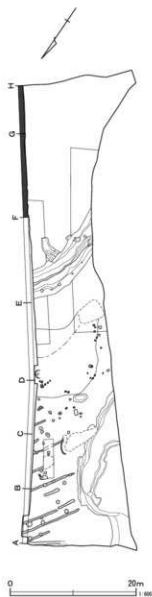
から続く南側に、度重なる河川の氾濫土が確認されるのに対し、北側3分の2程にはローム台地が残されていることが判明した。



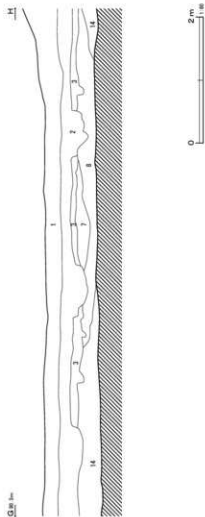
第85図 第2区土層断面(1)



第86图 第2区土层断面(2)



- 2区調査区東部土層
- 1 黒褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 灰オリーブ土
  - 4 灰オリーブ土
  - 5 灰オリーブ土
  - 6 オリーブ褐色土
  - 7 オリーブ土
  - 8 オリーブ褐色土
  - 9 暗褐色土
  - 10 暗褐色土
  - 11 暗褐色土
  - 12 暗褐色土
  - 13 濃い黒褐色土
  - 14 褐色土
  - 15 灰オリーブ土
  - 16 灰オリーブ土
  - 17 灰褐色土
  - 18 河色土
- 黄土
- 1 浅間火山灰含む 水田土層暗質土
  - 2 暗褐色土
  - 3 灰オリーブ土
  - 4 灰オリーブ土
  - 5 灰オリーブ土
  - 6 灰オリーブ土
  - 7 暗褐色土
  - 8 暗褐色土
  - 9 暗褐色土
  - 10 暗褐色土
  - 11 暗褐色土
  - 12 暗褐色土
  - 13 暗褐色土
  - 14 暗褐色土
  - 15 暗褐色土
  - 16 暗褐色土
  - 17 暗褐色土
  - 18 暗褐色土



第87図 第2区土層断面 (3)

## V 調査のまとめ

### 1. 成果と課題

#### (1) 野中遺跡

野中遺跡は、秩父北側の上武山地を背にした松久丘陵の北東端に立地する遺跡で、同丘陵に源をもつ猪俣川沿いの調査区である。出土資料としては、縄文時代早期から近世までの遺物が出土しているが、集落としての画期は、古墳時代前期及び奈良・平安時代に求められる。

古墳時代前期は、5軒の竪穴住居跡が発見されたが、特に注目されるのが第2区北西端で検出された第1号住居跡である。大幅な攪乱を受けているにもかかわらず、大量の土器が床面直上から出土しており、また装飾性の高い器台・高坏や東海系の土器が含まれている点も注意される。但し、必ずしも個々の残存率は高くなく、北東壁側に偏って出土していることなどから、遺棄されたものではなく、意図的な廃棄によるものと考えたい。また、炉跡が検出されず、住居跡自体が集落域の縁辺に位置していることを考慮すれば、通常の住居ではなく、何らかの廃棄の行為に関わる遺構であったものと思われる。

土器の廃棄に関しては、第3区中央部で発見された遺物集中区も注意を要する。これは、集落域を外れた氾濫原において、1,900点を超える古墳時代前期の土器片が広範囲に検出されたものであるが、遺物の垂直分布状況などによって、遺物集中区の西側に旧河道の存在が想定される。また、遺物のレベル差が10～30cmあることから、古墳時代前期のある程度の期間を通じて、繰り返し行われた廃棄の結果と考えられる。集落から一段下がった川の畔における継続的な土器の廃棄は、水に関わる何らかの祭祀的行為と理解され、またこれは、II章で触れた「こぶヶ谷戸祭祀遺跡」での儀礼のあり方とも関連するものであろう。

なお、古墳時代前期の遺物で、いわゆる装飾器

台・高坏とされるものが出土しているが、住居跡と遺物集中区合わせて8点（内透孔をもつもの3点）に及ぶ出土数は特筆に値しよう。いわゆる北陸系の装飾器台の流れをくむものと思われるが、県内でも出土例は少なく、特に透孔をもつもので全形のわかるものは、同じく美里町日の森遺跡（菅谷他1978）をはじめ、上尾市稲荷台遺跡（書上1994）、坂戸市広面遺跡（村田1990）・中耕遺跡（杉崎1993）、東松山市下道添遺跡（坂野1987）・反町遺跡（福田他2009）、桶川市西台遺跡（塩野他1970）・前原遺跡（宮井2010）などが挙げられるにすぎない。

奈良・平安時代においても、集落の立地は古墳時代前期と大きく変わらず、8世紀後半から9世紀初めに比定される住居跡が5軒（第3・4・7・8・9A号住居跡）検出されている。規模・主軸方向など規格性の高い一群であり、地形的には東側への集落の展開が予想される。また、第4号住居跡からは2点の「古家」の墨書土器が出土しており、集落内において「古家」と呼称される「家」の存在を示唆するものと思われる。なお、墨書「古家」については、本章3節で詳解する。

#### (2) 瘠ヶ谷戸遺跡

瘠ヶ谷戸遺跡は、野中遺跡の北西に隣接する遺跡で、今回の調査では、野中遺跡に連続する調査区が設定されている。南半は野中遺跡から続く低地帯で、溝跡（小河川）と土壌が検出されたにすぎないが、北半には古い台地が残されており、縄文時代の土壌が検出された。但し、集落としての位置づけは難しく、ピット群も柱穴として住居跡を特定するには至らなかった。

出土した遺物は、縄文時代早期から近世までに亘るが、量的には圧倒的に縄文時代中期から後期の土器片が多い。但し、ほとんどが包含層からの

出土であり、しかも何れの土器片も磨減が著しく、接合する破片も少ないなど、意図的な廃棄によるものとは考え難い。これを河川の運搬・氾濫によ

るものとすれば、集落自体は猪俣川あるいは天神川上流の丘陵部に想定されるもので、今後の調査の参考となる。

## 2. 土錘について

漁労具としての土錘は縄文時代から知られるが、特に棒に粘土を巻き付けて造る管状土錘は、弥生時代以降、網の下縁に吊り下げた錘として広く使われるようである。

野中遺跡からも31点の管状土錘が出土しており、1点は第4号住居跡であるが、他は全て第7号住居跡からの出土である。因みに、兩住居跡は約2.5mを隔てて東西に隣接するが、遺構の規模や主軸方位も近似し、出土遺物からも同時期に存在したと考えられるものである。

土錘の出土例については、近年、上里町中堀遺跡(田中・末木1997)、旧川本町如意遺跡(栗岡2000、山本他2002、岩瀬他2008)・如意南遺跡(栗岡2000)・川端遺跡(山本他2002)など、県内でも大量の出土例が相次ぎ、その3,000点に及ぶ出土資料を基に、分類も試みられている。本遺跡の資料についても、基本的に如意遺跡(岩瀬他2008)の分類基準に従って報告しておきたい(但し、胎土のみは本書独自の基準によるものとし、また「重さ」の項目を追加した)。

分類に当たっては、①形状、②端部処理、③長さ、④重さ、⑤胎土の5点について下記のとおり記号化し、それらを組み合わせて示した(第41図・第11表)。

### ①形状

A類：上端から下端までの径が概ね一定であるが、端部でやや細くなり、長さに対する径の割合が小さく細長いもの。

B類：A類に比して、側面中央部分がやや膨らむもの。

B'類：側面の膨らみが片方だけのもの

C類：中央部が大きく膨らみ、上端と下端が

絞ったように細くなるもの

D類：上端から下端までの径が一定で、管玉状になるもの。

E類：上端と下端の径が一定で、長さに対す

	a	b
A		
B		
B'		
C		
D		
E		

第88図 土錘分類図



る径の割合が大きく、太く短いもの。

#### ②端部処理

- a：端部に特に加工の認められないもの。
- b：ヘラ状工具によって両端部を面取りし、平らな面を作り出すもの。

#### ③長さ

- I：長さ9cm以上のもの
- II：長さ8cm前後のもの
- III：長さ7cm前後のもの
- IV：長さ6cm前後のもの
- V：長さ5cm前後のもの
- VI：長さ4cm前後以下のもの

#### ④重さ

- S：重さ2g未満のもの
- M：重さ3g未満のもの
- L：重さ4g未満のもの
- X：重さ4g以上のもの
- Z：重さ10g以上のもの

#### ⑤胎土

- A：比較的緻密で、含まれる砂粒も微細。
- I：胎土はAに近いが、大粒の砂粒を含んでひび割れが生じる。
- U：砂粒少なく、非常に緻密。硬質感あり。

このような分類の結果、第11表にも明らかなように、第7号住居跡出土の土錘では

1. 端部を面取りしたものは一点もない
2. 形状はE類の1点を除けばA類3点、C類3点に対し、B類は23点と圧倒的に多い
3. 大きさでも5cm程度のものが3点あるほかは、ほとんどが4cm以下の小型品である

など、同一遺構の出土資料としては当然ながら、極めて均質な状況（緩い紡錘状を呈する小型品が主体を占める）が見てとれる。

但し、ここで注意されるのがE類とした1と、黒色小型の9点（17～19・22・25・26・28～30）であろう。

I（E類）は、他の土錘とは形状・大きさとも一線を画すものである。また、如意遺跡では第440号住居跡1軒から5点出土しているのみで、伴出土器から古墳時代後期に比定されているものである。しかし、本遺跡では当該時期の資料は欠落しており、また1点のみの出土であることから、他時期の混入（時期差）ではなく、異なった用途に用いられた可能性を考えたい。なお、1は両端部が同一方向に破損しており、漁網下端の錘ではない使用方法も考えられよう。

また、17～19・22・25・26・28～30の9点は、重さ2g未満、長さ29～34mmと特に小さく、胎土も黒色・緻密で焼成もよいなど、極めて均質である。これらも、他の土錘とは明らかに異なる一群であることから、その用途もまた異なるものであったと思われる。

なお、第7号住居跡は出土遺物から8世紀末から9世紀初めに比定されるが、同時期（如意遺跡分類のⅪ期が相当する）の土錘出土例としては、如意南遺跡第24号住居跡が挙げられる。同住居跡からは31点の土錘が出土しているが、全てB類に分類されるものであり、そのうち27点が住居跡南西コーナーからまとまって出土している。漁網の錘としての土錘は、当然ながら装着した網とともに廃棄されることが多いため、本例も同一の網に装着されていた可能性が極めて高く、錘の形状・重さ等から網の用途を推定する上で貴重な資料と言えよう。また、この27点の重さはおおよそ6g～14gで、平均でも10.37gあり、本遺跡の資料とは大幅に異なっている。因みに、本遺跡第7号住居跡出土の30点から上記1（E類）と欠損品、及び黒色・小型のものを除いた19点の重さは3.1g～4.8gで平均は約3.9gである。従って、土錘の重さからも如意南遺跡例とは異なる用途が考えられよう。また、全体的に軽いものが多いことから、刺し網漁よりもむしろ投網漁の方がより蓋然性が高いかもしれない。

### 3. 墨書土器「古家」について

「古家」と記された2点の土器が、野中遺跡から出土した。2点とも第4号住居跡からの出土である。「古家①」(第38図1)は、土師器坏の底部外面、「古家②」(同図3)は、須恵器坏の口縁部側面に記された。前者は第6画以後を欠損するが、「古家」と判断した。また、後者も墨痕が薄く、第7画以後は不明瞭だが「古家」と判断した。

まず筆跡を確認する。「古家①」は、全体を平行四辺形におさまるように描く(第89図左)。「古」の第1画は細く右斜め上に突き上げるように書き、第2画は垂直に筆が降ろされ、そのまま払われる。第3画も第2画と同様の筆使いである。第4画は第1画と同じく細い線が並行して進み、「マ」を書くように第4画が続く。

「家」の第1画は、小さく打たれた点が45度左下へ払われ第2画に続く。第2画は斜め左下へ小さく向かう。第3画は墨痕が薄く分かりにくい。筆の穂先で細く入り強く止めた後、小さくはねる。「ウ」冠の中は墨痕が薄い。

「古家②」(第89図右)は、台形状に描く。まず「古」の第1画は、押し付けた筆を水平に引き、確実に止める。第2画は「ノ」の字状に払う。第3画は細く入り次第に太くなって止められる。線はやや内向きとなる。第4画は、第5画と連続して「口」のように書かれる。第1画に並行して細く書かれ最後は払われる。第3画と第5画の一部が、器の表面に施された円形の暗文(ヘラミガキ)によって墨が乗らず、その部分だけ墨痕が無い。

「家」の第1画は、小さく入ったのち丸みを帯びて小さく払われる。第2画は、筆を立てて力強く入り、垂直に引かれ小さく止める。第3画は、第4・5・6画と連続して書く。第3画は斜め右上に細く突き上げながら、ジグザクに折り返す。第8画は小さく打ち払う。

以上のように「古家①」と「古家②」では、文字の全体構成や筆使いが大きく違う。別人による



第89図 「古家」の筆順

書写と考えたい。

次に「古家」について考える。まず読み方は、「ふるや」または「ふるいえ」、「ふるけ」などが考えられる。「家」は、「や」または「やか」「やけ」などと呼んでいたことから、ここでは「ふるや」と考えておく。

字義は古くからある家、元々の家、古くなった家などである。「古家」は、景観的な「古い家」か個人、または特定の集団を「古家」（家号）と呼んだのかもしれない。

その景観も竪穴住居を「古家」と呼んだか、数軒の竪穴住居と未発見の掘立柱建物を含めた建物群かもしれない。

しかし、2点の別筆による墨書土器が、一軒の竪穴住居跡から出土した意義は大きい。二人の「古家」と記した者が、この竪穴住居跡の人物とかわっていたからである。

ところで、「家」と記す墨書土器は全国で608点の出土が報告されている。関東地方は、その中で235点と全体の4割を占め、その圧倒的多数は関東地方にあることが分かる。

ここでは、「家」関連の墨書土器について、「地名」「位置名称」「新日名」「点景名」「職掌名」「氏族名」などに分類し、事例を列挙しておく。

まず、①地名には、千葉県東金市作知遺跡の「山口家」（山武郡山口郷）や同県印旛郡印旛村油作第2遺跡の「羽元家」（殖生郡の元家）、茨城県鹿の子C遺跡「信太家」（信太郡）、千葉県佐倉市江原台遺跡「中村家」（印旛郡中村郷）などがある。

②位置名称には、熊谷市宮町遺跡「上家」、狭山市宮地遺跡「下家」、茨城県土浦市念代遺跡「中家」、熊谷市北島遺跡「南家」、「後家」、茨城県真壁町八幡前遺跡「後家」などがある。

③新日名には、茨城県鹿嶋市須賀条里遺跡「新家」、同県真壁町小山遺跡「本家」、千葉県山武郡芝山町高田権現遺跡「新家」、栃木県河内郡上三川町大町遺跡「古後家」、千葉県八千代市白幡前遺跡「新家」

古」などがある。

④点景名には、埼玉県北島遺跡「林家」、千葉県市原市池ノ谷遺跡「岡木家」などがある。

⑤職掌名には、茨城県石岡市鹿の子C遺跡「矢作家」、茨城県鹿嶋市神野向遺跡「祝家」、埼玉県坂戸市宮町遺跡「路家」、茨城県日立市金木場遺跡「午家」（塚家との関連か）、栃木県宇都宮市飛山城跡「峰家」などがある。

⑥氏族名には、茨城県東茨城郡常北町吹上古墓「日下西家」（日下部の西家）がある。

⑦これらとは別に、地域の拠点（中心的）な「家」を「大家」と記した墨書土器がある。埼玉県本庄市将監塚・古井戸遺跡や千葉県佐原市長部山遺跡、同市仁井宿東遺跡、同市吉原山王遺跡、東京都北区中里遺跡、栃木県真岡市鶴田A遺跡などから出土している。地域を代表する点では、①の地名も「大家」と共通する。

なお、野中遺跡の「古家」と共通するのは、③の新日名にある栃木県大町遺跡の「古後家」と千葉県白幡前遺跡「新家古」だけである。また、国内のほかの遺跡から「古家」の出土はない。

これらの「家」関連の墨書土器は、関東地方では8世紀後半から9世紀前半の竪穴式住居跡から出土する。野中遺跡の2点の「古家」は、8世紀末から9世紀初頭にかけての土器であり、その中ではやや古い段階の土器である。

ところで、「家」と書かれた土器の出土は、「郡家」や「塚家」「郷家」など地方官衙との関連も推定させる。しかし、その大半が一般的な竪穴住居跡からの出土である。郡家が衰退に向かう9世紀前半に集中することから、「家」関連の墨書土器は、より多様で多面的な考察が必要である。

少なくとも野中遺跡の「古家」は、古代の那珂郡水保（井俣）郷（美里町猪俣）に「古家」呼ばれた建物や「家」（家族）が、存在したことを今に伝える資料といえよう。

## 引用・参考文献

- 石塚和則他 1986『将塚遺跡—縄文時代編—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第63集
- 岩瀬 謙・大谷 徹・栗岡 潤 2008『如意遺跡IV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第285集
- 上野真由美 1997『広木上宿遺跡—縄文時代編—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第185集
- 岡本幸男 1983『白久・柳町・森浦・向田・向・東宮平・峯・栗山』美里町遺跡発掘調査報告書 第1集
- 小沢国平 1960『こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書』児玉郡美里町教育委員会
- 小淵良樹他 1980『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告書 第40集 埼玉県遺跡調査会
- 書上元博 1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第139集
- 栗岡 潤 2000『如意／如意南』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第241集
- 栗原文蔵・小林達雄 1961『埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置』『考古学雑誌』第47巻 第2号
- 小林達雄・安岡路洋 1979『縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相—埼玉県大里郡岡部町水久保遺跡—』『埼玉県史研究』4 埼玉県史編纂室
- 駒宮史朗他 1979『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第38集 埼玉県遺跡調査会
- 塩野 博・増田逸朗 1970『西台遺跡の発掘調査』桶川町文化財調査報告IV
- 菅谷浩之他 1977『北貝戸遺跡』美里町教育委員会
- 菅谷浩之 1978『日の森遺跡』美里町教育委員会
- 菅谷浩之 1976『宮下遺跡・樋之口遺跡』美里町教育委員会
- 杉崎茂樹 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第125集
- 高橋清文・石丸敦史 2009『将塚遺跡第3次調査』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第16集 本庄市教育委員会
- 田中広明・末木啓介 1997『中郷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第190集
- 利根川章彦 1999『北陸系装飾器台の系譜について的小論』『研究紀要』第15号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢良一・逸見恵大・田島康弘 2000『上野遺跡(A・B地点)』美里町遺跡発掘調査報告書 第11集
- 中沢 仁・中沢良一 2009『広木大町古墳群後山王地区II 後山王遺跡F地点』美里町遺跡調査会報告書 第8集
- 中島 宏 1981『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
- 中島 宏他 1980『伊勢塚・東光寺裏』埼玉県遺跡調査会報告書 第26集 埼玉県遺跡調査会
- 中村倉司他 1979『白石城』埼玉県遺跡調査会報告書 第36集 埼玉県遺跡調査会
- 長滝歳康 1991『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書 第7集
- 長滝歳康 1992『後山王遺跡B・C地点』美里町遺跡調査会報告書 第1集 美里町遺跡調査会
- 長滝歳康 2002『白石古墳群 登所地区・中原地区』美里町遺跡発掘調査報告書 第13集
- 長滝歳康・中沢良一 2005『広木大町古墳群後山王地区 後山王遺跡E地点』美里町遺跡調査会報告書 第6集
- 長滝歳康・中沢良一 2005『南志度川遺跡 志度川古墳 志度川遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書 第16集
- 長滝歳康・中沢良一 2006『北貝戸遺跡・南十条遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書 第17集
- 長滝歳康・中沢良一・中沢 仁 2007『北谷戸遺跡・下道堀遺跡・上耕地遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書 第18集
- 長滝歳康・中沢良一 2010『村後遺跡B地点・大仏庵寺跡・広木上宿遺跡II』美里町遺跡発掘調査報告書 第19集
- 根岸博美・逸見恵大・中沢良一 2001『諏訪林古墳・池下遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書 第12集
- 坂野和信 1987『下道堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第67集
- 福田 聖・赤熊浩一 2009『反町遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第361集
- 本庄市 1976『本庄市史 資料編』
- 宮井英一 1989『古井戸遺跡—縄文時代編—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第75集
- 宮井英一 2010『前原／大沼』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第373集
- 村田健二 1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集
- 柳田敏司・菅谷浩之・増田逸朗 1980『狐藪神社前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第39集
- 山本 靖他 1996『広木上宿遺跡—古代・中世編—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第170集
- 山本 淑・岩瀬 謙 2002『如意III／川端』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第276集
- 横川好富他 1977『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集 埼玉県教育委員会
- 横川好富他 1980『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集 埼玉県教育委員会
- 吉村武彦 2002『古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究』平成11～13年度科学研究費補助金